
研究・社会連携白書 2024

Okayama University of Science



学校法人 加計学園

岡山理科大学

目 次

1 白書発刊にあたって	01
2 活動方針	02
2.1 社会連携・社会貢献に関する方針	02
2.2 組織ならびに業務	02
3 研究・社会連携委員会	04
4 外部資金の獲得状況	09
4.1 科研費助成事業	13
4.2 各種助成金（財団/公的資金等）	17
4.3 共同研究	22
4.4 受託研究	28
4.5 寄付金	33
5 学内共同研究の活性化に向けた取り組み	38
5.1 岡山理科大学プロジェクト研究推進事業	38
5.2 大型機器選定	40
5.3 プロジェクト機器選定	41
5.4 キャンパス間連携の取り組み	42
6 コンプライアンスへの取り組み	43
6.1 不正行為・不正使用防止の取り組み	43
6.2 安全保障輸出管理の取り組み	44
7 （産学官金連携に向けた）研究シーズの紹介	46
7.1 OUS 研究者ナビゲーター	46
7.2 OUS フォーラム	48
7.3 各種研究・展示発表会への参画	62
7.4 ブランディング事業の展開	65
8 研究シーズの地域還元活動	67
8.1 市民公開講座	67
8.2 研究・社会連携機構各施設の活動報告	74
9 知的財産	86
9.1 職務発明判定委員会の活動	86
9.2 特許出願	88
9.3 知的財産権セミナー	94
10 産学官金間の協定締結	95
11 産学官金連携活動	98
11.1 地域における主な産学官金連携活動	98
11.2 産学官金連携推進における外部団体役員一覧	101
12 受賞者	104
13 活動報告	108
14 人事の推移	111
15 研究・社会連携白書編集を終えて	114
巻末【参考資料】 研究・社会連携機構事業計画	

1. 白書発刊にあたって

2年間の振り返りとこれからの研究・社会連携

副学長 研究・社会連携機構長 南 善子



本白書は、本大学の研究・社会連携機構の2023～2024年度の取り組みをまとめたものとなっております。「岡山理科大学ビジョン2026」に掲げた「教育を支える個性的で魅力ある研究を推進する大学」と「地域の課題解決や活性化に貢献し、地域と共に発展する大学」を目指し、日々活動を続けてまいりました。本大学が誇る4つの研究ブランド「ワイン発酵科学」「恐竜学」「好適環境水」「いきものQOL」に関する研究活動は、多くの地域貢献に活用されてきました。加えて、音波を使った獣害対策では、野生動物との共生を目指す新たな試みも始まっています。

また、科研費の獲得金額は、中四国の私立大学で5年連続して1位を維持しております。学内研究者の支援体制についても、科研費獲得の支援に加え、2024年度からは国際ジャーナル投稿支援事業を立ち上げ、質の高い論文やオープンアクセス論文への投稿を促進しております。さらに、本大学の研究者と多様な研究シーズを守るため、経済産業省および文部科学省の指導に基づき、2024年度には安全保障輸出管理の体制を整備しました。これに伴い、教職員に対して数回にわたるFD・SD研修を実施しました。加えて生涯学習の拠点形成を目指し、リカレント教育・社会人教育プログラムへの取り組みも開始いたしました。“人生100年時代”を迎え、今後これらの取り組みをさらに加速させる必要性を強く感じております。

今後、研究支援と社会貢献を積極的に推進してまいります。本機構の活動に対し、引き続きご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

丙午の年に問う、大学の使命

研究・社会連携センター長 折田 明浩



本白書を編纂している2026年は、干支でいう「丙午（ひのえうま）」の年にあたります。一周期前の丙午である1966年には、迷信により出生数が大きく減少するなど、社会に少なからぬ影響を与えました。今日ではそうした考え方は過去のものとなり、社会はデジタル化や働き方改革、学びの多様化を背景に、より合理的で柔軟な方向へと進化を続けています。

このような時代の変化の中にあっても、本学は「技術者として社会に貢献できる人材を育成する」という理念のもと、教育・研究・社会貢献活動に一体的に取り組んでまいりました。学生たちは大学で培った知識と経験を糧に、それぞれの進路で力を発揮しており、その成長は私たちにとても大きな喜びです。

一方で、少子高齢化や地域産業の担い手不足、環境・エネルギー問題など、地域社会が直面する課題は年々複雑化しています。こうした中、地方大学には高度専門人材の育成に加え、「知の拠点」として地域とともに課題解決に取り組む役割が求められています。本学では、恐竜学博物館や出張講義、市民公開講座、リカレント教育などを通じ、世代を超えた学びの循環を創出してきました。

研究・社会連携センターは、今後も産学官連携を軸に、実社会に資する知の創出と還元に取り組んでまいります。本白書が本学の歩みと成果への理解を深める一助となれば幸いです。

2. 活動方針

2.1 社会連携・社会貢献に関する方針

「岡山理科大学ビジョン2026」に掲げる5つの柱に挙げられた「教育を支える個性的で魅力ある研究を推進する大学」および「地域の課題解決や活性化に貢献し、地域と共に発展する大学」を実現するため、2022年度から始まった第Ⅱ期アクションプランに沿って、1) 地域産業活性化、2) 地域の学びの拠点形成、3) 地域を支える人材の輩出を新たに中期目標に掲げ事業を推進した。

第Ⅱ期アクションプラン（2022年度～2026年度）における 地域社会との連携に関する中期目標

- 1) 地域産業活性化
包括連携協定を締結した自治体等との緊密な連携を推進するとともに、協働によって地域の課題解決やイノベーション創出に寄与する。
- 2) 地域の学びの拠点形成
本学の保有する知的資源を広く開放することによって、児童・生徒、社会人、並びに一般市民のための学習機会を提供するとともに、知的交流拠点を形成する。
- 3) 地域を支える人材の輩出
地域の課題解決に向けて考え、行動できる人材など、地域の担い手となる次世代のリーダーを輩出する。

これらの中期目標を達成するための事業を包含し、産学官金連携、地域貢献、研究推進・外部資金獲得、知的財産管理、研究シーズ発信などの活動を研究・社会連携センターと研究・社会連携部が連携し行っている。

2.2 組織ならびに業務

本学は、1999年度、岡山県内の大学では最も早く、産学官の連携を目的とした学外連携推進室を設置した。その後、2016年度組織改編により、研究推進機構を設置し、教育研究組織として研究連携支援センター、その中の事務組織として研究連携支援室が整備された。その後、組織名称の変更により、2019年以降、教育研究組織は研究・社会連携センター、事務組織は研究・社会連携部として活動している。

本書では、2023～2024年度の研究・社会連携センターおよび研究・社会連携部の活動として、本学における基礎研究の推進、研究成果の活用や新技術の実用化、外部資金の獲得などの取り組みを報告する。2024年度における主な業務および組織メンバーを示す。

表 2-1 研究・社会連携センターおよび研究・社会連携部の主な業務

区分	内 容
産学官金連携	1) 産学官金ニーズと研究シーズのマッチング（企業等と研究者とのコーディネート） 2) 産学官金との共同研究、受託研究の推進 3) 産学官金連携会議への専門委員としての参画 4) 研究シーズの発信 ・OUS フォーラムの開催（大学の研究成果の紹介） ・OUS 研究者ナビゲーター、産学官金連携情報誌（LIAISON）の発刊 ・イノベーション・ジャパン、新技術説明会等での研究者による研究成果発表支援 5) 学外機関との連携協定の締結
地域貢献	1) 地方公共団体、各種団体への委員やアドバイザー等への就任 2) 地方公共団体が行うまちづくり事業への参画 3) 企業等からの技術相談への対応 4) 大学施設・設備の地域社会への開放 5) 生涯学習の取組み
研究支援・外部資金獲得	1) 各種研究費・助成金に係る情報収集、学内説明会の開催、申請業務、公的研究資金の適正な運用に関する業務及び事務取扱（科学研究費助成事業、省庁・国立研究開発法人等の公的研究費、各種財団研究助成金） 2) 文部科学省の大型プロジェクト事業等の申請および企画運営業務 3) 学内公募型プロジェクト研究推進事業の運営 4) 公的資金の適正な運用のための体制整備、研究倫理・コンプライアンスに係る教育の企画、運営 5) 安全保障輸出管理に関すること
知的財産権	1) 発明の啓発活動（特許セミナー、研究者との交流） 2) 発明の権利化（職務発明委員会） 3) 職務発明の特許出願及び技術移転（共同出願、独自出願、実施許諾）
学内調整	1) 国・自治体等が実施する各種調査に係る報告書作成 2) 研究・社会連携機構運営委員会の運営 3) 研究・社会機構部会の運営 4) 研究・社会連携委員会の運営

表 2-2 2024年度研究・社会連携センターおよび研究・社会連携部メンバー

職 名	氏 名	主たる担当業務
センター長	折田 明浩	全体統括者（工学部教授）2018年度就任
センター次長	林 良太	副統括者（工学部教授）2022年度就任
センター次長	濱田 隆宏	副統括者（生命科学部准教授）2024年度就任
センター教授	中村 修	産学連携コーディネータ（研究・社会連携センター教授）2014年度就任
部 長	御倉 賀恵	管理運営全般 2024年度着任
参 事	村上 和彦	科研費支援 2021年度着任
課 長	小野 博之	副管理運営全般 2024年度着任
コーディネータ	桑本 誠	産学連携コーディネーター、知的財産権 2016年度着任
コーディネータ	守屋 雅夫	産学連携コーディネータ 2023年度着任
コーディネータ	竹原 誠	産学連携コーディネータ 2024年度着任
事務職員	倉藤 美紀子	産学官金連携（契約業務等）2018年度着任
事務職員	太田 謙	産学官金連携（広報等）2017年度着任
事務職員	埋見 将弘	産学官金連携（契約業務等）2023年度着任
事務補佐	井上 祐貴子	事務担当 2024年度着任
事務補佐	坪田 あずさ	事務担当 2022年度着任

3. 研究・社会連携委員会

研究及び社会連携を本学の取り組みとして推進するため、主として産学官との連携に関する事項を審議する目的で委員会を設けている。本委員会の役割を示した規程は下記のとおりであり、2022年度に改定されたものである。

○岡山理科大学研究・社会連携委員会規程

（設置）

第1条 岡山理科大学に岡山理科大学研究・社会連携委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

（目的）

第2条 本委員会は、岡山理科大学における研究の推進及び学外との連携に関する事項を審議することを目的とする。

（組織）

第3条 本委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 副学長
- (2) 研究・社会連携機構長
- (3) 研究・社会連携機構副機構長
- (4) 学部長、研究科長の代表者1名
- (5) 学科・コース代表
- (6) 研究・社会連携機構所属の研究所、センター及び博物館の長
- (7) キャリア支援センター長
- (8) 入試広報センター長
- (9) 大学事務局長
- (10) 研究・社会連携部長
- (11) 研究・社会連携センター教授及び次長以上の職の者
- (12) その他委員長が必要と認めた者

（任期）

第4条 委員の任期は1年とし、欠員が生じたときの補充委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長等）

第5条 本委員会に委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長は、副学長をもって充てる。
- 3 副委員長は、委員長が指名する。
- 4 委員長は会務を総括し、副委員長は委員長を補佐する。
- 5 委員長に支障があるときは、委員長の指名した副委員長がこれを代行する。

（会議の招集及び成立）

第6条 委員長は、委員会を招集し議長となる。

- 2 委員会は、委員の半数以上の出席をもって成立する。

（審議事項）

第7条 本委員会は、次の事項について審議する。

- (1) 産学官金の連携事業に関すること。
 - (2) 地域との連携業務に関すること。
 - (3) 研究成果に関すること
 - (4) 公的研究資金に関すること
 - (5) 知的財産の基本方針に関すること
 - (6) その他必要事項
- 2 本委員会の議事は、議長を除く出席委員の過半数の同意（可否同数の場合は議長の決すると

ころ)をもって本委員会の案とする。

(部会等)

第8条 本委員会は、必要に応じて作業部会（以下「部会」という。）を設置することができる。

2 部会の委員は、学内の教職員から委員長が指名した者とする。

3 部会は、本委員会より依頼された事項・案件について、審議・検討・作業等を行う。

4 部会の審議・検討・作業結果は、本委員会に答申する。

(報告)

第9条 審議の結果は、委員長が学長に報告し、委員が学部教授会等にて報告する。

(細則等)

第10条 岡山理科大学研究・社会連携委員会規程（以下、「本規程」という。）に定めるものの他、本委員会に関して必要な事項は、本委員会が別に定める。

(事務)

第11条 本委員会の事務は、研究・社会連携部において行う。

(改廃)

第12条 本規程の改廃は、本委員会及び大学協議会の審議を経て、学長が決定する。

附 則

この規程は、平成15年7月10日から施行する。

附 則

この改正規程は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この改正規程は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この改正規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この改正規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この改正規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成31年4月1日）

この改正規程は、平成31年4月1日から施行する。

附 則（令和4年1月31日決裁）

この改正規程は、令和4年4月1日から施行する。

2023年度及び2024年度に実施された委員会での議案を次に示す。

2023年度 研究・社会連携委員会議事

●第1回 2023年5月31日

- | | |
|------|---|
| 議案 | 1) 構成員の確認について
2) 副委員長の選任 |
| 報告事項 | 1) 令和4年度研究・社会連携部及びセンターの業務報告について
2) 令和4年度外部資金の獲得状況について
3) 令和5年度科研費採択状況（速報）
4) OUSフォーラム2023の開催について |
| 依頼事項 | 1) 新任教員に対してのヒアリング
2) 学生を対象とした知財権セミナーについて
3) 学科ごとのSDGsの取り纏めについて |

●第2回 2023年7月27日

- | | |
|------|---|
| 議案 | 1) OUSフォーラム2023 実施について |
| 報告事項 | 1) 令和5年度コンプライアンス・研究倫理教育の受講状況について
2) 海外との連携等に関する実績調査結果の報告
3) 学科ごとのSDGsの取り纏めについて |
| 依頼事項 | 1) コーディネータによる新採用教員の研究室訪問について
2) 令和6年度科学研究費助成事業申請に係る学内の支援体制について
3) おかやまテクノロジー展（OTEX）2023 |

●第3回 2023年9月13日

- | | |
|------|--|
| 議案 | 1) OUSフォーラム2023 開催について |
| 依頼事項 | 1) OUSフォーラム2023 案内状、パンフレット送付先依頼
2) 令和5年度教職員および学生を対象とした知的財産セミナーと学生を対象とした知的財産権セミナーについて
3) コーディネータによる新採用教員の研究室訪問について
4) おかやまテクノロジー展2023 について
5) MICEコンテンツ見本市【岡山城天守】（ご案内）
6) 岡山理科大学 URA 島田氏による FD 講演会の開催について（ご案内） |
| 報告事項 | 1) SDGsについて |

●第4回 2023年11月1日

- | | |
|-------|---|
| 議案 | 1) OUS フォーラム 準備のお願いと今後の予定 |
| 報告、依頼 | 1) 令和5年度教職員および学生を対象とした知的財産セミナーと学生を対象とした知的財産権セミナーについて
2) コーディネータによる新採用教員の研究室訪問について
3) 令和6年度科研費応募状況について |

●第5回 2024年2月7日

- | | |
|----|---|
| 報告 | 1) OUS フォーラム 2023
2) 中国地方整備局シーズ照会
3) 令和6年度科研費応募状況について
4) 令和7年度科研費公募スケジュール
5) 2024年度岡山理科大学における研究不正防止に関する取り組み年間スケジュール（予定）
6) 特許出願状況と知財セミナー |
| 依頼 | 1) SDGs 情報の更新および情報の取り纏めについて
2) リカレント教育実施に係る教育コンテンツの提供について
3) 2024年度プロジェクト研究推進事業への応募について
4) OUS研究者交流会 |

- 5) 研究成果合同発表会
- 6) 研究データの保存等に関する自己確認の実施について
- 7) 公的研究費に係る説明VOD教材視聴について

2024年度 研究・社会連携委員会議事

●第1回 2024年6月5日

- 議案
 - 1) 構成員の確認について
 - 2) 副委員長の選任
- 報告事項
 - 1) 令和5年度 研究・社会連携部及びセンターの業務報告について
 - 2) 令和5年度外部資金の獲得状況について
 - 3) 令和6年度科研費採択状況（速報）
 - 4) OUSフォーラム2024の開催について
- 依頼事項
 - 1) 研究者ナビゲーター見直しについて
 - 2) 新任教員に対してのヒアリング
 - 3) 知財権セミナーについて

●第2回 2024年7月22日

- 議案
 - 1) OUSフォーラム2024実施について
- 報告
 - 1) 令和6年度科研費私大ランキングについて
- 依頼事項
 - 1) 令和7年度科学研究費助成事業申請に係る学内の支援体制について
 - 2) おかやまテクノロジー展（OTEX）2024

●第3回 2024年9月12日

- 議案
 - 1) OUS フォーラム2024 開催について
- 依頼事項
 - 1) OUS フォーラム2024 案内状、パンフレット送付先依頼
 - 2) 令和6年度学生を対象とした知的財産権セミナーについて
 - 3) おかやまテクノロジー展（OTEX）2024について
- 報告
 - 1) 海外との連携に関する2023 年度の実績調査結果の報告について
 - 2) 知的財産セミナー（2024年7月18日（木）実施）の報告について

●第4回 2025年1月17日

- 報告
 - 1) OUSフォーラム2024
 - 2) 中国地方整備局シーズ照会
 - 3) 令和7年度科研費応募状況
 - 4) 2025年度岡山理科大学における研究不正防止に関する取り組み年間スケジュール（予定）
 - 5) 特許出願状況と知財セミナー
- 依頼
 - 1) リカレント教育および社会人教育実施に係る教育コンテンツの提供について
 - 2) 2026年度プロジェクト研究推進事業への応募について
 - 3) OUS研究者交流会
 - 4) 岡山理科大学プロジェクト合同研究成果合同発表会
 - 5) 研究データの保存等に関する自己確認の実施について
 - 6) 公的研究費に係る説明VOD教材視聴について
 - 7) 安全保障輸出管理（該非判定チェック票ほか）について

4. 外部資金の獲得状況

2017年度にスタートした第Ⅰ期アクションプランにおいて「科研費および各種団体の研究助成金など獲得を支援する全学的な取り組み体制を整備する」ことを中期目標に掲げ、サポート体制を整備したことで一定の成果を上げることができた。これを受け、2022年度からの第Ⅱ期アクションプランでは、外部資金の獲得に関する明確な目標は定めず、整備した取り組みを継続して実施している。

具体的には、文部科学省科学研究費助成事業や各種助成団体による研究助成金制度への応募など、競争的資金の獲得に関するサポートとして、主に若手研究者に対する研究計画調書作成のためのアドバイスや採択に至らなかった研究計画の要因分析などを行う「レビューミーティング」、申請書の構想段階から研究者に担当エディターが並走し、研究計画を魅力あるものに導く「ウォームアップ制度」、最終段階の研究計画調書を経験豊富な関連分野の研究者が精査、助言を行うことで、より精度の高い研究計画に仕上げる「ブラッシュアップ制度」を導入し全学的にサポートを行っている。また、科学研究費助成事業に関しては、今治キャンパス獣医学部の研究者を含む全研究者を対象とした制度の変更点等に関する説明会と科学研究費審査経験者等による講演などを含む応募説明会を実施している。



科研費説明会の様子

一方、各省庁等が募集する事業や各種助成金の公募情報については、研究・社会連携部のホームページに掲載するとともに、学内一斉配信メールにて広く周知を図っている。各学部で行っている研究内容に則した研究助成に関する情報の収集を図っている。

過去5年間の外部資金（科学研究費助成事業・各種助成金・共同研究・受託研究・寄付金）の獲得状況は、図4-1、図4-2および表4-1、表4-2に示す。2020年度から2024年度の5年間において、獲得件数は2020年度の291件から2024年度には310件となり19件増加した。また、獲得金額にもついては2020年度の約3億7千万円から2024年度は約4億7千万円と約1億円増額となっている。増加となった要因として地道な支援体制の継続や大型の受託・共同研究の実施がある。

科学研究費助成事業、各種助成金、共同研究、受託研究、寄付金ごとの状況については、4.1から4.6に示す。

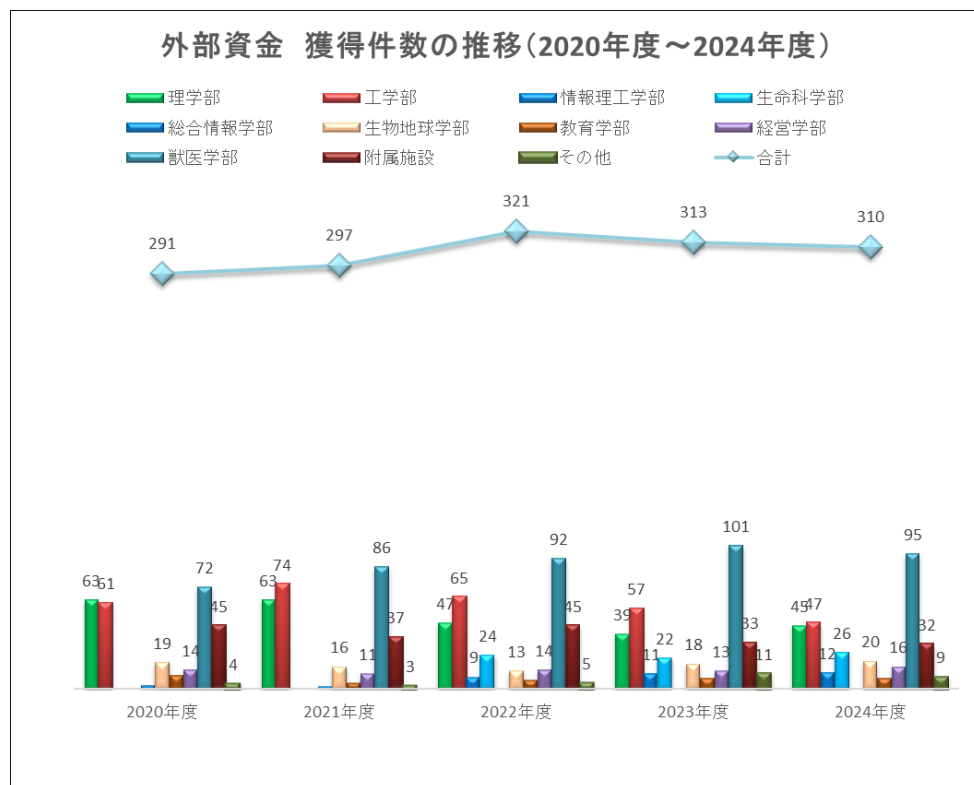


図4-1 外部資金獲得件数の推移

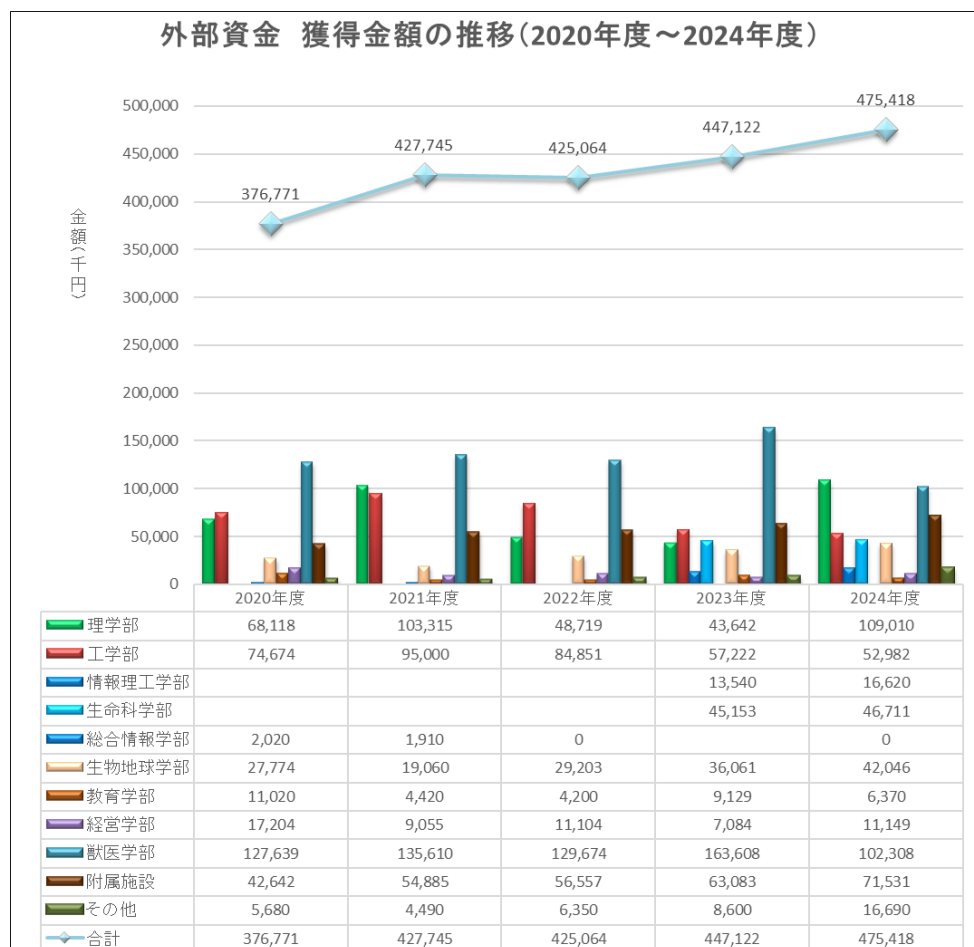


図4-2 外部資金獲得金額の推移

表4-1 外部資金の獲得件数

■外部資金の獲得件数

※科研費：当該年度交付件数

科学研究費助成事業(4章1)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	33	37	25	25	25
工学部	23	23	18	21	17
情報理工学部			5	4	3
生命科学部			10	10	9
総合情報学部	2	1			
生物地球学部	9	9	8	9	9
教育学部	9	5	6	7	8
経営学部	7	6	6	4	6
獣医学部	38	40	39	39	36
附属施設	15	17	20	11	9
その他	3	2	5	8	6
合計	139	140	142	138	128
各種助成金(4章2)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	8	11	10	5	8
工学部	2	9	8	4	3
情報理工学部			0	3	2
生命科学部			1	1	5
総合情報学部	0	0			
生物地球学部	3	4	1	3	6
教育学部	1	0	1	1	
経営学部	1	3	5	6	8
獣医学部	2	9	7	4	7
附属施設	0	3	3	5	7
その他	0	0	0	0	1
合計	17	39	36	32	47
共同研究(5章1)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	15	6	6	3	5
工学部	21	26	22	19	11
情報理工学部			3	3	5
生命科学部			5	5	6
総合情報学部	1	1			
生物地球学部	1	2	1	1	1
教育学部	0	0	0	0	0
経営学部	3	0	1	1	1
獣医学部	7	10	13	19	7
附属施設	14	9	9	9	7
その他	0	0	0	0	0
合計	62	54	60	60	43
受託研究(5章2)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	2	4	1	3	3
工学部	9	9	13	9	12
情報理工学部			1	0	1
生命科学部			2	1	1
総合情報学部	0	0			
生物地球学部	6	1	2	5	4
教育学部	0	0	0	0	0
経営学部	3	2	2	2	1
獣医学部	14	17	17	15	11
附属施設	11	8	11	5	7
その他	0	0	0	0	0
合計	45	41	49	40	40
寄付金(5章4)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	5	5	5	3	4
工学部	6	7	4	4	4
情報理工学部			0	1	1
生命科学部			6	5	5
総合情報学部	0	0			
生物地球学部	0	0	1	0	0
教育学部	0	0	0	0	0
経営学部	0	0	0	0	0
獣医学部	11	10	16	24	34
附属施設	5	0	2	3	2
全学	1	1	0	3	2
合計	28	23	34	43	52
外部資金 総数	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	63	63	47	39	45
工学部	61	74	65	57	47
情報理工学部			9	11	12
生命科学部			24	22	26
総合情報学部	3	2			
生物地球学部	19	16	13	18	20
教育学部	10	5	7	8	8
経営学部	14	11	14	13	16
獣医学部	72	86	92	101	95
附属施設	45	37	45	33	32
その他	4	3	5	11	9
合計	291	297	321	313	310

表4-2 外部資金の獲得金額

■外部資金の獲得金額

※科研費：当該年度交付額

科学研究費助成事業(4章1)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	44,785	52,780	36,010	34,412	40,560
工学部	25,805	39,780	24,570	27,112	27,040
情報理工学部			5,563	5,590	5,850
生命科学部			17,940	24,133	18,980
総合情報学部	1,820	910			
生物地球学部	19,760	16,380	23,400	24,466	28,600
教育学部	10,270	4,420	3,900	8,929	6,370
経営学部	8,190	7,930	9,360	3,770	8,190
獣医学部	83,499	80,534	84,502	92,026	66,760
附属施設	25,090	30,290	31,271	45,240	42,744
その他	4,680	2,990	6,350	7,500	12,090
合計	223,899	236,014	242,866	273,178	257,184
各種助成金(4章2)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	5,583	6,548	5,509	4,800	7,350
工学部	900	4,569	7,389	3,931	999
情報理工学部			0	1,200	1,500
生命科学部			370	500	3,740
総合情報学部	0	0			
生物地球学部	1,600	2,680	1,900	2,436	2,941
教育学部	750	0	300	200	
経営学部	750	767	1,044	2,134	2,314
獣医学部	3000	5750	11,050	9,500	12,808
附属施設	0	1,130	1,100	1,820	5,544
その他	0	0	0	0	1,500
合計	12,583	21,444	28,662	26,521	38,696
共同研究(4章3)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	4,600	2,230	4,500	850	54,600
工学部	26,164	32,515	23,575	9,660	5,174
情報理工学部			1,300	5,750	5,070
生命科学部			7,630	11,820	10,861
総合情報学部	200	1,000			
生物地球学部	363	0	330	605	2,100
教育学部	0	0	0	0	0
経営学部	7,500	0	300	660	550
獣医学部	4,840	8,076	7,150	47,551	6,408
附属施設	4,700	12,615	15,100	13,500	8,150
その他					
合計	48,367	56,436	59,885	90,396	92,913
受託研究(4章4)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	9,250	38,157	1,500	2,730	4,300
工学部	18,105	15,436	26,833	14,319	16,769
情報理工学部			1,500	0	2,200
生命科学部			16,003	5,200	9,730
総合情報学部	0	0			
生物地球学部	6,051	0	2,573	8,554	8,405
教育学部	0	0	0	0	0
経営学部	764	358	400	520	95
獣医学部	25,550	33,000	11,838	9,250	9,133
附属施設	11,352	10,850	7,986	2,223	14,293
その他					
合計	71,072	97,801	68,633	42,796	64,925
寄付金(4章5)	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	3,900	3,600	1,200	850	2,200
工学部	3,700	2,700	2,484	2,200	3,000
情報理工学部			0	1,000	2,000
生命科学部			4,100	3,500	3,400
総合情報学部	0	0			
生物地球学部	0	0	1,000	0	0
教育学部	0	0	0	0	0
経営学部	0	0	0	0	0
獣医学部	10,750	8,250	15,134	5,281	7,200
附属施設	1,500	0	1,100	300	800
全学	1,000	1,500	0	1,100	3,100
合計	20,850	16,050	25,018	14,231	21,700
外部資金 総額	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
理学部	68,118	103,315	48,719	43,642	109,010
工学部	74,674	95,000	84,851	57,222	52,982
情報理工学部			8,363	13,540	16,620
生命科学部			46,043	45,153	46,711
総合情報学部	2,020	1,910			
生物地球学部	27,774	19,060	29,203	36,061	42,046
教育学部	11,020	4,420	4,200	9,129	6,370
経営学部	17,204	9,055	11,104	7,084	11,149
獣医学部	127,639	135,610	129,674	163,608	102,308
附属施設	42,642	54,885	56,557	63,083	71,531
その他	5,680	4,490	6,350	8,600	16,690
合計	376,771	427,745	425,064	447,122	475,418

4.1 科研費助成事業

中期計画の達成に向けて全学的な取り組みを開始した2016年度（2017年度採択）以降、科研費への申請数、採択数、金額ともに飛躍的に増加し、2020年度に採択数が2016年度の2倍以上となった。2024年度には2020年度と比較し採択件数は微減したものの、採択率は上昇している。また、採択金額は2020年度と比較し増加している。過去5年間の申請数、採択数、当該年度における交付額の推移を下図に示している。

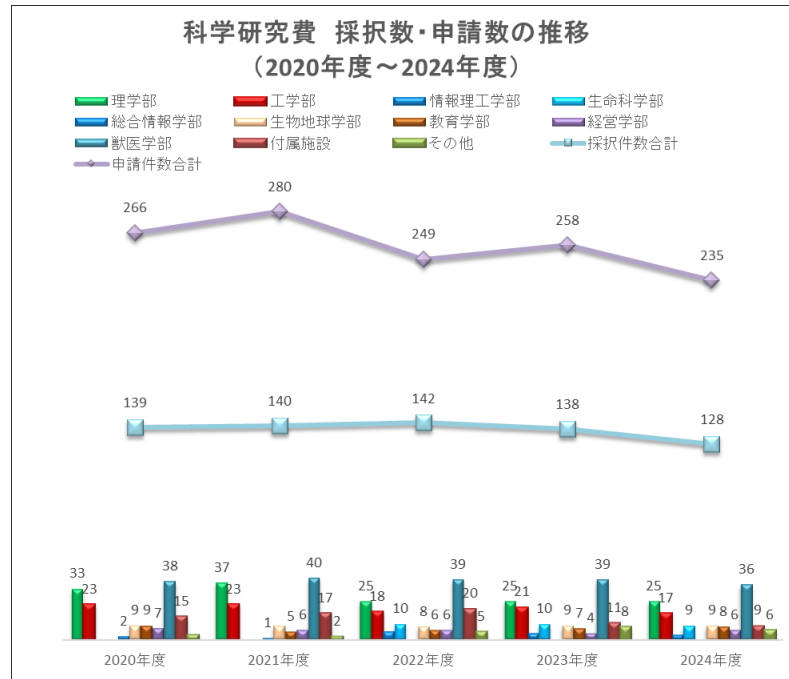


図4-3 科学研究費助成事業 申請数・採択件数の推移

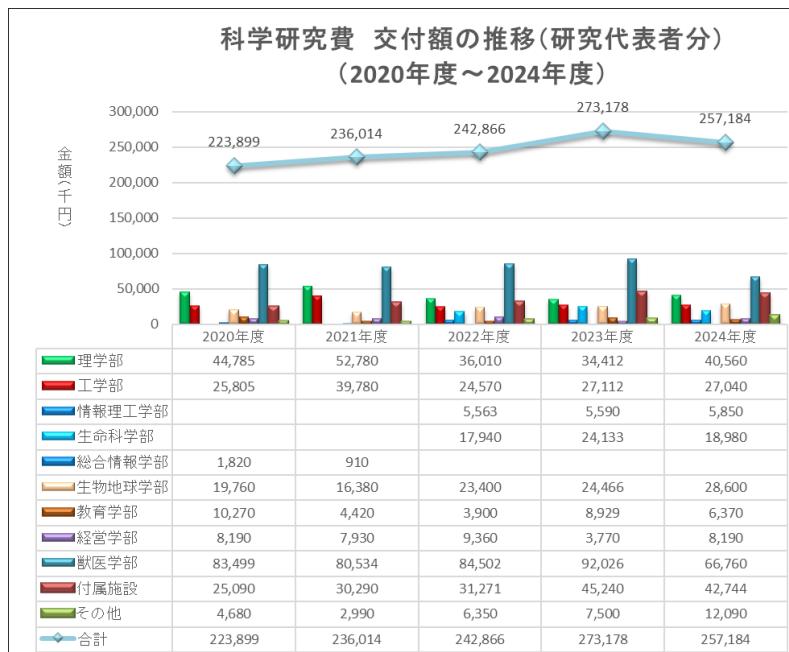


図4-4 科学研究費助成事業 研究代表者への交付額の推移

表4-3 2023年度（令和5年度）新規採択研究課題

種目	研究代表者	研究課題名
学術変革領域研究(A)	那須 浩郎	先史人類による人為的環境形成（植物相）に関する研究
基盤研究(B)	林 謙一郎	オーキシン不活性化経路によるオーキシンホメオスタシス調節機構の解明
基盤研究(B)	藤本 義博	自己調整学習とOPPA論を援用し教育クラウドを活用した自己調整学習サイト開発研究
基盤研究(C)	阿部 拓	ヘッセンバーク多様体とトーリック幾何の繋がり
基盤研究(C)	坂内 真三	射影平面曲線の埋め込み位相と分解型不変量の拡張の研究
基盤研究(C)	稲葉 和正	特異点の定めるファイバー束の研究
基盤研究(C)	森 嘉久	高圧SPS装置による車載用熱電モジュール開発
基盤研究(C)	水野 信哉	肝細胞増殖因子による肺固有幹細胞を標的とした肺修復システムの分子基盤
基盤研究(C)	木場 崇剛	膵B細胞の再生および増殖を制御する神経シグナル伝達ネットワーク機構の解明
基盤研究(C)	衣笠 哲也	主竜類の筋骨格系が持つ滑らかなロコモーションを生み出す受動メカニズムに関する研究
基盤研究(C)	林 良太	臨床試験に向けた随意的筋電位の発生を促す可変難易度リハビリ訓練システムの開発
基盤研究(C)	麻原 寛之	熱電池を有する独立駆動電源の電力損失メカニズム
基盤研究(C)	麻谷 淳	物理複製困難関数に対するファジィ抽出器の軟判定復号法に関する研究
基盤研究(C)	折田 明浩	光レドックスを用いたスルホンアニオンラジカルの発生と炭素-炭素結合構築法の開発
基盤研究(C)	草野 圭弘	無釉焼き締め陶表面の微構造と色調および機械的強度の関連の解明と工業材料への応用
基盤研究(C)	秋山 英久	サッカーにおける視覚探索行動の定量的評価を可能にするデータ生成・分析手法の開発
基盤研究(C)	椎名 広光	先進的アルゴリズムによる授業の発話分析システムの開発
基盤研究(C)	松浦 宏治	哺乳類精子のATPイメージングによる運動制御機構の解明
基盤研究(C)	三井 亮司	植物に共生するメチロトロフ細菌の二成分制御系による葉面特異的PQQ分泌機構の解明
基盤研究(C)	志藤 あずさ	Po/So波で探る海洋リソスフェアの内部構造の改変と大規模火山活動のメカニズム
基盤研究(C)	林 昭次	琉球諸島の哺乳類をモデルとした陸生哺乳類の島嶼適応に関する研究
基盤研究(C)	井本 美穂	マルチモーダル分析手法による音楽教師の技の解明
基盤研究(C)	田中 將之	教員養成課程における「ユーモア」スキルの習得及びその効果に関する研究
基盤研究(C)	山下 浩之	自然災害の被害と理科の流水作用の基本的原理を橋渡しするモデル実験開発とその応用
基盤研究(C)	江藤 真澄	平滑筋収縮調節における新規メカノトランスダクション機構の解明
基盤研究(C)	楢田 龍星	ラブドウイルスにおけるRNAスプライシング機構の解析
基盤研究(C)	田中 良法	TDP-43の分解と分泌を制御する膜輸送機構の解明
基盤研究(C)	中嶋 幸生	悪性骨腫瘍における骨微小環境を正常化する新規治療の適応拡大
挑戦的研究（萌芽）	国枝 哲夫	モンゴル在来馬を用いたウマの家畜化の起源の解明
若手研究	奥田 靖浩	一電子移動を鍵とするイナミンのダイバージェント π 拡張戦略の創出
若手研究	保森 智彦	教師が客観的に授業を自己評価するための自然言語処理による新しい発話分析法の開発
若手研究	朱 夏希	α_2 アドレナリン受容体シグナルを標的とした新規抗腫瘍戦略の確立
若手研究	新井 清隆	線維性癭痕形成細胞をリプログラミングターゲットとした脊髄損傷の新規治療法開発
若手研究	梶川 修平	12型コラーゲンの骨肉腫抑制作用と新規治療標的としての可能性の検討
特別研究員奨励費	齋藤 伸樹	大規模災害のための水陸空可変自律行動型ドローンと次世代三次元測量システムの実装

表4-4 2024年度（令和6年度）新規採択研究課題

種目	研究代表者	研究課題名
学術変革領域研究(A)	那須 浩郎	先史人類による人為的環境形成（植物相）に関する研究
基盤研究(A)	宮本 真二	アジア・モンスーン地域の災害論の転換によるグローバル問題の解決にむけた学際的検討
基盤研究(B)	那須 浩郎	考古学と遺伝学から探るダイズとアズキの栽培種誕生プロセスの解明
基盤研究(B)	武山 智博	鳥類標本の羽から探る生態と種分化
基盤研究(B)	豊後 貴嗣	腸内環境の健全化により家禽の強靱化を図る
基盤研究(B)	田所 竜介	体表呈色を解き明かす張力を引き金とした新規メラニン輸送小胞の形成原理
基盤研究(B)	押谷 潤	混合廃棄物の乾式素材分離技術の高度化に向けた流動層内での物体浮沈メカニズムの解明
基盤研究(B)	今山 武志	ヒマラヤ造山帯の沈み込みー大陸衝突初期造構プロセス
基盤研究(B)	酒井 誠	非線形光学効果を用いた赤外超解像顕微鏡によるタンパク質二次構造の選択的観察
基盤研究(B)	向田 昌司	高血圧症における集合リンパ管収縮機構の破綻機序を解明する
基盤研究(B)	早川 晃司	ヒストン糖修飾による新たな視点での妊娠糖尿病分子メカニズムの解明と治療基盤の構築
基盤研究(B)	藤本 義博	自己調整学習と OPFA 論を援用し教育クラウドを活用した自己調整学習サイト開発研究
基盤研究(B)	林 謙一郎	オーキシン不活性化経路によるオーキシンホメオスタシス調節機構の解明
基盤研究(B)	實吉 玄貴	現在型動物相黎明期の解明と国際的化石標本データベースの基盤構築
基盤研究(B)	本田 充彦	国内中間赤外モニタリング観測のための中間赤外線観測装置 ONIcam の開発
基盤研究(B)	江面 嗣人	フィリピンの歴史的都市住宅バハイ・ナ・パトの起源と発展に関する実証的研究
基盤研究(B)	佐藤 泰史	アニオン付加・脱離反応を伴う複合酸化物の複合アニオン化と新規光・電材料の創製
基盤研究(C)	竹野 純一郎	音声と直読直解を意識したリーディングが直聴直解であるリスニングに及ぼす影響
基盤研究(C)	辻極 秀次	考古遺跡より出土する部分骨格標本の分子生物学的研究とその開発
基盤研究(C)	大藪 亮	サービス・ロボットを中心とする包括的な顧客経験に関する理論的・経験的研究
基盤研究(C)	井浪 真吾	高等学校における世羅博昭古典教育実践の展開とその歴史的意義に関する研究
基盤研究(C)	瓜屋 航太	非線形分散型方程式系の漸近解析
基盤研究(C)	大熊 一正	単トップクォーク生成から探る標準模型を超える新物理
基盤研究(C)	長尾 桂子	非弾性散乱で探る銀河中心方向から到来する軽い暗黒物質の検証
基盤研究(C)	豊田 新	海底熱水性重晶石の Ra 放射非平衡年代ーESR 年代整合モデルの構築
基盤研究(C)	清水 一郎	塑性異方性を援用した α チタン面状セル構造体の機能性発現とステントへの展開
基盤研究(C)	赤木 徹也	家庭用流体駆動ソフトメカニズムを支える低コスト流体制御機器の開発
基盤研究(C)	作道 章一	ブリオン滅菌技術としてのプラズマ応用とヒトへの有効性に関する研究
基盤研究(C)	石田 弘樹	非エルミート系の物理がもたらす環境変化に堅牢なワイヤレス給電
基盤研究(C)	小田 哲也	基礎自治体の避難タイミング判断に資する次世代内水対策システムの実装
基盤研究(C)	満身 稔	多孔性亜鉛・金属ポルフィリンダイマー錯体に基づく可視光駆動型水素生成触媒の創製
基盤研究(C)	東村 秀之	多核錯体ユニットを有する新規 COF の合成と二酸化炭素還元触媒への展開
基盤研究(C)	村田 拓也	下垂体のアネキシン A1 および A5 に関連する遺伝子発現の網羅的シングルセル解析
基盤研究(C)	村上 康平	B 細胞の機能解析に基づく犬の起源不明髄膜炎の病態解明
基盤研究(C)	小野 岳人	運動模倣による筋や骨の強化を介した長寿健康増進法の開発
基盤研究(C)	中村 元直	がん細胞の多剤耐性化は細胞内苦味受容体による抗がん剤感受が起点となる
基盤研究(C)	竹谷 浩介	平滑筋収縮調節因子 CPI-17 を介した腎微小循環調節の分子基盤と生理機能
基盤研究(C)	邊見 弘明	免疫プロテアソーム異常による疾患の病態と機能的意義の解明

種目	研究代表者	研究課題名
基盤研究(C)	藤原 信行	p62 の新規結合因子 PP6 に着目した、非アルコール性脂肪肝炎の病態解明
基盤研究(C)	長田 洋輔	電気刺激と機械伸展刺激の複合作用がもたらす細胞融合を伴う筋肥大のメカニズム
基盤研究(C)	近久 幸子	慢性不眠に起因する痛覚過敏の理解と創薬応用
基盤研究(C)	森 裕一	尺度混在・次元縮約クラスタリングによる主要情報の抽出と効率的計算環境の開発
基盤研究(C)	荒井 伸太郎	プロペラ送信機の残像面を用いた水中高速可視光通信のロバストな送受信機接続の実現
基盤研究(C)	杉山 晶彦	細胞障害性抗癌剤の卵内曝露が鳥類眼球の発生・発達に及ぼす影響の解明
基盤研究(C)	齋藤 文代	発がん物質に対する早期センサーAbcb1b の機能解明
基盤研究(C)	高橋 良平	観光地域づくりに参画する企業の社会的効用と自社経営への影響分析
基盤研究(C)	富安 聡	尿中に出現する round cell の幹細胞特性に基づく新規腎機能評価の有用性
若手研究	藤城 孝輔	沖縄文学の映画化に見られる沖縄と日本の関係性についてのメディア横断的研究
若手研究	渡辺 圭史	地域エコシステムが生存するメカニズムを理論化する研究
若手研究	高橋 広奈	共鳴 IR スペクトルに対する Franck-Condon 因子と振電相互作用の寄与
若手研究	宮前 二郎	Public neoantigen を標的としたイヌのがん免疫療法の開発に向けた基礎研究
若手研究	吉竹 涼平	上皮の化生に着目したイヌ乳腺腫瘍の進展メカニズムの解明
若手研究	荒木 真美	胎盤特異的 miRNA を介した新たな樹状細胞-妊娠免疫寛容機構の解明と流産治療への応用
若手研究	浅原 佳江	NPPV マスク装着時の褥瘡防止システムの開発
挑戦的研究(萌芽)	林 謙一郎	相分離原理に基づくオーキシン可視化技術の開発
挑戦的研究(萌芽)	早川 晃司	アンメットメディカルニーズ克服を目指した修飾ヒストン分解技術 ProHM 法の開発
研究活動スタート支援	児島 一州	重症熱性血小板減少症候群ウイルスが関与する細胞死誘導機構の解明

4.2 各種助成金（財団/公的資金等）

研究助成団体や文部科学省等から公募された助成金について、過去5年間の申請数、採択数、採択金額の推移を下図に示している。採択金額は、1件あたりの助成額の影響で増減があるが、採択数は増加傾向にあり、全体として拡大が見られる。

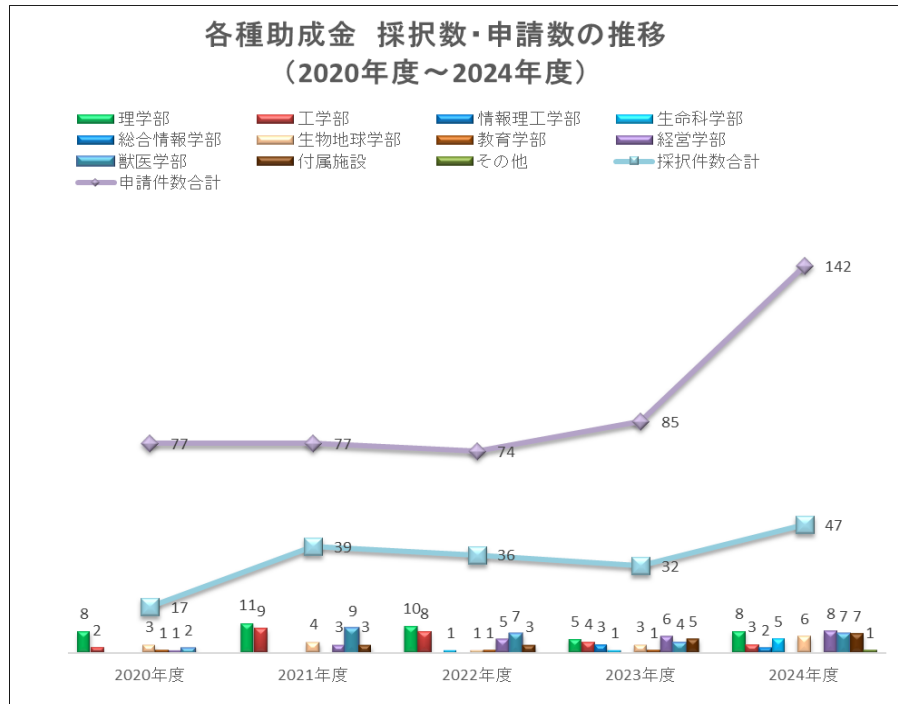


図4-5 各種助成金 申請数・採択件数の推移

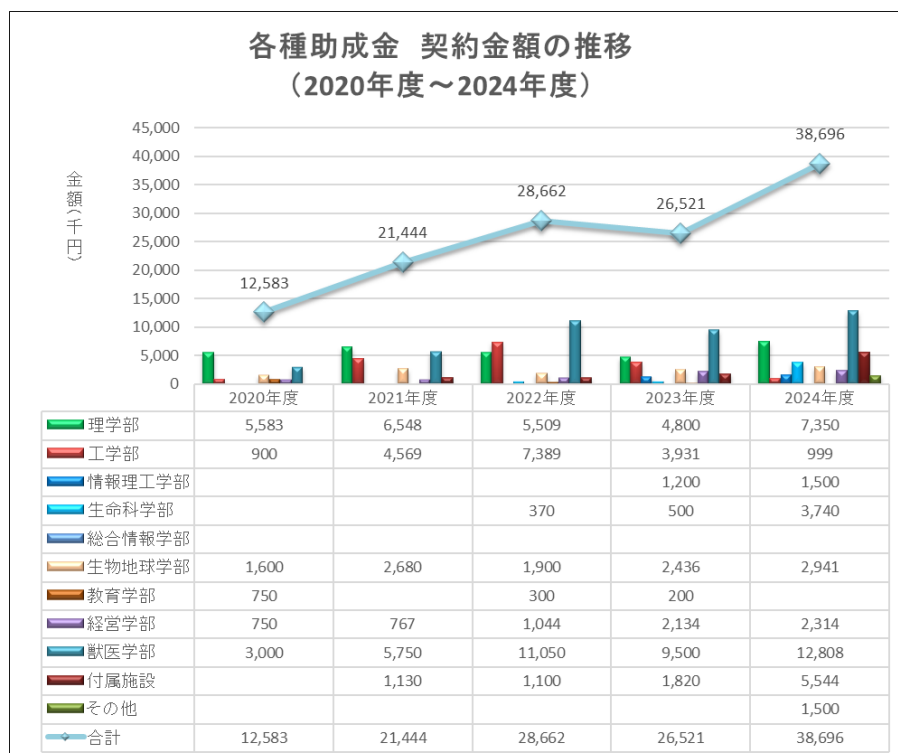


図4-6 各種助成金 契約金額の推移

表4-5 2023年度（令和5年度）採択研究課題

種目	研究課題名	研究代表者
（公財）武田科学振興財団	核タンパク質TDP-43の細胞質内蓄積におけるプログラニュリンの役割	田中 良法
全国大学博物館学講座協議会	文化財を活用した地域貢献・課題解決型学習による植物館実習の実践	三阪 一徳
（公財）先進医薬研究振興財団	抗がん剤アベマシクリブを用いたFTLD-TDP療法の開発	田中 良法
（公財）全国乗馬倶楽部振興協会	在来馬（野間馬）の保存活動に資する調査・研究及び繁殖管理計画の策定・実施事業（効果的な繁殖計画のための遺伝的調査、繁殖管理、獣医大学における馬関連研究の促進等）	久枝 啓一
（公財）徳山科学技術振興財団	高性能3DグラフェンPN結合トランジスタの創出	田邊 洋一
（公財）大林財団	資源統合の視点によるまちづくりの可能性に関する研究	宮脇 靖典
（公財）池谷科学技術振興財団	アントラセンビスイミドを基盤としたドナー/アクセプター型分子配列の自在合成と発光挙動の解明	岩永 哲夫
（公財）山陽放送学術文化・スポーツ振興財団	占領期岡山の映像資料の分析と岡山の新しい郷土資料の作成と発信	徳澤 啓一
（公財）山陽放送学術文化・スポーツ振興財団	鶏の生殖器官由来腫瘍の発生源に関する検討：ヒトの卵巣がんモデルとなる可能性の模索	中村 進一
（公財）福岡直彦記念財団	フィヨルド領域選択的パイ拡張による含s p ³ 混成窒素ナノグラフェンの合成と機能開拓	奥田 靖浩
（公財）日本科学協会 笹川研究助成	ティラノサウルス類の残存タンパク質の多角的解析から確立する、信頼性が高い化石タンパク質の検出方法	實吉研究室 稲葉 勇人
（公財）ウエスコ個学術振興財団	ソフトウェア無線による核磁気共鳴測定装置の小型化および測定の高速度化	久保 徹郎
（公財）ウエスコ学術振興財団	水を溶媒としたハロゲンフリーで低環境負荷な難燃性リグノセルロースナノファイバーの開発	大坂 昇
（公財）ウエスコ学術振興財団	間期細胞核におけるDNAトポイソメラーゼI I α と β の核小体-核質間シャットリングの分子メカニズムの解析	河野 真二
（公財）ウエスコ学術振興財団	新規の脾B細胞再生モデルマウスの開発	木場 崇剛
（公財）ウエスコ学術振興財団	熱間加工を利用した傾斜機能性材料の開発	竹村 明洋
（公財）ウエスコ学術振興財団	免荷型空気式パワーアシスト装置を用いた歩行リハビリ支援システムと人間の動きを考慮した制御手法の開発	横田 雅司
（公財）ウエスコ学術振興財団	家庭で使える低コスト流体駆動ソフトメカニズムを支える流体制御機器の開発	赤木 徹也
（公財）ウエスコ学術振興財団	人への利用を事前検証できる中小型動物用褥瘡防止体位変換マットの開発	趙 菲菲
（公財）ウエスコ学術振興財団	雲海現象のAI予報の開発-予報精度と有効性の評価-	大橋 唯太
（公財）ウエスコ学術振興財団	白亜紀の生態系激変期における恐竜群集動態の変遷解明-足跡化石をもとにしたアプローチ-	石垣 忍
（公財）ウエスコ学術振興財団	鬼と日本人-＜鉄＞をめぐる吉備王国の謎-	荻原 桂子
（公財）八雲環境科学振興財団	水陸可変機構を備える小型自律航行船と水中・陸上同時三次元測量技術の開発	小田研究室 齋藤 伸樹
（公財）八雲環境科学振興財団	局地風の発生予測システムのAI化と実運用	大橋 唯太
（公財）八雲環境科学振興財団	小学生とその保護者を対象にした科学実験と科学ショーの実施	高原 周一
岡山県補助金 地域に飛び出せ学生 大学生おかやま元気集落	集落研究・交流事業補助金（大茅地区）	小田 徹也
岡山市補助金 学生イノベーション チャレンジ推進プロジェクト	表町商店街活性化ラボ（新企画開拓）	水谷 直樹
岡山市補助金 学生イノベーション チャレンジ推進プロジェクト	表町商店街活性化ラボ（表町魅力発信）	塚常 健太
岡山市補助金 学生イノベーション チャレンジ推進プロジェクト	学生が創るこれからの金融教育ラボ	松村 博行

岡山理科大学 研究・社会連携白書2024

岡山県補助金 地域に飛び出せ学生 大学生おかやま元気集落	集落研究・交流事業補助金 (真庭市二川地域)	黒田 正博
岡山市補助金 学生イノベーション チャレンジ推進プロジェクト	大学生による高齢者および小中学生とのスポーツ交流事業	林 恒宏
文部科学省 教員講習開設事業費	「新たな教師の学び」に対応したオンライン研究コンテンツ開発事業	木村 光宏

表4-6 2024年度（令和6年度）採択研究課題

種目	研究課題名	研究代表者
(公財) スズキ財団	負荷型空気圧パワーアシスト装置を用いた歩行リハビリ支援システムの開発と身体負荷メカニズムの解明	横田 雅司
公益信託 医用薬物研究奨励富岳基金	苦味受容体を起点としたがん細胞の多剤耐性化機構の発見	中村 元直
(公財) 山陽放送学術文化・ スポーツ振興財団	光励起一電子酸化還元種を利用した多環芳香族アミンの有機合成化学	奥田 靖浩
(公財) 福武教育文化振興財団	占領期岡山に関する記録の保存・活用のためのアーカイブの構築	徳澤 啓一
(一財) 旗影会	ガスプラズマ技術によるカンピロバクターの不活化・分解に関する研究	作道 章一
(公財) ウェスコ学術振興財団	パーキンソン病様マウス脳における新規CircRNAの探索	橋川 成美
(公財) ウェスコ学術振興財団	病原細菌のglyceraldehyde-3-phosphate dehydrogenase 菌体表出のメカニズムの解明とその意義	松永 望
(公財) ウェスコ学術振興財団	間期細胞核におけるDNAトポイソメラーゼⅡ α と β の核小体-核質間シャトリングの分子メカニズムの解析	河野 真二
(公財) ウェスコ学術振興財団	植物の光受容体フィトクロムが持つN末端天然変性領域に関する研究	濱田 隆宏
(公財) ウェスコ学術振興財団	人への利用を事前検証できる中小型動物用褥瘡防止体位変換マットの開発	趙 菲菲
(公財) ウェスコ学術振興財団	オオバウマノスズクサ群の種子のスズメバチ類散布の実態とアリ散布の可能性	東馬 哲雄
(公財) ウェスコ学術振興財団	四肢骨の栄養孔面積に基づく代謝率測定手法の確立と古生物学的応用	千葉 謙太郎
(公財) ウェスコ学術振興財団	気候条件の異なる移入先におけるメジロの繁殖生理学的応答の解明	武山 智博
(公財) ウェスコ学術振興財団	検索拡張生成を用いた砂防防災業務の効率化に関する研究	佐藤 丈晴
(公財) ウェスコ学術振興財団	土器・焼土中に含まれる鉄鉱物の動態に関する基礎的研究	畠山 唯達
(公財) ウェスコ学術振興財団	国際会議 第26回 Planck2024 ポルトガルへ参加・発表する	長尾 桂子
(公財) ウェスコ学術振興財団	第20回 国際植物科学会議 マドリード へ参加・発表する	矢野 興一
(公財) 八雲環境科学振興財団	亜鉛・金属ポルフィリングダイマー錯体に基づく革新的可視光駆動型CO2還元触媒の創製	満身 稔
(公財) 八雲環境科学振興財団	防災点検技術者のためのBIM/CIM利活用支援AI・IoTシステムの開発	若林 恭平
(公財) 八雲環境科学振興財団	小学生とその保護者を対象とした科学実験と科学ショーの実施	高原 周一
(公財) 八雲環境科学振興財団	北米産恐竜類化石を用いた化石タンパク質検出手法の確立	千葉 謙太郎
(公財) サントリー生命科学 財団	Biothermology Workshop 2024	濱田 隆宏
(公財) 喫煙科学研究財団	Streptococcus属に着目した喫煙と動脈硬化の新規病態メカニズムの解明	向田 昌司
(一社) 予防衛生協会	カニクイザルを用いた汎動物学的アプローチによる老年性Tau病変形成機構の解析	木村 展之
(公財) 内藤記念科学振興財団	脂肪エネルギー代謝が制御する筋力増加メカニズムの解明	伊豆 弥生
(公財) 徳山科学技術振興財団	高性能3DグラフェンPN結合トランジスタの創出	田邊 洋一
(公財) 旭硝子財団	ツシマヤマメコノ死因究明は対馬の自然環境の状態を表すバロメーターとなるか	中村 進一
(公社) 東京地学協会	アジア・モンスーン地域の災害状況と対応を包括的に比較する国際ワークショップ	宮本 真二
(公財) 三菱財団	血管伸展性消失の新規分子機構の解明	向田 昌司

(公財) 戸部眞紀財団	女子プロレス団体「スターダム」における観客動員数の増加要因に関する研究	岡田 康太
(公財) 両備糧(てい) 園記念財団	うつ病発症における新たなターゲット物質の同定	橋川 直也
(公財) 両備糧(てい) 園記念財団	細胞内苦味受容体を起点とする有害物の細胞外排出機構の発見とこれを標的とした創薬	中村 元直
(公財) 両備糧(てい) 園記念財団	戦後岡山を記録したガラス乾板の調査・研究	徳澤 啓一
(公財) 泉科学技術振興財団	含窒素パイ共益系集積型分子の自在合成と高機能正孔輸送材料への展開	岩永 哲夫
(一財) 熱・電気エネルギー技術財団	3次元集積化グラフェンを利用したフレキシブル熱電技術の開発	田邊 洋一
2024年度 さくら招へいプログラム	日本におけるアクティブラーニング型理数教育の視察・体験	高原 周一
2024年度 さくら招へいプログラム	先端医療材料を巡る技術体験-基礎研究から応用まで-	赤司 治夫
つながる大学連携事業補助金	久米南町空き家再生プロジェクト	納村 信行
岡山県飛び出せ大学生！ 補助事業	岡山理科大学工学部情報理工学科小田研究室	小田 哲也
岡山県飛び出せ大学生！ 補助事業	岡山理科大学経営学部経営学科黒田研究室・大藪研究室	黒田 正博
学生イノベーションチャレンジ 推進事業	表町商店街データサイエンスラボ	塚常 健太
学生イノベーションチャレンジ 推進事業	児童を対象とした金融リテラシー教育の実施	湯下 薫
学生イノベーションチャレンジ 推進事業	「西奉還町×岡山シーガルズ：ちょっと西奉還町寄ってく？」	渡辺 圭史
学生イノベーションチャレンジ 推進事業	スポ恋～今日スポーツで恋に落ちるんじゃ！～	岡田 康太
学生イノベーションチャレンジ 推進事業	「歩行とスポーツ観戦」で「健康と地域活性化」プロジェクト	石田 恭生
学生イノベーションチャレンジ 推進事業	大学生による高齢者および小学生・幼児とのスポーツ交流事業	林 恒宏
西予市地域貢献研究事業 補助金	獣医学的知見にもとづく西予市の農林水産物の有用性の再発見とそれを用いたイタリア料理の開発および料理フェアの開催	深瀬 徹

4.3 共同研究

本学の研究者と企業や学外の研究機関等が役割分担を決め、共同で研究を推進する共同研究の過去5年間の推移を下図に示す。尚、下図のデータは研究完了年度で集計している。また、2023年度および2024年度に共同研究を行った各年度全ての研究題目を掲載した。

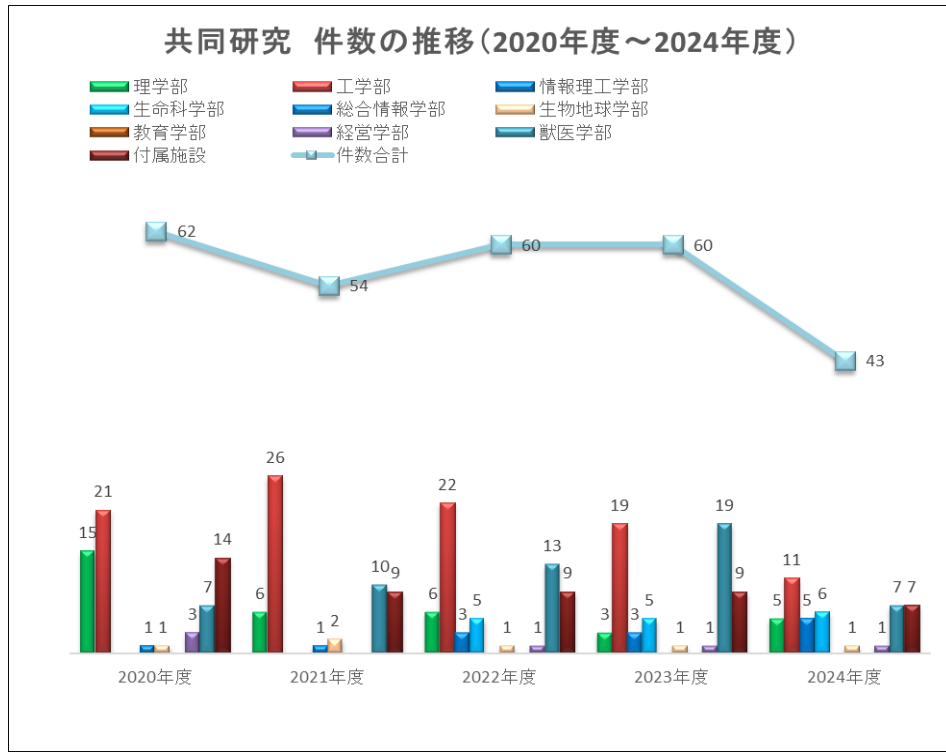


図4-7 共同研究の件数の推移

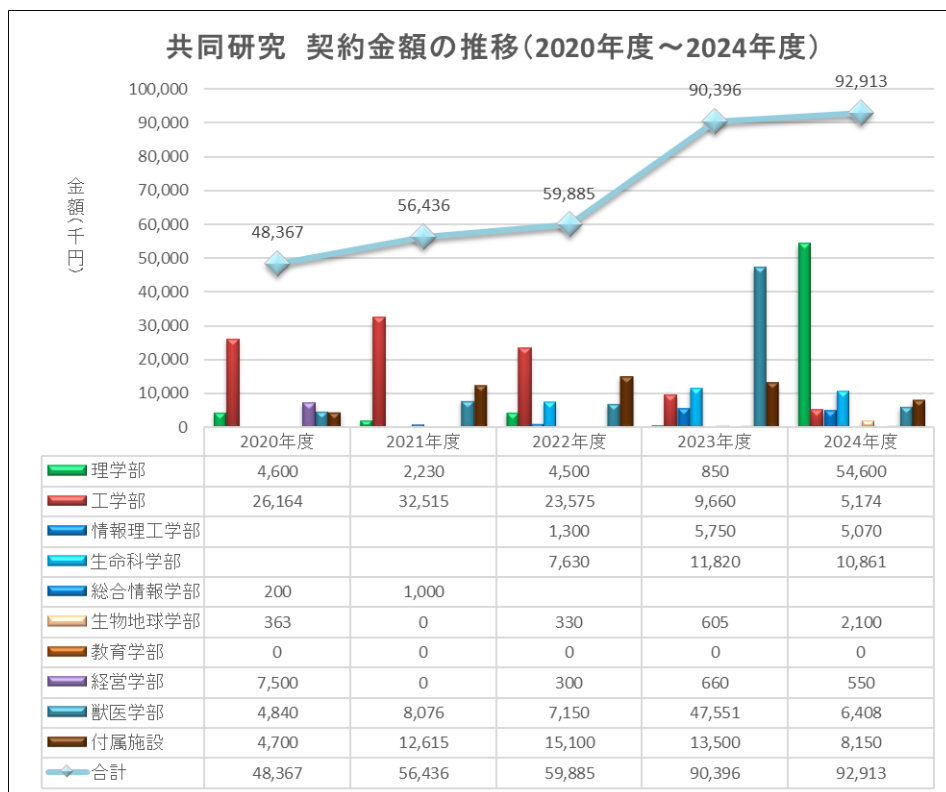


図4-8 共同研究の契約金額の推移

表4-7 2023年度（令和5年度）共同研究

所 属	研究代表者	共同研究先	研究題目
工学部	笠 展幸	岡山県工業技術センタ ー	制御を考慮したモータの解析と実機の比較
工学部	麻原 寛之	原材料生産製造行	熱電発電用独立駆動電源開発
工学部	寺野 元規	精密機器関連企業	CAE解析による後方押出鍛造における素材材料特性の検討
工学部	近藤 真史	ソフトウェア関連企業	AIを用いた建設現場不安全行動検知
工学部	近藤 千尋	千葉大学	蛍光トレーサ粒子を使ったエンジン内流動の蛍光PIV計測
工学部	小田 哲也	障害福祉サービス関連 企業	障がい者の作業・生活支援を目的としたAI/IoT/XR/音響/ロボティク ス技術に基づくDXの検討
工学部	清水 一郎	医療機器製造販売企業	生体吸収性マグネシウム合金スキャフォールドの設計最適化および 機械的特性評価
工学部	近藤 千尋	機械製造企業	小型木質ガス化エンジン熱電併給システムの開発
工学部	寺野 元規	金属加工関連企業	サーボプレスを用いた板鍛造技術の確立
工学部	關 正憲	化成品・潤滑油製造企 業	スラスト型転動疲労試験機を用いたグリース寿命に関する研究
工学部	桑木 賢也	食品製造販売企業	麺製造用ミキサー部材形状の最適化への解析技術の適用
工学部	小田 哲也	工作機械関連企業	キサゲ加工の切削箇所決定を目的としたAIロボットビジョンと照明 制御手法の検討
工学部	中井 賢治	船舶機械関連企業	舶用推進装置のコンポジット部品破壊特性確認
工学部	笠 展幸	制御機器製造関連企業	電気自動車の制御システムに関する研究
工学部	桑木 賢也	機械製造企業	半田槽内の溶解半田の流動解析
工学部	清水 一郎	自動車用部品製造企業	ゴム製品の長期クリープ予測技術の開発
工学部	清水 一郎	金属加工関連企業	円管素材の力学的性質評価法の確立と有限要素法解析による塑性加 工性評価法の検討
工学部	山本 俊政	情報通信企業	好適環境水を用いたベニサケ（2倍体または3倍体）の完全閉鎖型陸 上養殖に関する共同実験
工学部	山本 俊政	水関連機器製造企業	新しい閉鎖循環式ろ過システムの試験研究
理学部	新原 隆史	地質調査企業	X線回析分析による変質鉱物の構造解析に関する研究
理学部	大坂 昇	岡山県工業技術センタ ー	ゴム/樹脂部分相溶ブレンドに関する研究
理学部	石田 弘樹	計測機器関連企業	PT対称性による半導体製造装置及び関連装置への大容量電力給電方 法の研究
経営学部	塚常 健太	情報通信企業	通信行動とコミュニティ行動のモデル化に関する研究
情報理工学部	横田 雅司	農業機械等製造企業	自律走行草刈り機の開発
情報理工学部	李 天鎬	電気機器関連企業	エッジμDC向け軽量／分散AIモデルの研究
情報理工学部	李 天鎬	電気機器関連企業	3次元画像データからの3次元物体検出に関す

岡山理科大学 研究・社会連携白書2024

生命科学部	三井 亮司	食品製造販売企業	乾燥果実中の微生物制御による保存期間の延伸に関する研究
生命科学部	濱田 隆宏	農業機械等製造企業	アンモニア態窒素施与方法によって増産した機能性成分の蓄積・分解メカニズムの解明
生命科学部	安藤 秀哉	健康食品等関連企業	培養ヒト皮膚細胞を用いたハワイ産プロポリスのメラニン生成抑制評価
生命科学部	三井 亮司	健康食品等関連企業	皮膚常在細菌と皮膚の相互作用 in vitro 評価系の構築 一皮膚常在細菌の混合培養系構築と蜂産品による菌叢変化評価法の確立
生命科学部	安藤 秀哉	化粧品関連企業	毛穴や皮膚色などを対象として各種細胞機能の活性化に着目し、海泥抽出物などを配合した機能性化粧品を開発するための研究
教育推進機構	青木 一勝	地質調査企業	EPMA分析による鉱物の変質過程に関する研究
生物地球学部	佐藤 丈晴	建設コンサルタント等関連企業	UAVレーザを活用した落石発生源の抽出方法の検討
研究・社会連携機構	岩井 良輔	化成品・部品製造関連企業	細胞凝集塊の形成技術の開発
研究・社会連携機構	中谷 達行	岡山大学	Diamond-like carbon (DLC) の医療応用
研究・社会連携機構	星野 卓二	倉敷市	栽培ブドウと野生種シラガブドウの交配による新品種の作出
研究・社会連携機構	今山 武志	地質調査企業	高精度年代測定のための試料調整法に関する研究
研究・社会連携機構	豊田 新	地質調査企業	自然放射線によって生成される信号を利用した年代測定法の特性研究
研究・社会連携機構	中谷 達行	文房具生産販売企業	CVD, PVDハイブリッド成膜によるDLC被覆超硬ボールの紙との摩擦特性の解明
研究・社会連携機構	豊田 新	ナザルバエフ大学	放射線とその影響研究
研究・社会連携機構	岩井 良輔	慈恵大学	動脈瘤治療を目的とした立体構造カプセル化細胞治療製品の開発研究
獣医学部	作道 章一	医療機器類製造販売企業	過酸化水素ガス処理によるプリオン不活性化効果に関する研究
獣医学部	三河 翔馬	水関連機器製造企業	ペット・畜産動物向け 抗毒素・抗ウイルス機能を有する新規活性炭の開発
獣医学部	松田 彬	工業製品製造関連企業	イヌの皮膚疾患に対するオゾン水の効果
獣医学部	森川 茂	衛生用品製造販売企業	複数ウイルス種に対するウイルス不活化基剤の効果序列、効果特異性ならびにその発現機序の解明
獣医学部	星 史雄	コンタクトレンズ製造販売企業	水分補給用ゼリー（CP9）の嗜好性・有効性試験
獣医学部	森川 茂	水関連機器製造企業	N基活性炭のDNA吸着能およびウイルス吸着能評価
獣医学部	作道 章一	宇宙航空研究開発機構	深宇宙探査に向けたプラズマ滅菌および死菌デブリの完全分解・除去技術
獣医学部	竹谷 浩介	医薬品製造販売企業	腎糸球体血行動態に対するバソプレシンの作用の解明
獣医学部	星 史雄	医薬品製造販売企業	腎臓疾患に関わる研究
獣医学部	豊後 貴嗣	九州大学	黒毛和種肥育牛の行動反応と気質関連遺伝子多型との関係
獣医学部	松田 彬	愛媛県	愛媛県産品を原料とする犬用新規外用剤の適用
獣医学部	大西 章弘	愛媛県	小型犬向け骨切手術用ブレード及びペット手術用新規ボーソーの開発

獣医学部	古本 佳代	愛媛県	ペット用タオルの開発
獣医学部	野原 正勝	愛媛県	ペット用消臭紙の開発
獣医学部	藤谷 登	愛媛県	UV-LED照射による食品賞味期限延長技術の開発
獣医学部	藤谷 登	愛媛県	高圧加工技術による殺菌技術の開発
獣医学部	豊後 貴嗣	愛媛県農林水産研究所	種鶏の精子活性に及ぼす季節（暑熱）の影響
獣医学部	豊後 貴嗣	愛媛県農林	鶏の生産性及び情動に及ぼす簡易付帯設備の効果
獣医学部	太田奈保美	健康食品等関連企業	皮膚常在細菌と皮膚の相互作用 in vitro 評価系の構築 ー蜂産品が皮膚細菌叢に与える変化及び皮膚常在菌のゲノム解析ー

表4-8 2024年度（令和6年度）共同研究

所 属	研究代表者	共同研究先	研究題目
理学部	大坂 昇	岡山県工業技術センター	ゴム/樹脂部分相溶ブレンドに関する研究
理学部	大坂 昇	ゴム製品製造販売企業	SDGsに対応した学校シューズ, ソール(靴底)の国産化に向けた、ソール素材の研究開発とシューズの試作開発
理学部	新原 隆史	地質調査企業	X線回析分析による変質鉱物の構造解析に関する研究
理学部	新原 隆史	立命館	将来の月面その場分析・観測装置の校正用サンプル分析データの取得とデータアーカイブ化
理学部	東村 秀之	総合化学メーカー企業	水電解用アニオン交換膜開発に関する研究
工学部	笠 展幸	岡山県工業技術センター	制御を考慮したモータの解析と実機の比較
工学部	桑木 賢也	食品製造販売企業	麺製造用ミキサー部材形状の最適化への解析技術の適用
工学部	清水 一郎	自動車用部品製造企業	ゴム製品の長期クリープ予測技術の開発（その2）
工学部	清水 一郎	金属加工関連企業	薄肉円管の曲げ加工に関する研究
工学部	清水 一郎	医療機器製造販売企業	生分解性マグネシウム合金スキャフォールドの設計最適化および物理的特性評価
工学部	關 正憲	化成品・潤滑油製造企業	スラスト型転動疲労試験機を用いたグリース寿命に関する研究
工学部	竹村 明洋	金属加工関連企業	オイルフリー切削液の切削性の評価
工学部	寺野 元規	精密機器関連企業	CAE解析によるテーパカップ後方押出鍛造加工に及ぼす素材材料特性の影響の検討
工学部	寺野 元規	金属加工関連企業	サーボプレスを用いた板鍛造技術の確立
工学部	小田 哲也	工作機械関連企業	キサゲ加工へのAI応用の検討
工学部	中西 啓二	金属加工関連企業	高強度鋼材を用いた柱梁接合部の耐震性能に関する研究
情報理工学部	赤木 徹也	自動車用部品製造企業	マイコン活用による製造ラインの見える化
情報理工学部	柳 貴久男	システムサービス関連企業	顧客と店舗スタッフの関係性を伴うビッグデータ分析手法
情報理工学部	横田 雅司	自動車用部品製造企業	脱自動車を目的とした小型パーソナルモビリティの開発
情報理工学部	横田 雅司	農業機械等製造企業	自律走行草刈り機の開発
情報理工学部	横田 雅司	電子部品製造企業	ニンニクのヘタ切装置の要素技術開発
生命科学部	松浦 宏治	工業製品製造関連企業	粒子分離システムの分化細胞製造への利用検討
生命科学部	三井 亮司	食品製造販売企業	乾燥果実中の微生物制御による保存期間の延伸に関する研究
生命科学部	安藤 秀哉	化粧品関連企業	毛穴や皮膚色などを対象として、各種細胞機能を活性化する海泥エキスイオウ含有成分などを配合したアンチエイジング化粧品を開発するための研究
生命科学部	山本 俊政	都農町	好適環境水を用いたクエタマおよびタマカイを中心とした暖水魚の完全閉鎖型陸上養殖

生命科学部	山本 俊政	食品製造企業	好適環境水を用いた水産餌料プランクトンの培養に関する研究
生命科学部	濱田 隆宏	農業機械等製造企業	シロイヌナズナに対するアンモニア態窒素施与によって抗酸化成分を中心とする機能性成分が増産する分子メカニズムの解明、および分子メカニズムに基づく効果的な施与方法の検討
生物地球学部	本田 充彦	自然科学研究機構 国立天文台	中間赤外線観測装置ONIcam～TMT MIR装置開発への布石
経営学科	塚常 健太	情報通信企業	無線ネットワーク最適化に向けたユーザ属性情報連携技術の共同研究
獣医学科	木村 展之	杏林大学	霊長類の脳におけるER/GA-SNARE蛋白質発現の分子生理・病理学的老化研究
獣医学科	作道 章一	気体関連企業	オゾンガスによるRSウイルスの不活化効果の研究
獣医学科	畑 明寿	愛媛県	UV照射による食品賞味期限延長技術の開発
獣医学科	畑 明寿	愛媛県	高圧加工技術による殺菌技術の開発
獣医学科	星 史雄	医薬品製造販売企業	猫の早期腎不全のバイオマーカーを用いた評価系の確立
獣医学科	鉾田 龍星	健康食品等関連企業	ローヤルゼリーによるミツバチ幹細胞活性化の解析
獣医学科	松田 彬	地域創生企業	愛媛県産水産物を活用したペットのおやつ
学生支援機構	平田 豊	繊維製品製造加工企業	安全安心な社会に向けたITシステムに関する共同研究
教育推進機構	青木 一勝	地質調査企業	EPMA分析による鉱物の変質過程に関する研究
教育推進機構	徳澤 啓一	佐世保市	洞窟遺跡の保存と活用
研究・社会連携機構	今山 武志	地質調査企業	高精度年代測定のための鉱物の選定基準及び試料調整法に関する研究
研究・社会連携機構	豊田 新	地質調査企業	放射線損傷を利用した年代測定法の基礎的研究と応用
研究・社会連携機構	中谷 達行	文房具生産販売企業	スパッタ支援プラズマCVD法によるDLC被覆超硬ボールの紙との摩擦特性の解明
研究・社会連携機構	星野 卓二	倉敷市	栽培ブドウと野生種シラガブドウの交配による新品種の作出

4.4 受託研究

企業や学外の研究機関等からの研究の委託を受けて、研究者が研究を行いその成果を委託者に報告する受託研究の過去5年間の推移を下図に示す。尚、下図のデータは研究完了年度で集計している。また、2023年度および2024年度に受託研究を行った各年度全ての研究題目を掲載した。

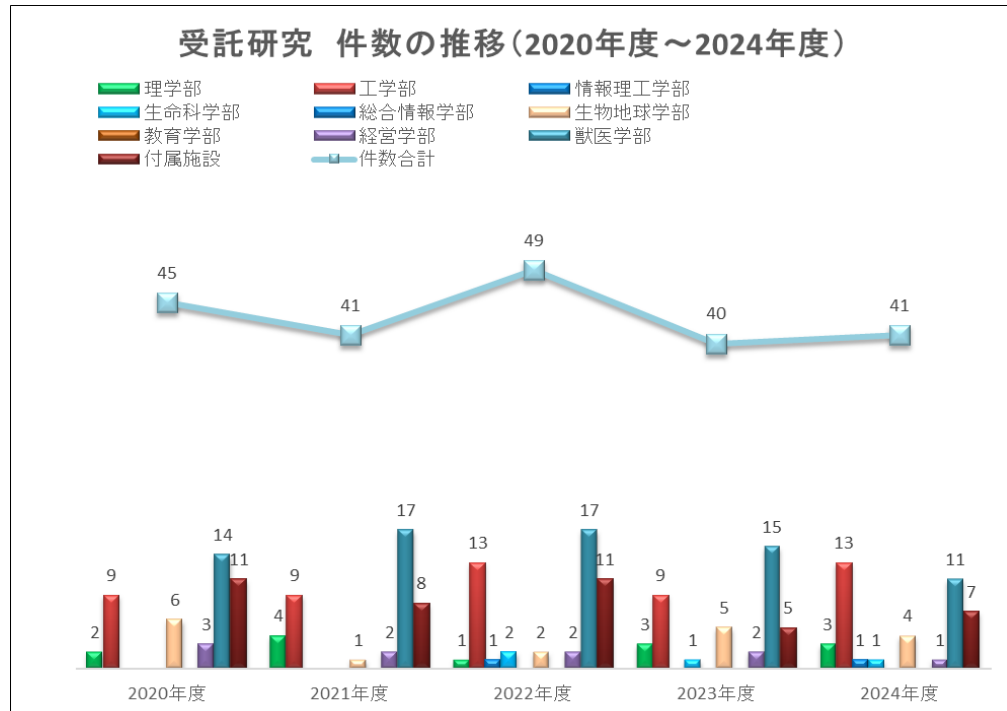


図4-9 受託研究の件数の推移

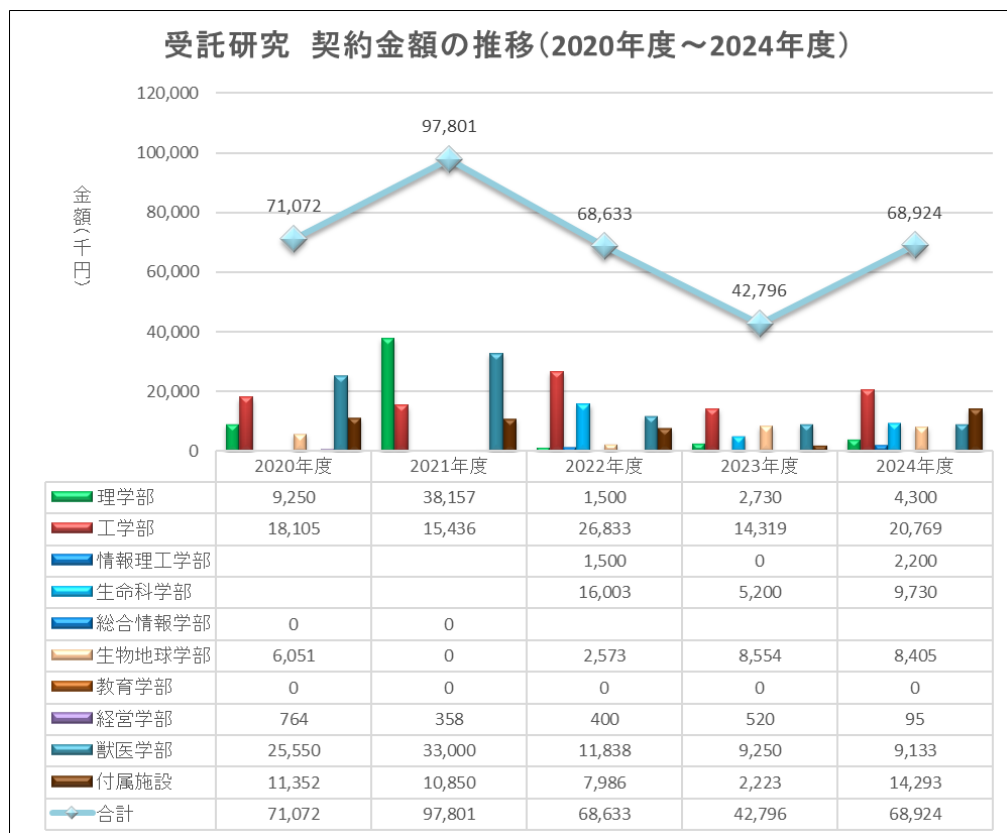


図4-10 受託研究の契約金額の推移

表4-9 2023年度（令和5年度）受託研究

所 属	研究代表者	受託研究先	研究題目
工学部	麻原 寛之	岡山県	走行中電動車両への電力供給技術開発と排熱発電システムのバッテリー給電実証
工学部	笠 展幸	岡山県	電気自動車トラクションSicインバータの低ノズル化・高効率化の研究開発
工学部	牧 涼介	東京工業大学	福島原子力発電所事故由来の難固定核種の新規ハイブリッド固化への挑戦と合理的な処分概念の構築・安全評価
工学部	牧 涼介	原子力環境整備促進・資金管理センター	模擬仮焼体に関わる試験
工学部	麻原 寛之	映像機器関連企業	可採熱量計測ユニットの開発に関わる研究
工学部	草野 圭弘	建築資材製造販売企業	竹の不燃化・耐候性向上品の開発
工学部	八百板 季穂	真庭市	真庭市勝山町町並み保存地区等の歴史的建造物の学術調査
工学部	牧 涼介	原子力環境整備促進・資金管理センター	放射能核種の超長期安定化に向けた次世代型シンロック固化技術の開発
工学部	牧 涼介	鉄鋼製造企業	模擬ハル酸化膜等の評価
理学部	東村 秀之	岡山県	超高容量の新規正極材料の開発
理学部	新原 隆史	自然科学研究機構	火星隕石に含まれる火星表面土壌から探るハビタビリティ
理学部	佐藤 泰史	貴金属製造販売企業	母乳ジュエリーの品質分析及び検証
教育推進機構	高原 周一	美作市	理科大好き応援事業
経営学部	藤原 美佳	繊維製造販売企業	PBL（課題解決型学習）を用いて、（株）いぶきで生産される農作物を高級ブランド化するための施策を提案する。
経営学部	宮脇 靖典	岡山情報文化研究所	PBL（課題解決型学習）を用いて、Z世代の意識調査に基づき、大学生世代が考えるおかやまの未来像に関する研究。
生命科学部	濱田 隆宏	科学技術振興機構	植物における細胞外小胞の取込みメカニズムの解明
生物地球学部	佐藤 丈晴	建設コンサルタント企業	AI 技術を活用したLPデータからの地形要因抽出
生物地球学部	佐藤 丈晴	建設コンサルタント企業	AIを用いた土砂移動域抽出
生物地球学部	佐藤 丈晴	国土交通省中国地方整備局	河川・流域における内水対策及び内水浸水予測に関する研究
生物地球学部	佐藤 丈晴	国土交通省中国地方整備局	建設DX推進のための3次元データの有効活用法の検討
生物地球学部	佐藤 丈晴	国土交通省中国地方整備局	建設DXを活用した老朽橋梁の監視に関する研究
研究・社会連携機構	星野 卓二	浅口市	市指定名勝三郎島（三ツ山）の植生調査業務委託
研究・社会連携機構	金子 明裕	倉敷市	ブドウ果実及びワインの成分分析による赤ワイン醸造のための総合的助言及び指導
研究・社会連携機構	岩井 良輔	医薬品製造販売企業	ブタ軟骨評価モデルの確立
研究・社会連携機構	山口 太一	海産物養殖関連企業	ウニを対象とした循環型養殖技術の開発

獣医学部	中村 進一	動物病理検査・研究受託企業	コンサルタント業務
獣医学部	中村 進一	動物病院	飼い鳥の疾病診断に関する病理学的研究
獣医学部	中村 進一	鹿児島市水族館公社	ハンドウイルカの第一胃内視鏡生検材料を用いた病理学的研究
獣医学部	中村 進一	鹿児島市水族館公社	ピラルクーの骨疾患の病理学的研究
獣医学部	森川 茂	愛媛県畜産協会	県内野生獣における重症熱性血小板減少症候群及びE型肝炎の抗体保有状況調査
獣医学部	岩田 恵理	エンタメ関連企業	イルカ類の個体群解析に関する研究
獣医学部	中村 進一	鹿児島市水族館公社	眼球突出がみられたピラルクーの病理学的研究
獣医学部	手島 玲子	内閣府	アニサキス食中毒リスク評価に関する調査研究
獣医学部	中村 進一	水族館	海獣類の疾病に関する病理学的研究
獣医学部	久枝 啓一	動物用医薬品製造企業	乳房炎罹患牛の疼痛及び治療による疼痛感受性の変化に関する調査
獣医学部	中村 進一	水族館	飼育動物の疾病に関する病理学的研究
獣医学部	中村 進一	水族館	海獣類の疾病に関する病理学的研究
獣医学部	中村 進一	動物病院	飼い鳥の疾病診断に関する研究
獣医学部	中村 進一	動物病院	飼い鳥の免疫染色に関する研究
獣医学部	森川 茂	日本医療研究開発機構	愛玩動物由来人獣共通感染症の対策を目指した総合研究

表4-10 2024年度（令和6年度）受託研究

所 属	研究代表者	受託研究先	研究題目
理学部	大坂 昇	岡山県	ハロゲンフリーで低環境負荷な難燃性リグノセルロースナノファイバーの開発とバイオプラスチックの複合化
理学部	佐藤 泰史	総合電機企業	コンサルタント業務
理学部	東村 秀之	岡山県	超高容量の新規正極材料の開発
工学部	麻原 寛之	岡山県	熱電池を利用した電池交換不要な高効率・高出力無線通信用電源の開発
工学部	岩野 耕治	科学技術振興機構	高風速時の海面を通しての熱輸送機構の解明
工学部	折田 明浩	岡山県	パイ拡張有機材料の精密合成を志向した光駆動反応用フローマイクロリアクターの開発
工学部	笠 展幸	岡山県	パワー半導体SiCデバイスを使用した自動車・産業用インバータの低ノズル化・高効率化の研究開発
工学部	草野 圭弘	建築資材製造販売企業	竹の不燃化・耐候性向上品の開発
工学部	桑木 賢也	中国地域創造研究センター	電子部品高密度実装基板の高品質はんだ付けを実現する溶解はんだ流動制御技術の開発
工学部	關 正憲	試験場	スラストころ軸受け用材料の開発
工学部	牧 涼介	鉄鋼製造企業	模擬ハル酸化膜等の評価
工学部	牧 涼介	原子力環境整備促進・資金管理センター	放射性核種の超長期安定固化に向けた次世代型シンロック固化技術の開発
工学部	松宮 潔	岡山県	超高齢化社会における低侵襲治療の実現に向けた岡山発の革新的医療ロボット：基盤技術の発展
工学部	中山 哲士	不動産業	都市・建築環境システムにおける計画法と評価法に関する研究
工学部	中西 啓二	建築設計事務所	パイルドラフト基礎の設計法に関する研究（その2）
工学部	弥田 俊男	天然調味料製造企業	魚醤油体験施設を活用した地域活性化手法に関する研究
情報理工学部	劉 渤江	建設コンサルタント企業	3Dデータから線分データを作成するアルゴリズムの研究、並びに自動設計アルゴリズムのコア部品の研究
生命科学部	山本 俊政	情報通信企業	好適環境水を用いたベニザケ（2倍体または3倍体）の実用化に向けた完全閉鎖型陸上養殖技術の確立
生物地球学部	佐藤 丈晴	建設コンサルタント企業	AIを用いた土砂移動域抽出
生物地球学部	佐藤 丈晴	国土交通省中国地方整備局	河川・流域における内水対策及び内水浸水予測に関する研究
生物地球学部	佐藤 丈晴	国土交通省中国地方整備局	建設DXを活用した老朽橋梁の監視に関する研究
生物地球学部	佐藤 丈晴	国土交通省中国地方整備局	レーダー雨量・土壌雨量指数に基づく道路路面リスク箇所の安定度評価
経営学科	藤原 美佳	地域創生企業	PBL（課題解決型学習）による矢掛町のまちづくりの調査研究および矢掛町活性化のための具体的な施策の提案
獣医学科	新井 清隆	医薬品製造販売企業	プリリアントブルーG製剤（1BF-05）の脊髄損傷により歩行不能となった不全麻痺及び完全麻痺の犬における治験
獣医学科	嘉手苅 将	自然動物公園	動物園動物の病理学的研究

獣医学科	中村 進一	動物病院	飼い鳥の疾病に関する病理学的研究
獣医学科	中村 進一	動物病院	飼い鳥の疾病診断に関する研究
獣医学科	中村 進一	動物病院	飼い鳥の疾病診断に関する病理学的研究
獣医学科	中村 進一	名古屋みなと振興財団	死亡したウミガメの諸臓器の病理検査
獣医学科	中村 進一	名古屋みなと振興財団	魚類とアデリーペンギンの病理検査
獣医学科	中村 進一	水族館	海獣類の疾病に関する病理学的研究
獣医学科	中村 進一	水族館	海獣類の疾病に関する病理学的研究
獣医学科	藤井 ひかる	愛媛県畜産協会	県内野生獣における重症熱性血小板減少症候群及びE型肝炎の抗体保有状況調査
獣医学科	陸 拾七	日本医療研究開発機構	結核と鼻疽の制圧プロジェクト
教育推進機構	高原 周一	美作市	理科大好き応援事業
研究・社会連携機構	岩井 良輔	日本医療研究開発機構	体内管状組織形成具（バイオチューブメーカー）の薬事承認に向けた医療主導治験に関する研究
研究・社会連携機構	岩井 良輔	日本医療研究開発機構	多能性体性幹細胞の体内集積具の開発と探索的医師主導治験
研究・社会連携機構	江面 嗣人	西大寺活性化協議会	西大寺五福通り地区等の歴史的町並み保存対策調査
研究・社会連携機構	金子 明裕	倉敷市	ブドウ果実及びワインの成分分析による赤ワイン醸造のための総合的助言及び指導
研究・社会連携機構	辻 維周	広告代理店	奄美のクロウサギに対する鹿ソニックの効果検証
研究・社会連携機構	星野 卓二	浅口市	市指定名勝三郎島（三ツ山）の植生調査業務委託

4.5 寄付金

学外の団体あるいは個人等から研究の奨励・成果等に対する受け付けた寄付金を下図に過去5年間の推移を示している。また、2023年度および2024年度に寄付をいただいた分野と研究者を掲載する。

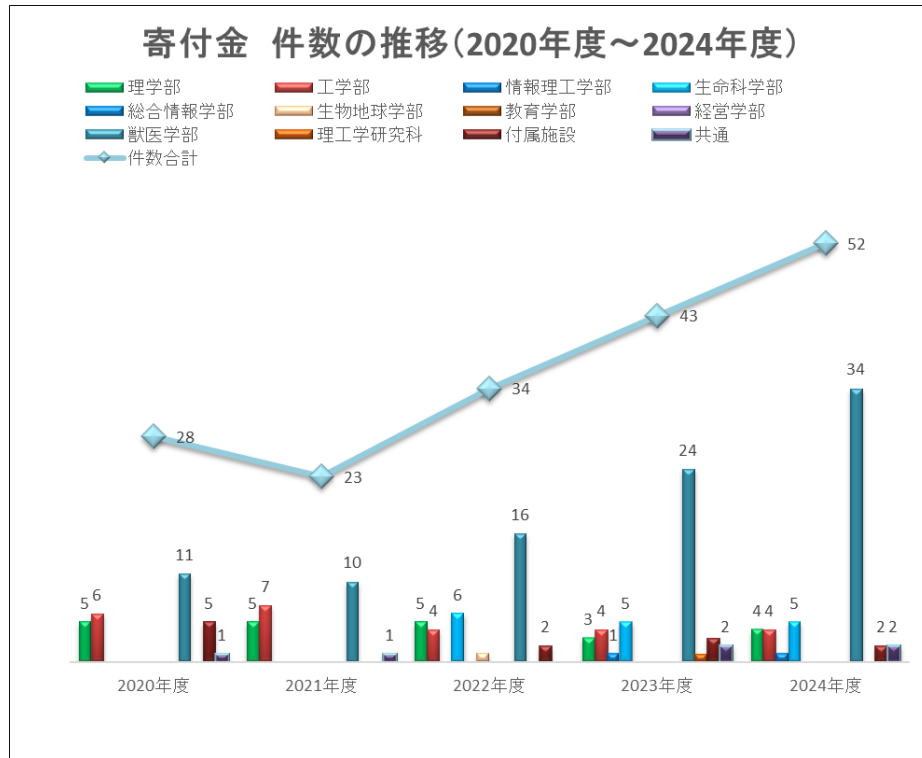


図4-11 寄付金の件数の推移

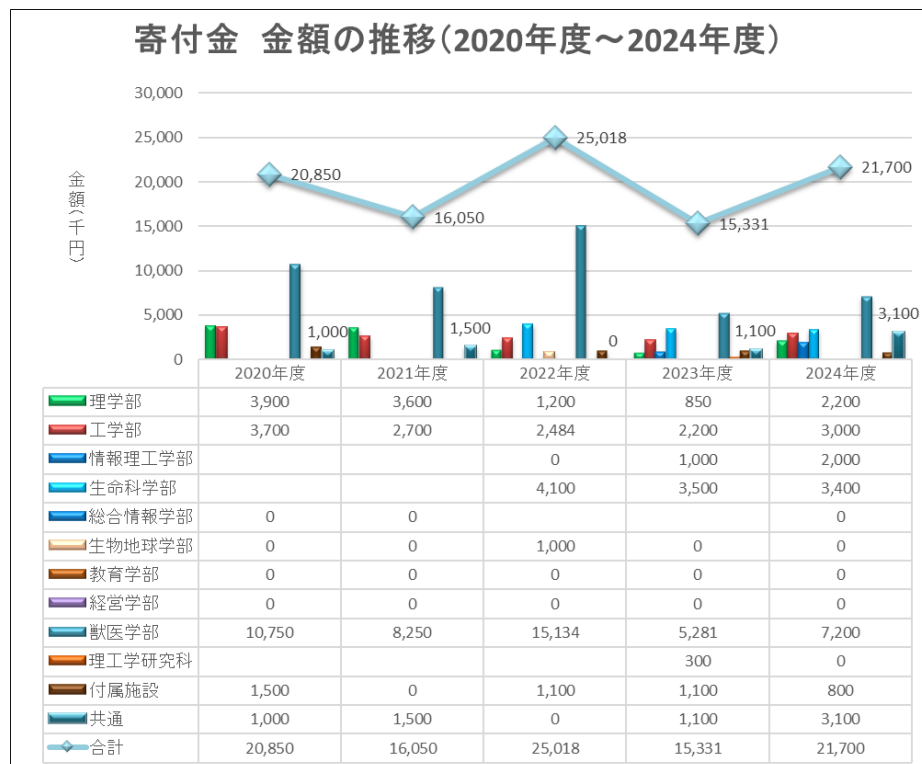


図4-12 寄付金の金額の推移

表4-11 2023年度（令和5年度）寄付金

所 属	研究者氏名	寄付者
理学部	川本 大祐	電力関連企業
理学部	新原 隆史	碎石製造販売企業
理学部	森 嘉久	システム設計関連企業
工学部	押谷 潤	粉体工学情報センター
工学部	清水 一郎	医療機器製造販売企業
工学部	關 正憲	公益社団法人 精密工学会
工学部	竹村 明洋	一般社団法人 日本鉄鋼協会
情報理工学部	赤木 徹也	機器製造販売企業
生命科学部	汪 達紘	測定機器製造販売企業
生命科学部	松浦 信康	製薬関連企業
生命科学部	松浦 信康	海藻加工関連企業
生命科学部	松浦 信康	食品関連企業
生命科学部	三井 亮司	製薬関連企業
獣医学部	宇根 有美	動物病院
獣医学部	宇根 有美	動物輸入卸企業
獣医学部	大和田 一雄	化成品製造企業
獣医学部	汾陽 光盛	個人
獣医学部	汾陽 光盛	個人
獣医学部	汾陽 光盛	個人
獣医学部	汾陽 光盛	個人
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物園
獣医学部	中村 進一	動物園
獣医学部	中村 進一	水族館
獣医学部	中村 進一	個人
獣医学部	深瀬 徹	食品製造販売業
獣医学部	藤谷 登	食品製造販売業
獣医学部	宮前 二朗	岡山理科大学
教育推進機構	矢城 陽一朗	化成品製造企業

研究・社会連携機構	江面 嗣人	一般社団法人 西大寺活性化協議会
研究・社会連携機構	江面 嗣人	一般社団法人 西大寺活性化協議会
研究・社会連携機構	金子 明裕	製薬関連企業
岡山キャンパス		特殊法人
今治キャンパス		特殊法人

36

獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物病院
獣医学部	中村 進一	動物園
獣医学部	中村 進一	動物園
獣医学部	中村 進一	水族館
獣医学部	中村 進一	一般社団法人 ベビーキャットレスキュー
獣医学部	中村 進一	個人
獣医学部	深瀬 徹	食品製造販売業
獣医学部	深瀬 徹	食品製造販売業
教育推進機構	矢城 陽一朗	化成品製造企業
研究・社会連携機構	金子 明裕	製薬関連企業
岡山キャンパス		特殊法人
今治キャンパス		特殊法人

5. 学内共同研究の活性化に向けた取り組み

5.1 岡山理科大学プロジェクト研究推進事業

2016年度より岡山理科大学の研究活動を活発化させ、優れた研究グループ及び若手研究者の重点化・拠点化を目的とした「岡山理科大学プロジェクト研究推進事業Grant for Promotion of OUS Research Projects」を開始した。本事業は、岡山理科大学を代表する特色ある研究の育成を目指すものであり、特に社会的要請のある課題解決や学外の競争的資金を獲得するためのスタートアップとなる研究に助成を行っている。

プロジェクト事業発足以来、2024年度までに56件の研究プロジェクトが採択された。

1. 配分対象

岡山理科大学の研究者が共同して取り組む研究グループを対象とし、公聴会の実施後、岡山理科大学プロジェクト研究推進委員会にて審査を行い、学長が最終決定する。

公募する研究課題は下記区分のとおり。

- (A) 社会的要請の強い研究
- (B) 大型競争的資金に申請予定の研究
- (C) 若手研究者（採択年度の4月1日現在において39歳以下）が代表の研究
- (D) 協定を締結している大学等との共同研究

2. 申請要件および応募資格

- (1) 申請者（研究代表者）は本学常勤教員（教授、准教授、講師、助教）
- (2) 一人の研究者が参加できるのは1つの研究課題のみ
- (3) 本学教員2名以上を含むグループで申請
- (4) (C) は、若手研究者が、イニシアチブをとるグループ研究
- (5) (D) のみ学外プロジェクトメンバーを加えることができる
- (6) (D) は採択後に当該研究期間との共同研究契約書の締結が必要
- (7) 研究期間は原則2年間

3. 課題ごとの応募金額

100万円～500万円（年額）

※学長会議の審議を経て配分額決定

※2年目の研究費は1年目の配分金額の1/2以下

※(D) の応募区分は1年目の研究費は200万円以上で申請

※本プロジェクトから学外研究者への研究費の配分は行わない

4. 公聴会

研究代表者によるプレゼンテーションを実施。

内 容：発表約10分、質疑応答約4分

審査員：学長、副学長、学部長、研究・社会連携センター長及びセンター次長等



2024年度公聴会の様子

5. 進捗状況の報告

研究内容を掲載したホームページを作成し、その後随時ホームページを更新。

http://renkei.office.ous.ac.jp/ous_project-2

6. 報告会

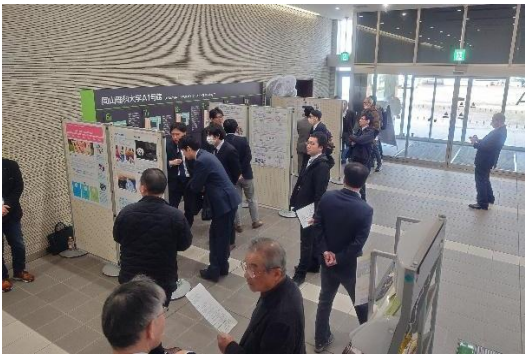
年度末に、研究代表者は「研究成果報告書」を提出し、報告会にて最終年度は「プレゼンテーショ

ン」1年目は「ポスター発表」にて研究成果の発表を行う。

学長、副学長、学部長、研究・社会連携センター長及びセンター次長等が審査を行い、最終年度を対象に「最優秀賞」、「学長特別賞」を決定する。



2023年度報告会の様子



2024年度報告会の様子

5.2 大型機器選定

岡山理科大学で行われる特色ある研究の活性化を推進するため、「岡山理科大学における私立学校施設整備費補助金及び私立大学等研究設備整備費等補助金で購入する大型機器の選定に関する申合せ（2016年12月16日施行、2023年7月1日改正）」を定め、これに基づいて、研究・社会連携機構が私立学校施設整備費補助金及び私立大学等研究設備整備費等補助金を利用して購入する大型機器の選定を行っている。

私立大学等研究設備整備費等補助金を受け、2021年度～2023年度にかけて以下の機器を導入した。

2021年度：遺伝子配列決定ハイスループット解析システム

（獣医学部獣医学科 齋藤 文代 准教授）

2022年度：シングルセル発現解析用ライブラリ作成装置

（獣医学部獣医学科 佐伯 亘平 准教授）

2023年度：タンパク質精製・解析システム

（生命科学部生物科学科 濱田 隆宏 准教授）

この間、2022年度購入希望機器の選定以降は、文部科学省の私学助成に係る年度当初の機器整備計画調査に間に合うよう変更したスケジュールで実施し、選定委員が「機器の性能・特徴」、「必要性や公共性」、「ユーザーグループの構成とアクティビティ」および「波及効果と将来性」の4つの項目について評価し、優先順位を決定するようになった。

また、2024年度購入希望機器の選定に関しては、2022年12月23日付け文部科学省の通知にて、例年6月としていた機器整備計画調書の提出期限を2023年1月20日とするとの通知があり、2024年度の当初スケジュールでは対応できなくなったため、選定を中止した。

以上の経緯を踏まえ、2025年度及び2026年度購入希望機器の選定概要を以下に記す。

2025年度購入希望機器選定スケジュール

《申請書提出期間》 2023年8月21日～2023年9月16日
（申請書類は学内にWeb上で公開）

《公聴会》《選定会議》 2023年9月21日開催

応募機器 ・SX-Aurora TUBASA
・卓上型核磁気共鳴分光計システム
・単結晶X線構造解析装置

選定結果 1位 卓上型核磁気共鳴分光計システム

《研究・社会連携機構会議》2023年10月4日開催

大型機器整備の優先順位の決定

《学長会議》 2023年10月10日開催

審議結果 ・購入する大型機器整備の候補を決定

2026年度購入希望機器選定スケジュール

《申請書提出期間》 2024年9月23日～2024年10月11日
（申請書類は学内にWeb上で公開）

《公聴会》《選定会議》 2024年10月30日開催

応募機器 ・単結晶X線構造解析装置
・超高感度等温滴定型カロリメーター

選定結果 1位 単結晶X線構造解析装置

《研究・社会連携機構会議》2024年11月6日開催

大型機器整備の優先順位の決定

《学長会議》 2024年11月26日開催

審議結果 ・購入する大型機器整備の候補を決定 本学は、

5.3 プロジェクト機器選定

岡山理科大学では、令和3年度は古生物学・年代学研究センターと建築歴史文化研究センターが、それぞれ設置されるなど、全学組織としての研究体制が整いつつある。大学のブランディング的な研究ともいえるような、個性的で魅力ある研究の推進という観点から専門性を優先させた学内の多様な部署の教員間の連携が重要であり、専門性の高い研究機器が必要不可欠となっている。このような状況を鑑み、2020年度より、「岡山理科大学における私立大学経常費補助金特別補助で購入するプロジェクト機器の選定に関する申合せ（2020年9月1日施行、2023年7月1日改正）」を定め、これに基づいて、研究・社会連携機構が私立大学経常費補助金特別補助を利用して購入するプロジェクト機器の選定を行っている。

選定方法は、選定委員が「学術的独自性・創造性」「研究の波及効果と将来性、附属施設の活性化」「機器の必要性」および「研究グループのアクティビティ」の4つの項目について評価し、優先順位を決定する。

2024年度購入希望機器の選定の概要は以下のとおりであった。

- 《申請書提出期間》 2023年8月21日～ 2023年9月10日
(申請書類は学内にWeb上で公開)
- 《公聴会》《選定会議》 2023年9月21日開催
- 応募機器 ・電気化学アナライザー・光ファイバースペクトロメーター一式
・プレパラップオート
- 選定結果 1位 プレパラップオート
2位 電気化学アナライザー・光ファイバースペクトロメーター一式
- 《研究・社会連携機構会議》 2023年10月4日開催
(プロジェクト機器の優先順位を決定)
- 《学長会議》 2023年10月10日開催
- 審議結果 ・購入するプロジェクト機器整備の候補を決定

2025年度購入希望機器の選定の概要は以下のとおりであった。

- 《申請書提出期間》 2024年9月23日～ 2024年10月11日
(申請書類は学内にWeb上で公開)
- 《公聴会》《選定会議》 2024年10月30日開催
- 応募機器 ・電気化学アナライザー・分光電気化学システム一式
- 選定結果 1位 電気化学アナライザー・分光電気化学システム一式
- 《研究・社会連携機構会議》 2024年11月6日開催
(プロジェクト機器の優先順位を決定)
- 《学長会議》 2021年11月26日開催
- 審議結果 ・購入するプロジェクト機器整備の候補を決定

5.4 キャンパス間連携の取り組み

研究社会連携部は、2018 年度に今治キャンパスに獣医学部が開設されてから継続的にキャンパス間交流による学内共同研究の活性化につとめている。「岡山理科大学プロジェクト研究推進事業」では、2019年度～2022年度に引き続いて、2023年度、2024年度にも岡山キャンパスの学部および研究センターと今治キャンパス獣医学部の研究者による共同研究が行われており、これらの特色ある共同研究の成果は毎年2月末に開催した「岡山理科大学プロジェクト研究成果合同報告会」にて報告されている。また、同時期に開催した「OUS研究者交流会」においても、岡山キャンパスの学部および研究センターと今治キャンパス獣医学部の研究者等による活発な交流が行われている。下記のそれぞれの概要を記す。

【2023年度岡山理科大学プロジェクト研究成果合同報告会】

2024年2月29日に2023年度岡山理科大学プロジェクト研究成果合同報告会を開催した。その中で、プロジェクト研究推進事業2022最終報告6件のうち「犬の慢性弁膜症の診断・治療方法の確立」（獣医学部：杉本佳介（代表）、北川均、藤谷登、工学部：小畑秀明、他）、および「非侵襲的手法を用いたコウモリ保有病原体叢の解明」（獣医学部：渡辺俊平（代表）、畝田龍星、理学部：中本敦）の2件が、キャンパス間連携による共同研究であった。また、プロジェクト研究推進事業2023中間報告ポスター発表6件のうち、「人間と動物の共生を目的とした「人間・動物の負担軽減・ストレス軽減」させる工学システムの開発」（工学部：荒井伸太郎（代表者）、片山謙吾、小田哲也、獣医学部：岩田恵理、佐伯亘平、吉竹涼平、他）、「腱メカノバイオロジー機構の解明」（獣医学部：伊豆弥生（代表者）、フロンティア理工学研究所：岩井良輔、情報理工学部：李天鎬、他）、および「新学術領域、獣医療工学・獣医療福祉工学の創生を目指した社会実装型動物関連デバイスの開発」（獣医学部：江藤真澄（研究代表）、情報理工学部：赤木徹也、他）の3件が、キャンパス間連携による共同研究であった。

【2024年度岡山理科大学プロジェクト研究成果合同報告会】

2025年2月27日に2024年度岡山理科大学プロジェクト研究成果合同報告会を開催した。その中で、プロジェクト研究推進事業2023最終報告6件のうち「人間と動物の共生を目的とした「人間・動物の負担軽減・ストレス軽減」させる工学システムの開発」（工学部：荒井伸太郎（代表者）、片山謙吾、小田哲也、獣医学部：岩田恵理、佐伯亘平、吉竹涼平、他）、「腱メカノバイオロジー機構の解明」（獣医学部：伊豆弥生（代表者）、フロンティア理工学研究所：岩井良輔、情報理工学部：李天鎬、他）、および「新学術領域、獣医療工学・獣医療福祉工学の創生を目指した社会実装型動物関連デバイスの開発」（獣医学部：江藤真澄（研究代表）、情報理工学部：赤木徹也、他）の3件が、キャンパス間連携による共同研究であった。また、プロジェクト研究推進事業2024中間報告ポスター発表7件のうち、「高度な安全性を実現する「超洗浄」技術基盤研究」（工学部：古賀雄一（代表者）、獣医学部：作道章一）、および「ハンドトラッキングデバイスを用いた獣医学教育用心臓超音波検査シミュレーターの開発と教育効果の測定」（獣医学部：神田鉄平（代表者）、情報理工学部：大山和紀、他）の2件が、キャンパス間連携による共同研究であった。

【2024年度OUS研究者交流会】

2023年度と同様に、「岡山理科大学プロジェクト研究成果合同報告会」に合わせ、岡山キャンパスA1号館地階学生控室にて、2025年2月26日から3月4日の期間に114件のポスター展示による「2024年度OUS研究者交流会」を実施した。展示者である研究者を2グループに分けて、2月27日の16時から17時と2月28日の10時から11時とのそれぞれの時間帯にコアタイムとして、インタラクティブに情報交換できる場を設けた。2024年度から今治キャンパス獣医学部からの展示19件が加わり、両キャンパスの研究者の幅の広い研究分野の情報を共有することができた。

以上のように2023年度と2024年度は、岡山キャンパスと今治キャンパスとのキャンパス間交流を継続的に進めており、多くの研究が熟成しつつある。これらの取り組みによる成果を学内外に広く周知するとともに、今後さらに連携を発展させていきたい。

6. コンプライアンスへの取り組み

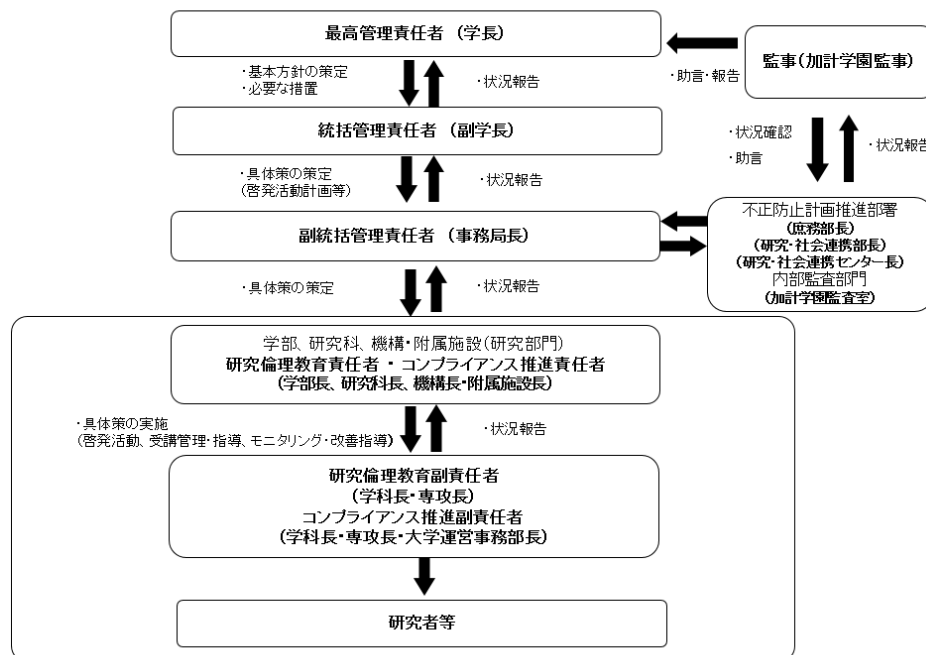
6.1 不正行為・不正使用防止の取り組み

国費が充当されている公的研究費の運営管理については内閣府から『競争的研究費の適正な執行に関する指針』（平成17年9月9日、令和3年12月17日改正）が示されている。本学では文部科学省が定めた『研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）』（平成19年2月15日文部科学大臣決定、令和3年2月1日改正）に基づき、『公的研究費の運営・管理を適正に行うための実施要領』、『岡山理科大学における公的研究費の使用に関する行動規範』、『岡山理科大学公的研究費の取扱いに関する規程』、『岡山理科大学における公的研究費の不正使用防止に関する基本方針』などを整備し、必要に応じて随時見直しを行うなど適正な運用に向けた取り組みを継続的に行っている。

また「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン（平成26年8月26日文部科学大臣決定）」に基づき、『研究活動の不正行為・研究費の不正使用の防止に関する責任体制図』、『岡山理科大学研究活動における不正行為の防止及び対応に関する規程』を整備し、公的研究費の不正使用防止、研究活動の不正行為の防止への取り組みを行っている。このガイドラインでは、研究データの保存状況を毎年度確認することを義務付けている。本学では実施にあたり、『岡山理科大学研究活動における不正行為の防止及び対応に関する規程』、及び『岡山理科大学における研究データの保存等に関する取扱要領』を定め、毎年度、『研究データの保存等に関する自己チェックリスト』を全ての研究者に実施している。

さらに『岡山理科大学研究活動における不正行為の防止及び対応に関する規程』、『岡山理科大学における研究倫理教育に関する申合せ』により、本学の教職員、大学院生等はAPRIN e-ラーニングプログラム教材を利用して、5年に1度研究倫理教育を受講することを義務付けている。

岡山理科大学 研究活動の不正行為・研究費の不正使用の防止に関する責任体制図



6.2 安全保障輸出管理の取り組み

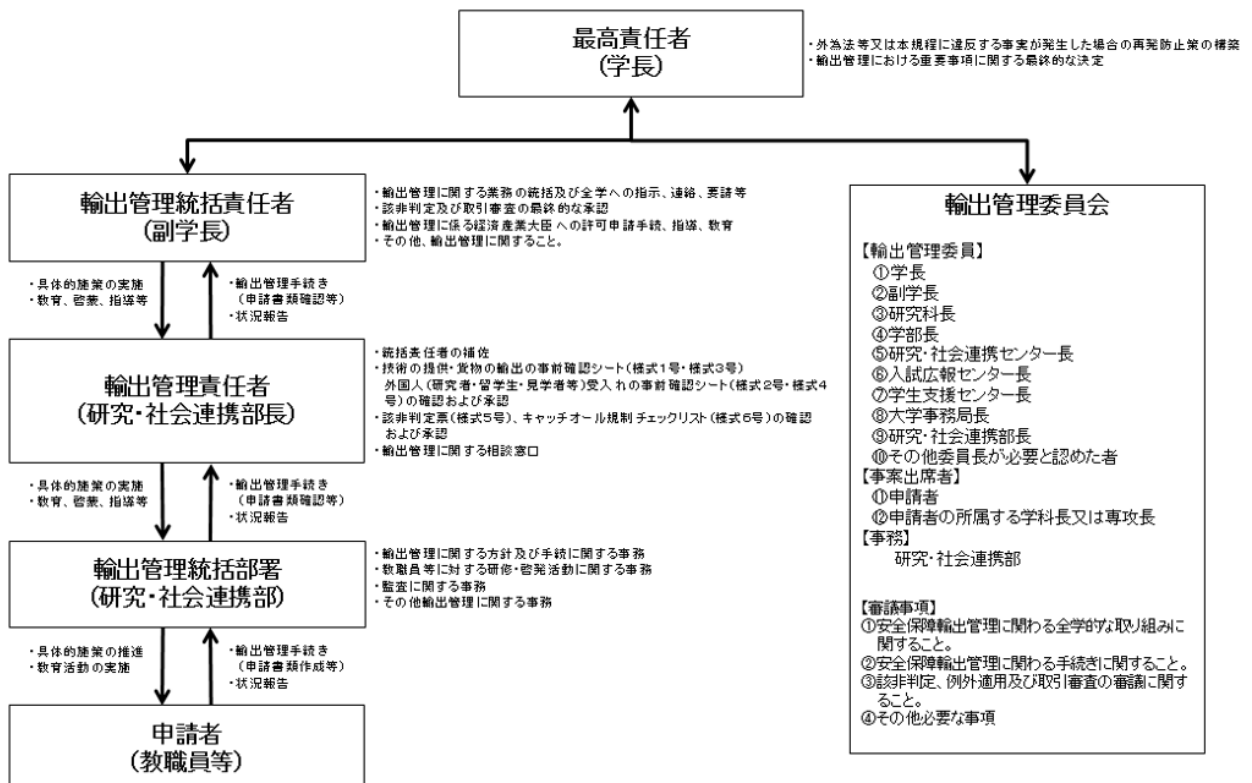
安全保障輸出管理とは、世界各国が国際的な平和や安全を維持するため、特定の貨物および特定の技術を規制する国際的な管理である。武器や軍事転用可能な貨物・技術が、国際社会の安全性を脅かす国家やテロリスト等に渡ることを防ぐことを目的としており、わが国では「外国為替及び外国貿易法（外為法）」とその関連法令により安全保障輸出管理規制が行われている。規制の対象となる物品の輸出、技術の提供等を行う際には、経済産業大臣の許可が必要であり、無許可で輸出・提供すると法律に基づき刑事罰や行政制裁が科されることがある。

本学では、「岡山理科大学安全保障輸出管理規程」（令和2年9月1日施行、令和7年4月1日改正予定）及び「岡山理科大学輸出管理委員会規程」（令和2年9月1日施行、令和6年12月1日改正）を定めている。令和6年度には、令和4年5月1日付けの経済産業省令等の改正に伴う「みなし輸出管理の明確化」の措置に迅速かつ効率的に対応できるように安全保障輸出管理関連様式（様式1～10）を整備した。さらに経済産業省令による「みなし輸出管理の明確化」の措置、及び新たな本学の様式についての理解を促進するため、全4回の安全保障輸出管理に関するFD・SD講演会を実施した。

主な変更点としては、研究者の該非判定チェック票（様式1号）および、外国為替及び外国貿易法第25条第1項及び第2項の遵守のための特定類型該当性に関する誓約書（様式9号）を本学に所属する全研究者に提出することを義務づけた。また簡便で効率的な許可申請を可能とするために、事前確認シート【技術・情報の提供／物品の輸出用】（様式2号）や事前確認シート【外国人等受入用】（様式3号）を整備した。これらの様式により、新たに安全保障輸出管理の対象となる特定類型対象者へのみなし輸出管理を確実に行えるようにした。さらに国内出張に関しても「出張伺い及び旅費起案書」に「技術・情報の提供の有無」について、記載することとした。

近年、研究活動の国際化、オープン化に伴うリスクにより、研究環境の基盤となる価値が損なわれる、あるいは意図せず利益相反・責務相反に陥る危険性が危惧されている。このような状況下、統合イノベーション戦略2020（令和2年7月17日閣議決定）や科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月26日閣議決定）に基づき、政府は、研究者及び大学・研究機関等における研究の健全性・公正性（研究インテグリティ）の自律的な確保を求めており、その対応方針として「統合イノベーション戦略推進会議（第9回）」（令和3年4月27日）において「研究活動の国際化、オープン化に伴う

岡山理科大学 輸出管理体制図



新たなリスクに対する研究インテグリティの確保に係る対応方針について」が決定されている。これに基づき、科研費を始めとする公的外部資金の応募には「研究の健全性・公正性(研究インテグリティ)の確保」についての適切な対応が必須となった。

本学では「岡山理科大学における研究インテグリティの確保に関する規程」を整備し、博士後期課程学生を含めた全研究者を対象に「岡山理科大学 研究活動の国際化、オープン化に伴うリスクマネジメント確認シート」の提出を求めることを実施している。

7.（産学官金連携に向けた）研究シーズの紹介

7.1 OUS研究者ナビゲーター

岡山理科大学は、「ひとりひとりの若人が持つ能力を最大限に引き出し技術者として社会人として社会に貢献できる人材を養成する」を建学の理念として1964年に開学し、理学部応用数学科・化学科のみで発足した本学は、2018年度には獣医学部も開設され、また文系学科として2016年度に開設された教育学部や2017年度に開設された経営学部もあり、研究シーズは、従来からの科学・技術分野のみならず、より幅広い分野に広がっている。

OUS研究者ナビゲーターはこのような幅広い分野に広がる本学の各教員が取り組んでいる研究を紹介するために、発行されている。

OUS研究者ナビゲーターには不定期に発行される印刷版と随時更新されるWeb版があり、印刷版は日本語版を2017年4月、2020年11月に発行、英語版を2019年10月に発行している。

Web版では、2023年度にサイトを改修し、検索性の向上を図るとともに、各研究者が現在取り組んでいるSDGsの目標を表示できる機能を追加した。

現在、最新情報を掲載しているWeb版で以下の所属教員を紹介している。

理学部：応用数学科、基礎理学科、物理学科、化学科、動物学科、臨床生命科学科

工学部：機械システム工学科、電気電子システム学科、情報工学科、応用化学科、建築学科、生命医療工学科

情報理工学部：情報理工学科

生命科学部：生物科学科

生物地球学部：生物地球学科

教育学部：初等教育学科、中等教育学科

経営学部：経営学科

獣医学部：獣医学科、獣医保健看護学科

教育推進機構：教育開発センター、基盤教育センター、教職支援センター、学芸員教育センター

学生支援機構：グローバルセンター、情報基盤センター

研究・社会連携機構：研究・社会連携センター、フロンティア理工学研究所、自然フィールドワークセンター、ワイン発酵科学センター、古生物学・年代学研究センター、建築歴史文化研究センター、工作センター、生物生産教育研究センター

●OUS研究者ナビゲーターWeb版（内容は随時更新）

OUS研究者ナビゲーター **next 50**
 ご意見・ご要望・お問い合わせは岡山理科大学 研究・社会連携部へお気軽にご連絡ください。
 TEL.086-256-9731 FAX.086-256-9732
 renkei@ous.ac.jp

363 件中 2件が該当しました。

■研究・社会連携機構 ワイン発酵科学センター 教授 金子 明裕 研究分野 醸造学、食品微生物学、機能性食品 キーワード ワイン、醸造、酵母、食品の機能性 研究テーマ ☐ ワイン醸造 ☐ ワイン用微生物（酵母、乳酸菌）の育種・選抜 ☐ ワインをはじめとした食品の機能性評価 ▶ 研究活動の概要を表示	■研究・社会連携機構 ワイン発酵科学センター 准教授 川俣 昌大 研究分野 ワイン学、栽培学、園芸学 キーワード ワイン、ブドウ、栽培、果樹、気候、土壌 研究テーマ ☐ 栽培地の気候および土壌とブドウ品質 ☐ 栽培地域とブドウ品種 ☐ 水分ストレスとブドウの品種 ▶ 研究活動の概要を表示
--	--

検索キーワード

検索する

すべて表示 絞り込み検索

学部・学科から探す

理学部	工学部	情報理工学部	生命科学部
生物地球学部	教育学部	経営学部	獣医学部
教育推進機構	学生支援機構	研究・社会連携機構	通信教育部情報理工学部

SDGsで探す



▲ PAGE TOP

岡山理科大学 研究・社会連携部
 〒700-0005 岡山市北区瑞大町1-1 TEL.086-256-9731 FAX.086-256-9732
 E-mail:renkei@ous.ac.jp

Copyright (c) Okayama University of Science All rights reserved.

7.2 OUSフォーラム

OUSフォーラムは研究を通じた地域貢献を目的に、岡山理科大学独自の取り組みとして、他大学に先駆けて2001年度にスタートし2024年度で第24回目を迎えた。途中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）（以下「コロナ」という。）の感染拡大のため中止の危機に直面したものの、2020年度および2021年度はWeb開催、2022年度は対面とWebを組み合わせたハイブリッド開催で乗り切り、2023年度以降は対面開催へと復帰した。

図1に過去10年の研究シーズの出展テーマ数の推移を示す。2016年度の教育学部、2017年度の経営学部、2018年度の獣医学部開設に伴い、出展数は増加した。一方、2019年度より代表教員1名あたりの出展数を3件までに制限したことにより減少し、さらに、2022年度は情報理工学部および生命科学部が開設されたものの、ハイブリッド開催に伴う対面での出展数に制限を設けたことから、出展数は64件となった。その後も出展数には一定の制限を設けているが、2023年度の対面開催への復帰以降は出展数が増加した。その結果、2024年度はコロナ禍前の水準を回復し、過去最多タイとなる110件の出展があった。

図2に過去10年の参加人数の推移を示す。ただし、2020年度、2021年度はWeb開催であり、参加人数はWebへのアクセス者数である。2018年度、2019年度は学内外から400名を越える参加者があったが、2022年度にはコロナの影響により250名まで減少した。しかし、2023年度、2024年度と順調に増加し、2024年度にはコロナ禍前の水準まで回復した。一方、一般参加者は飽和傾向にあり、魅力発信のための工夫が必要と思われる。

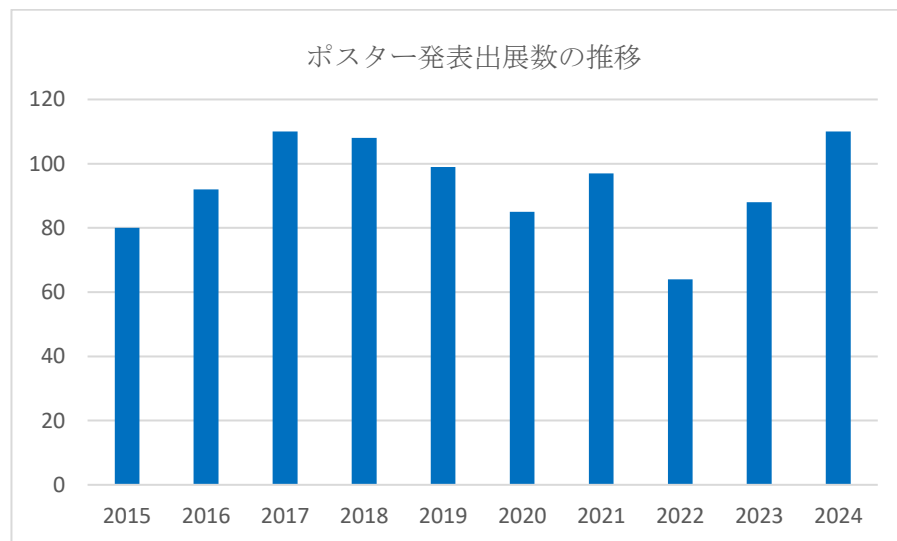


図7-1 研究シーズのポスター発表出展テーマ数（2020年度、2021年度はオンライン）

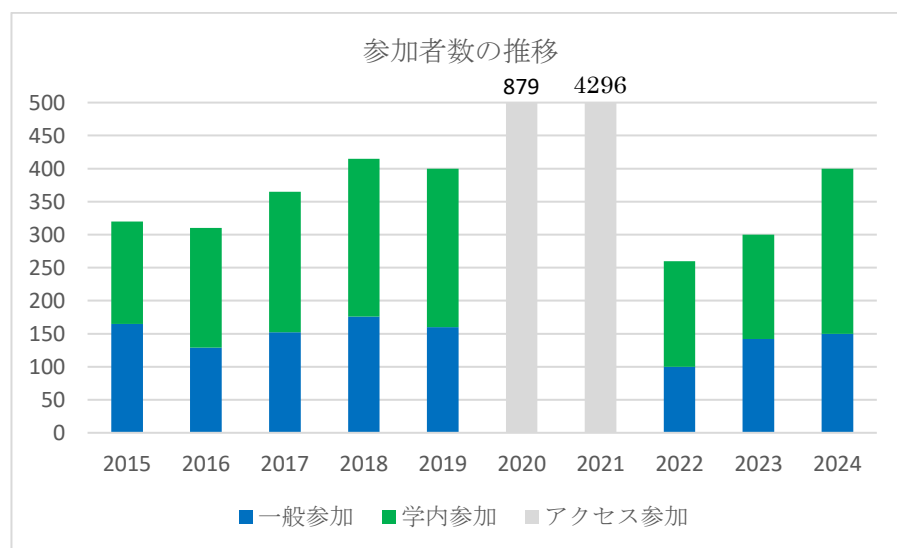


図7-2 参加人数の推移（2020年度と2021年度はアクセス数）

■OUSフォーラム2023

開催場所：岡山プラザホテル

開催日時：2023 年 11 月 27 日(月) 13:00～17:50

2023年度で第23回目の開催となった。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大の終息し、この年度から対面開催に復帰した。特別記念と産学官金連携の会場は引き続き比較的広い会場として、研究シーズの発信となるポスター展示については、代表者あたりの発表件数を3件の制限を継続したものの88件の応募があり、2016年度のレベルとなった。参加者数は300名とコロナ前までには戻してはいないものの、件数と同様に2016年の水準まで復帰した。

【特別記念講演】13:10～14:00

「一井原から世界へー

タカヤ株式会社の歴史と2030 年に向けての成長戦略について」

タカヤ株式会社 代表取締役社長

岡本 龍二 様

タカヤ株式会社 取締役 事業開発本部長

剣持 雄一 様

講演概要：タカヤ株式会社は1894年に岡山県西部の井原市にて織物業として創業した企業です。1960年代以降、電子機器の組み立て、産業機器の製造、RFID 機器の製造及びソフトウェア開発を軸として活動してまいりました。国内では岡山県内に本社及び4か所の工場と開発センター、東京、大阪、福岡に営業所を、海外では中国、タイに工場を有しております。第1 部は弊社における過去の歩みの紹介をし、第2 部では各事業部における事業内容の紹介と2030年を見据えた各事業部における成長戦略につきまして紹介をさせていただきます。



特別記念講演風景



【産学官金連携事例紹介】14:00～14:30

①「高周波・低周波による獣害対策」

：岡山理科大学 教育推進機構 教授 辻 維周



②「地域における産学官連携のトリセツ」

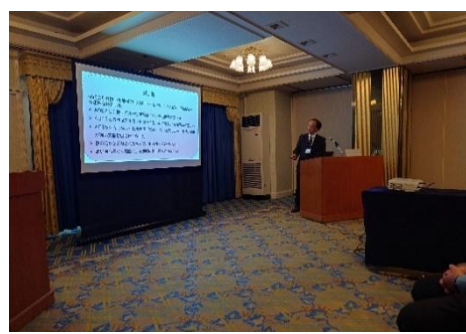
：岡山理科大学 URA 島田 和彦



産学官金連携事例紹介風景

【口頭発表】8件

1. 亜鉛ポルフィリン錯体に基づく可視光駆動型水素生成触媒の開発
理学部・教授・満身 稔
2. ニューコンセプト 非接触給電
理学部・准教授・石田 弘樹
3. シミュレーションデータを利用した地球近傍の暗黒物質密度の評価
理学部・講師・長尾 桂子
4. 水圧を利用した電源不要な非常用駆動源の開発
情報理工学部・講師・小林 亘
5. さくら花酵母の分離から雄町米純米酒「桜華」の開発まで
工学部・教授・滝澤 昇
6. オノマトペを活用した表現技能指導
教育学部・教授・妻藤 純子
教育学部・准教授・笹井 香
7. 腸内細菌の変化と血管内皮機能の検討～リン脂質に着目して～
獣医学部・講師・向田 昌司
8. 気象情報を利用した濃霧による交通規制の AI 予測
生物地球学部・教授・大橋 唯太



口頭発表の様子

【研究シーズ】88件（7ステーション）

化学・機能材料

金属ポルフィリンダイマーに基づく電気化学的CO ₂ 還元触媒の開発	浦本大成、○坪田悠希、満身稔
イナミンを用いた多環芳香族アミンの自在合成と光学特性の調査	○奥田靖浩、森まつり、松永夏旺、今田裕二、折田明浩、岡山大学異分野基礎科学研究所
チオアルキンの位置および立体選択的な付加反応と生理活性物質の合成	○奥田靖浩、今田裕二、松永夏旺、森まつり、松浦信康、折田明浩、中国 湖南科技大学
ヘテロ原子置換エテニルスルホンの合成と脱離反応性の評価	渡部光、○酒見俊輝、猪原冴子、中島悠雅、奥田靖浩、折田明浩
エテニルスルホンの脱スルホニル型アルキニル化による（Z）-エンジインの立体選択的合成	○赤木宥太、山田隼輔、奥田靖浩、折田明浩
拡張パイ共役系を基盤とした機能性有機色素の創製	○岩永哲夫
フッ素化クロリン錯体を誘導体とする金（III）錯体の結晶構造	○中島しの、赤司治夫
DLC膜のラマンマッピングによる炭素結合のモデル化の提案	○福江紘幸、米澤健、中谷達行、東京電子（株）、岡山県工業技術センター、ケニックス（株）
高周波HiPIMS法によるDLC膜物性の最適化	○有田聖一、玄馬宗治、福江紘幸、米澤健、清水一郎、中谷達行、東京電子（株）、岡山県工業技術センター、ケニックス（株）
異形金ナノ粒子による可視光吸収・発光促進	○竹崎誠
亜鉛ポルフィリン錯体に基づく可視光駆動型水素生成触媒の開発 【奨励賞】	○満身稔、大城実之、高井翔生、島根大学
古備前復元窯における内部温度の時間変化と焼成環境の推定	○畠山唯達、備前焼平川忠工房、九州大学比較社会文化研究院
希土類水素化物半導体YbH ₂ の基礎物性とこれをチャンネル層に用いた薄膜トランジスターの試作	○中村修、栗田満史、九州大学、埼玉大学、東洋大学
多波長 一多光子分光法を利用した新規計測法の開拓	○高橋広奈、酒井誠、愛媛大学
磁気力ブースターによる対流制御	○牧祥

エレクトロニクス・AI・情報

ニューコンセプト 非接触給電 【奨励賞】	○赤津康仁、石田弘樹、（株）アドテックス
モビリティ兼用小型お座敷シミュレータ	○足立悠真、赤木徹也、趙菲菲、篠原隆、横田雅司
カメラ型可視光通信の高速化のための回転式LED送信機の開発	荒井伸太郎、安井万貴、○尺田一輝、池田旭駿、難波右京
ドローン操縦者の姿勢モニタリングと見失い防止デバイスの研究開発	○高谷健太、太田寛志、北川誠治、飯田涼太（千葉科学大学）、海老根雅人（千葉科学大学）、クルモフバレー
無人機を併用した配送計画システムの開発	○井関智也、川本一輝、篠原凌、伊東駿、片山謙吾
前後輪二輪駆動電動バイクにおける運転支援システムの開発	横田雅司、○丸野温司、檀上蓮
過酷な動的環境を考慮した自律型移動ロボットの制御システムの開発	横田雅司、○林倅平
モニタとプリンタ間の色補正システムの開発	○岡田凌、上田千晶
MMSで取得した3Dデータの処理ツール群の開発	○島田英之、（株）ウエスコ
防犯カメラ映像を用いた人の行動認識ソフトウェアの開発	○大塚翔、久野弘明
ハンドトラッキングを用いたAR用UIの開発	○柏谷啓太、麻谷淳
効率的な生産スケジューリングシステムの開発	○伊東駿、福田翔希、井関智也、小田哲也、片山謙吾
AIを用いた対話中の発話の影響度の推定	○大西朔永、椎名広光、保森智彦

Transformerモデルを用いた四半期報告書による企業分析	○賈原、大西湖永、椎名広光
---------------------------------	---------------

金属・ものづくり

軸受鋼の転動疲労寿命に及ぼすグリースの影響	○河本匠、池田尚大、關正憲、日本グリース(株)
コンピュータ解析を援用したステントセル形状の最適設計	○岡本凌、清水一郎、(株)日本医療機器技研
シミュレーション解析援用による管端塑性加工法の最適化	○三宅伶奈、清水一郎、(株)堺伸銅所
Cuショット粒を用いた熱間ショットピーニングによる傾斜機能材料の開発	○仙波尚起、竹村明洋、三宅大暉、寺野元規、篠原隆
各加工開始温度からの熱間ショットピーニングにおける表面状態の確認	○小林志温、王楊昆、竹村明洋、寺野元規、篠原隆
超高分解能で流体中の蛍光物質濃度を計測する手法	○岩野耕治
CAE解析による前方押出要素を含んだ後方押出鍛造の検討	○田淵世射、寺野元規、清水一郎
CAE解析を用いたヒンジ部品製造における素材形状の検討	○武本拓也、寺野元規、(株)賀陽技研
バニシング加工による傾斜機能材料の開発 ～局所的結晶粒微細化法の検討～	○難波太覚、中尾蒼以、中藤領、寺野元規、竹村明洋、篠原隆
蛍光微粒子を用いた瞬時2次元ガス温度分布計測法の開発検討	近藤千尋、村上和真、○大角怜央、河合紘希
マニピュレータの運動方程式における慣性行列の正定値性と可操作性との相関	○生田悠斗、吉田浩治、衣笠哲也、林良太
陸上探索型レスキューロボットの試作	藤本真作、○西山長佑、岩崎貴弘
水圧を利用した電源不要な非常用駆動源の開発	○吉田隆斗、小林亘、横田雅司
マストライバ型水上移動ロボットの開発	○跡上大稀、小林亘、横田雅司

バイオテクノロジー

交流高電圧プラズマを用いた医療用チューブの超親水性とゼータ電位の制御	○高畑直矢、今井裕一、福江紘幸、中谷達行、ストロープ(株)、岡山県工業技術センター
生体吸収性ステント評価用in-vitro還流系試験装置の開発	○籠谷朋椰、清水一郎、佐藤匠、(株)日本医療機器技研
酸化作用と糖化作用に及ぼすpHの影響	○安藝誠人、安藤秀哉
さくら花酵母の分離から雄町米純米酒「桜華」の開発まで 【奨励賞】	○滝澤昇、室町酒造(株)
野生酵母によるワイン醸造とその解析	○北岡鮎美、金子明裕、嘉美心酒造(株)
極限環境微生物由来プロテアーゼの産業利用	○古賀雄一、横山竜也、サラヤ(株)、NEDO、Green Earth Institute(株)
真皮線維芽細胞の食能に関する研究	○吉崎海斗、安藤秀哉
共培養法を用いたメラニン生成抑制剤の評価	○小林桃子、安藤秀哉
関節構造を模倣した培養構造体の作製に向けた組織工学的基礎検討	○膝魯鵬、唐振宇、岩井良輔
筋細胞と腱細胞の凝集力の違いを活かした組織作製	○吉鶴歩実、藤原溪、米田大珠、伊豆弥生、岩井良輔

医療・獣医

脈管リモデリングの可能性を探る	○浜田直輝、向田昌司、水野理介、尾崎博
高血圧性血管内皮障害の分子治療標的の探索	○石川竣介、向田昌司、水野理介、尾崎博
腸内細菌の変化と血管内皮機能の検討～リン脂質に着目して～	○須賀洸、向田昌司、水野理介、尾崎博

血管収縮障害の分子治療標的の探索	○清水寧乃、進藤美紀、森北奈佑、向田昌司、水野理介、尾崎博
腸内細菌の変化による血管障害機序の検討	○澤島智樹、海堀美樹、向田昌司、水野理介、尾崎博
非侵襲的手法を用いたコウモリ保有微生物の調査	新納亮太、中本敦、鯨田龍星、○渡辺俊平
フロー式イムノセンサーによる炎症マーカー定量法の開発	○畑明寿、藤谷登、(株)シーズテック
犬の慢性弁膜症の診断・治療方法の確立	○杉本佳介
NPPVマスク用自動フィッティングシステムの開発ー超小型空圧センサの製作ー	○浅原佳江、趙菲菲、迫田悠生、池上諒
褥瘡防止や移乗用の空気圧駆動アクティブマットレスの試作	○趙菲菲、赤木徹也、瀧口寛子、田原姫七、和田迅斗
アキレス腱修復メカニズムの解明	○伊豆弥生、藤原溪、米田大珠、藤田望、外菌耀基、李天鎬
ヒストンH2AのO-GlcNAc修飾系によるトリプルネガティブ乳がん(TNBC)の増殖機構の解明	○鶴野耀子、早川晃司
臨床での使用を想定した随意的表面筋電位の発生を促すリハビリ訓練システム	○若宮大河、田辺敦司、田邊颯人、林良太、衣笠哲也、吉田浩治
伊予柑果皮抽出液を含むイヌ用外用剤の開発	○因藤奏子、大西貴子、佐伯香織、松田彬、愛媛県産業技術研究所、(株)アイテック
新学術領域、獣医療工学・獣医療福祉工学の創生に向けた社会実装型動物関連デバイスの開発	赤木徹也、久野弘明、趙菲菲、横田雅司、古本佳代、佐伯香織、久枝啓一、朱夏希、○江藤真澄、西岡怜一、蔣承峻、三木英資、可部研輔

環境・地球・宇宙

気象情報を利用した濃霧による交通規制のAI予測	○鈴木由樹、大橋唯太、(株)ウェザーニューズ
UV-LEDによる各種微生物の不活化ー流水型UV-LED照射微生物不活化装置の開発ー 【奨励賞】	○宍墨、猶原順、井上大知、大原諒真、張揚、向井彩純、張瀚中、千代田工販(株)
特殊染色法を応用した脊椎動物化石の組織学的研究	○辻極秀次、千葉謙太郎、實吉玄貴、稲葉勇人、村上凱星、佐々木誉人、岡山大学自然生命科学研究支援センター
恐竜研究を中心とした新たな本学研究シーズの確立	○豊田新、石垣忍、高橋亮雄、畠山唯達、衣笠哲也、押谷潤、名取真人、青木一勝、林昭次、佐藤友彦、モンゴル科学アカデミー古生物研究所
海底熱水性重晶石の放射非平衡ーE S R年代測定	○角本美優、豊田新、神戸大学海洋海底探査センター、蒜山地質年代学研究所
最終氷期から完新世にかけての風送塵起源の変動	○岡田夏蓮、豊田新、奈良女子大学
シミュレーションデータを利用した地球近傍の暗黒物質密度の評価	○中林拓帆、長尾桂子、鈴鹿工業高等専門学校

教育・地域貢献

学生参加型ゴビ砂漠フィールドワークの実践と本学恐竜学博物館教育への展開	○石垣忍、豊田新、林昭次、山下浩之、實吉玄貴、市川美和、高橋亮雄、千葉謙太郎、名取真人、辻極秀次、衣笠哲也、押谷潤、佐藤友彦、モンゴル科学アカデミー古生物研究所
オノマトペを活用した表現技能指導	○妻藤純子、笹井香
中学校数学「数と式」と「関数」領域で扱われる離散量と連続量の教科書分析	○森川貴文、福田博人
数学教育における文化に焦点を当てた折り紙の教育的意義について	○花房和輝、福田博人
国内外の調査から見る日本の児童生徒の算数・数学に対する見方の変遷	○浅越天真、福田博人
プログラミング的思考力を高めるにはどんな学びがよいか	○高橋信幸
教育・研究機関としての工作センターの取組み	○篠原隆、寺野元規、露無正治、亀山寛司

愛媛県の農畜水産物を用いたイタリア料理フェアの展開 in 東京	○深瀬徹、中村有加里、(株)ひらまつ、愛媛県
愛媛県砥部町の特産品としての砥部焼の新たな可能性の探索	○中村有加里、深瀬徹、陶房くるみ
地域事業者主導の販促イベントにおける地域経済への波及効果の分析手法の確立	○高橋良平、小渕奈留、柏田慎也、門田覚、小谷凌也、小橋陽向、嘉美心酒造(株)
アジア・南太平洋地域におけるペランダコロニアル建築に関する比較研究	江面嗣人、八百板季穂、○吉原究、黒田有花、岡本怜也
真庭市勝山の都市形成市に関する研究	○黒田有花、岡本怜也、蓮池一真、八百板季穂、江面嗣人
研究・社会連携機構総合機器センターのご紹介	○櫻井詠司、船本利春、藤原俊明、山田真路



ポスター発表の様子

■OUSフォーラム2024

開催場所：岡山プラザホテル

開催日時：2024 年 11 月 25 日(月) 13:00～17:50

2024年度で第24回目の開催である。新型コロナウイルス感染症(COVID-19) (以下「コロナ」という。)の感染拡大が終息し、対面開催に復帰してから2年目となる。特別記念講演と産学官金連携事例紹介の会場は引き続き比較的広い会場として、研究シーズの発信となるポスター展示については、代表者あたりの発表件数を3件の制限を継続したが、110件の応募があり、過去10年で最高の件数に並び、コロナの感染拡大前の状況に完全に復帰した。参加者数は400名とコロナ前の水準まで回復した。

【特別記念講演】13:10～14:00

「未来を創造する DX」

～ “多様な個の躍動” が生み出す組織変革 ～

株式会社フジワラテクノアート 代表取締役副社長

藤原 加奈 様

講演概要：株式会社フジワラテクノアートは岡山市北区富吉に本社を置き、日本食には欠かせない日本酒・焼酎・味噌・醤油などの醸造食品向けの製造設備の開発・設計・製造及びプラントエンジニアリングを事業の主軸としています。醸造設備メーカーとして、麴造りの機械で高いシェアを持ち、国内約1500社、海外27ヵ国に設備を納入しています。創業91年目、総員156名の老舗中小企業でありながら、2022年には日本DX大賞（中小規模法人部門）受賞、2023年にはDXセクショングランプリを受賞し、全国2冠を達成。また同2023年には、日本で一番大切にしたい会社大賞 審査員特別賞も受賞。未来に向けた企業価値を創造するために全社一丸で取り組んでいるDXの取組みの実例と、社員ひとり一人が個性や強みを発揮して自律的に変革を起こす組織づくりの実践についてご紹介します。



特別記念講演風景

【産学官金連携事例紹介】14:00～14:30

① 「塑性加工における数値シミュレーション活用事例」

～塑性変形CAE 解析で何が出来る？～

：岡山理科大学 工学部 機械システム工学科

准教授 寺野 元規



② 「Hime Pet, BEYOND」 ～環瀬戸内発、岡山理科大学

・獣理工連携が萌芽する新規動物産業の可能性～

：岡山理科大学 獣医学部 獣医学科

教授 江藤 真澄



産学官金連携事例紹介風景

【口頭発表】8件

1. コンピュータシミュレーションによる新しい創薬
基盤教育センター・教授・矢城 陽一朗
2. ミリ波レーダーを用いた非接触バイタルチェックシステムの開発
工学部・准教授・荒井 伸太郎
3. 家庭用ライド型お座敷シミュレータの改良
情報理工学部・教授・赤木 徹也
4. 研究開発したロボット・メカトロニクス機器の紹介
ーパワーアシスト装置から電動バイクまでー
情報理工学部・助教・横田 雅司
5. 皮膚の老化現象を予防、改善する素材の評価手法に関する研究
生命科学部・教授・安藤 秀哉
6. 新規モデルマウスにおける ICI の抗腫瘍効果と皮膚 irAE 発症の関連
生命科学部・講師・三重 慧一郎（倉敷芸術科学大学）
7. 化学物質の「デザイン・かたち・はたらき」を学べる模型工作
基盤教育センター・教授・堀越 亮
8. 愛媛県西予市の農畜水産物を生かしたイタリア料理を作りたい！
獣医学部・教授・深瀬 徹



口頭発表の様子

【研究シーズ】110件（9ステーション）

基礎科学

非線形分散型方程式の初期値問題の適切性	○坂本雅己、瓜屋航太
宇宙初期のインフレーションを起こす新しいモデル	○田村怜偉、長尾桂子、National Chin-Yi University of Technology
宇宙のダークマターをシミュレーションから調べる	○中條 初萌、長尾桂子、中京大学、総合研究大学院大学
虚2次関数体の小野不変量について	○中内峻友、浜畑芳紀

化学・機能材料

サステナブルな資源を用いた新素材の開発	内田桃歌、○山田真路
安定化した α -キノンからの環境にやさしい1,4-ベンゾジオキサン骨格の構築	○安田和貴、窪木厚人、原村昌幸
光を利用した電子移動反応による含窒素パイ拡張化合物の合成	○奥田靖浩、石塚彩水、三浦瑞希、永長陸、折田明浩、岡山大学異分野基礎科学研究所
位置および立体選択性を精密制御したチオール-チオアルキンクリックケミストリー	○奥田靖浩、永長陸、三浦瑞希、石塚彩水、松浦信康、折田明浩
官能基化[n]ヘリセンのモジュラー合成への展開	○酒見俊輝、岩倉旭良、月田俊幸、奥田靖浩、折田明浩
酸化的光環化によるジスルホニル[n]ヘリセンの合成	○岩倉旭良、酒見俊輝、奥田靖浩、折田明浩
糖連結フッ素化クロリン鉄錯体の合成と触媒活性	○赤司治夫
相溶性の無い2流体のマイクロ流路内における交互流の数値計算	○松野翼、末永遥、平野博之
多波長-多光子分光法を利用した新規計測法の開拓	○三船心花、山川実莉、高橋広奈、酒井誠、愛媛大学
希土類水素化物半導体 $(YH_3)_x(YbH_2)_{1-x}$ を用いた薄膜トランジスタの試作について	○中村修、栗田満史、九州大学、埼玉大学、東洋大学
DLC膜の開発におけるDXプロセスの導入	○小佐野芳寿、中谷達行、三菱鉛筆（株）
圧力勾配型スパッタ法を用いた高硬度DLC膜の開発	○土橋峻平、米澤健、小佐野芳寿、中谷達行、ケニックス（株）
コンピュータシミュレーションによる新しい創薬	○矢城陽一朗、松浦信康、甲南化工（株）、FMO創薬コンソーシアム
磁気力による熱対流の制御	○牧祥

エレクトロニクス・情報

送電設備点検におけるドローン撮影画像からの架空地線異常検出	○太田寛志、大月教史、成晨語、クルモフバレリー
無人機を併用した配送計画システムの開発	○井関智也、岡崎秀俊、小田哲也、片山謙吾
バーチャルリアリティ（VR）技術を用いたバーチャルショップの開発 - 視線誘導手法の検討 -	○黄瑄雯、久野弘明
非装着型小動物呼吸測定デバイスの開発	○久野弘明、朱夏希、江藤真澄
生成AIを利用した3Dモデル生成のデータセットによる最適化	○福岡拓海、尾崎亮、島田英之
ハンドトラッキングを用いた地図の操作	○柏谷啓太、麻谷淳
ミリ波レーダーを用いた非接触バイタルチェックシステムの開発	荒井伸太郎、○藤井大智、上田翔大、佐伯亘平、吉竹涼平、広島大学、エスタカヤ電子工業（株）
チップ内ネットワークに基づく次世代画像処理アクセラレータの開発	○吉原蓮人、門田龍弥、三好隼人、川上寛人、田中宏樹、近藤真史
足元画像を用いた人物追跡手法とその応用	○大村俊輔、近藤真史、タカヤ（株）

三次元モデルを用いた機械学習用画像データの自動生成手法	○河村祥太郎、近藤真史、セリオ（株）、（株）荒木組
アテンションマップを用いたStable Diffusionモデルの評価方法	○房ハルノ、李天鎬、大西朔永、椎名広光
Blackbox最適化を用いた信号機制御のためのシミュレータの開発	○藤岡駿斗、李天鎬
ハンドヘルド撮影による動画からの3次元姿勢推定のための追加学習と転移学習	○平賀翔己、李天鎬
効率的な生産スケジューリングシステムの開発	○青山優希、木藤悠斗、井関智也、小田哲也、片山謙吾
実測3Dシーンをを用いた浸水状況表示Webサイトの開発	○島田英之、（株）ウエスコ
差分進化を用いた離散値入力型モデル予測制御	○宋羽浩、小林亘、濱田凌一
自律型ナビゲーション人物追跡スマートカーの開発	荒木圭典、○高沢嘉
Leap Motion Controllerを用いたリアルタイム3Dホログラムプロジェクターにおける手の動きによる3Dモデル操作システムの開発と評価	荒木圭典、○楊碩

金属・機械・ものづくり

受動歩行メカニズムに基づく二足動物歩行の実現について	○松浦一翔、衣笠哲也、林良太、吉田浩治、近畿大学、大阪電気通信大学
柔軟脚を持つ多足類ロボットの脚形状について	○本城龍樹、西山智也、秋田凌佑、衣笠哲也、林良太、吉田浩治
TUMの全状態変数を制御するためのリンク運動軌道の探索方法と結果	○生田悠斗、吉田浩治、林良太、衣笠哲也
走行車両の軸重値計測法の改善のための車両運動シミュレーション	○本田龍之祐、吉田浩治、衣笠哲也、林良太
熱間ショットピーニング面の表面状態に及ぼす投射材粒径の影響	○佐藤修、阪井琢磨、竹村明洋、寺野元規、篠原隆
熱間ショットピーニングによるアルミニウムの表面硬度及び残留応力への影響	○仙波尚起、竹村明洋、寺野元規、篠原隆
家庭用ライド型お座敷シミュレータの改良	○足立悠真、赤木徹也、趙菲菲、篠原隆、横田雅司
異径配管を走破可能な細径型配管検査ロボット	○石橋卓実、赤木徹也、篠原隆、趙菲菲、横田雅司
軸受鋼の転動疲労寿命に及ぼすグリースの影響	○齋藤秀哉、ムガトアハマドダニアル、關正憲、日本グリース（株）
キャビテーションピーニング条件の最適化に関する基礎的研究	○松本晃聡、平野光雅、關正憲、東北大学
プラスチック歯車と鋼歯車における歯面減衰比の測定	○濱晋吾、妹尾俊哉、關正憲
CAE解析による容器後方押出鍛造品の評価	○田淵世射、寺野元規、清水一郎、浪速精密工業（株）
CAE解析による板成形・増肉加工法の検討	○栗田大成、田淵世射、寺野元規、（株）賀陽技研
塑性特性が及ぼすショットピーニング加工面変形領域のCAE解析	○西山玲、田淵世射、寺野元規、竹村明洋、篠原隆
過酷な動的環境を考慮した自律型移動ロボットの制御システムの開発	横田雅司、○林倅平
海水発電ユニットを搭載した水中ドローンの開発	横田雅司、○今川夏希、林倅平
前後輪二輪駆動電動バイクの前後輪トラクション制御に関する研究	横田雅司、○平井琢巳、檀上蓮

ARB加工法により作製された超微細粒Al-Si-Ge系合金の時効挙動	中川恵友、○佐藤星太、金谷輝人、京都大学
CN熱源によるバイオディーゼル副生グリセリンの精製・利活用技術	近藤千尋、○佐々木佑士、河内崇将、西山開斗
McKibben型人工筋を用いた内骨格型パワーアシストスーツの高機能化	○李博倫、藤本真作、藤本浩二
2足歩行ロボットによる3D準受動歩行	○小田原直生、藤本真作
6脚歩行ロボットによる鋼球搬送制御	○大住優登、藤本真作
高分子（PP）と金属の板材接着重ね合わせ継手の曲げ特性に及ぼす負荷速度の影響	○榎本拳斗、中井賢治
CFRPの層間せん断特性（強度と破壊ひずみ）の評価	○芝遼河、中井賢治
船用省エネ装置のコンポジット部品の衝撃破壊特性評価	○竹内友哉、中井賢治、ナカシマプロペラ（株）
群ロボットを用いた協調搬送システム	○谷渕誠一郎、小林亘、李天鎬、中村海玖
水圧を利用したドア自動化システム	○石原龍平、小林亘、横田雅司

生化学・バイオテクノロジー

竹糖に含まれる糖尿病治療活性物質の探索	○小林蒼河、松浦信康、サトウキビ工房あづま
メイラード反応に際して生成する着色・褐変物質生成反応に対する抗酸化物質の影響	○森本汐音、松浦信康
野生酵母の探索と醸造への応用	○北岡鮎美、金子明裕、榎田実来
微生物を用いた硫酸エステルの加水分解反応の開発	○中村葉月、小田慧人、窪木厚人、原村昌幸
ユニークな再生研究モデル” ヤマトヒメミミズ”	○武智敦也、岡本真衣、田所竜介
極限環境微生物由来プロテアーゼの産業利用	○古賀雄一
APEX2タグを利用したDNAトポイソメラーゼIIと相互作用するRNA分子の解析	○金丸竜聖、池田正五、河野真二
試験紙を用いた哺乳類精子内のATPの化学発光による検出	○陳哲逸、松浦宏治、国立台湾清華大学
ヒト真皮線維芽細胞を用いた過酸化水素消去メカニズムの解析研究	○尾崎愛美、竹本和憲、安藤秀哉、ロゼット（株）
還元型グルタチオン（GSH）のメラニン生成抑制作用の評価研究	○小野瑞季、高瀬政文、安藤秀哉
メラニン色素など異物を貪食した真皮線維芽細胞の変化を解析する	○勝見奏由香、張耕ばん、氏原舞香、安藤秀哉
流水型 UV-LED 微生物不活化装置に及ぼす処理水透過率の影響	○猶原順、○張揚、宓墨、渡辺涼太、小川峻、鄭賢、井上大知、千代田工販（株）
さくら花酵母で醸した清酒に含まれる特殊な糖と有機酸	○藤原勝哉、滝澤昇、室町酒造（株）
愛知県豊橋市における家禽ウズラの遺伝的多様性調査	○布目三夫、愛知県農業総合試験場

医療・獣医

フロー式イムノセンサーによる炎症マーカー物質測定法の開発	○畑明寿、藤谷登、（株）シーズテック
高血圧はリンパ管の異常を引き起こすのか？	○浜田直輝、石田茉弘、向田昌司、兒玉朋子、水野理介、尾崎博
高血圧性血管内皮障害の分子標的因子の探索	○石川竣介、島田良規、向田昌司、兒玉朋子、水野理介、尾崎博

ヒストンH2Aのグリコシル化はトリプルネガティブ乳がん(TNBC)の増殖・浸潤に働く	鶴野耀子、○早川晃司
巨大培養筋組織作製方法の開発ー筋芽細胞を使用した自己凝集組織の作製ー	内貴猛、○韓珥婷、小久保奈緒
屈曲と拍動を模擬した生体吸収ステント用還流系試験装置の開発	清水一郎、○籠谷朋椰、小森一生、(株)日本医療機器技研
いきものQOLプロジェクトプロトタイプの改良と研究開発基盤の構築へむけて	赤木徹也、久野弘明、趙菲菲、横田雅司、古本佳代、佐伯香織、久枝啓一、朱夏希、○江藤真澄、三木英資
新規モデルマウスにおけるICIの抗腫瘍効果と皮膚irAE発症の関連	○三重慧一郎
担癌マウスの腫瘍外科切除後における脾臓樹状細胞サブセットの経時的変化	○三重慧一郎、江塚楓奈、高木翔士、佐藤正和
ナットウキナーゼによりICIの抗腫瘍効果を増強する治療戦略の構築	○三重慧一郎、矢田貝智恵子
キャットフレンドリーなテレビCMの制作に向けて	○中村有加里、深瀬徹、オトサファリ(株)、(株)ワンダーランドハウス、マルトモ(株)
細胞自己凝集による筋-腱接合組織体の作製と力学刺激検討	岩井良輔、○吉鶴歩実、梶川修平、日本獣医生命科学大学、弘前大学大学院

環境・古生物・地史

ガボン共和国ムカラバードゥドゥ国立公園におけるニシローランドゴリラの長期野外研究	○竹ノ下祐二、京都大学、鹿児島大学、ガボン国立科学技術センター
霧を伴う局地風「肱川あらし」のAI予報の開発	○工藤陽花、大橋唯太、公立鳥取環境大学
弥生・古墳時代の赤色顔料使用墳墓に関する研究ー岡山県みそのお遺跡を事例にー	三阪一徳、○杉佳樹
考古学より考える近世から近代にかけての岡山の洪水被害と治水について	三阪一徳、○中田樹宏
恐竜研究を中心とした新たな本学研究シーズの確立	○豊田新、石垣忍、高橋亮雄、衣笠哲也、押谷潤、青木一勝、名取真人、林昭次、佐藤友彦、モンゴル科学アカデミー古生物研究所
最終間氷期から完新世にかけての風送塵起源の変動	○岡田夏蓮、豊田新、奈良女子大学
恐竜類化石に保存された骨基質タンパク質の検出とアミノ酸配列の解明	○辻極秀次、千葉謙太郎、實吉玄貴、稲葉勇人、佐々木誉人、岡山大学、モンゴル科学アカデミー古生物学研究所

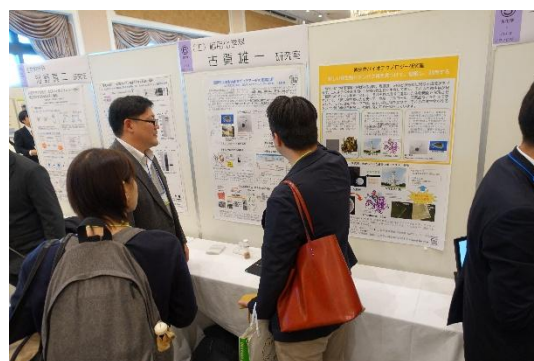
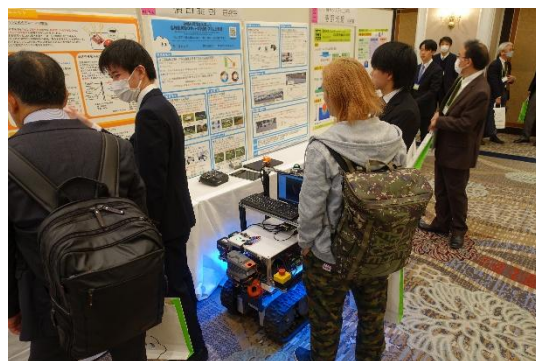
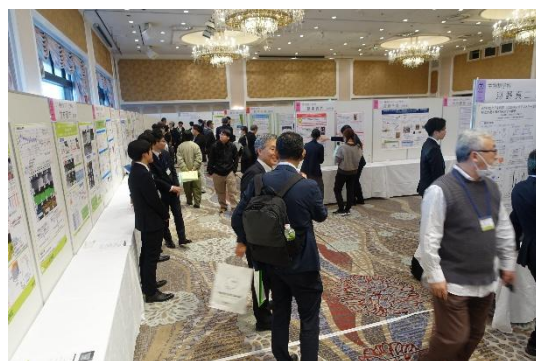
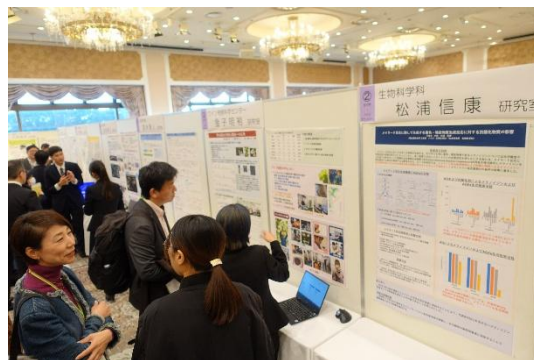
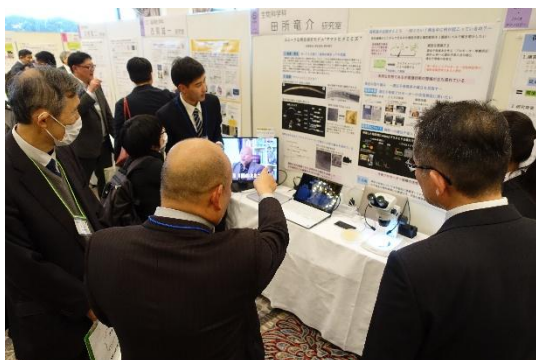
教育・地域貢献

化学物質の「デザイン・かたち・はたらき」を学べる模型工作	○堀越亮
教育・研究機関としての工作センターの取組み	○篠原隆、寺野元規、露無正治、亀山寛司
研究・社会連携機構総合機器センターのご紹介	岩永哲夫、櫻井詠司、○船本利春
授業セルフ録画再生システムの試行によるアクティブラーニングの最適化	○高橋信幸、坂口武典、福田博人
OUS数理・データサイエンス・AI教育プログラムの紹介	○中川重和、大熊一正、安田貴徳、奥村英則、平松直哉、小野舞子
授業発話の影響度を利用したアドバイス生成システム	○大西朔永、児嶋祥成、保森智彦、椎名広光
せとうち産業観光のニーズ調査分析とその成果	○高橋良平、桑田水城、楊銘、大島蒼目、小橋陽向、小谷凌也、向島ドック(株)
学生参加型戈壁砂漠フィールドワークの実践と博物館教育への展開(2024年度)	○石垣忍、豊田新、林昭次、實吉玄貴、高橋亮雄、千葉謙太、木村光宏、市川美和、モンゴル科学アカデミー古生物学研究所

中学校数学における典型的な誤理解の例示	○田中美桜、福田博人
全国学力・学習状況調査の分析による生徒の数学に対する学習意欲の現状	○田中雄輝、福田博人
再生転用建築におけるサウンディング型市場調査の活用に関する研究	○小比賀颯太、弥田俊男
愛媛県西予市の農畜水産物を生かしたイタリア料理を作りたい！	○深瀬徹、中村有加里、(株) ひらまつ
情報セキュリティ教育のためのスマートフォンゲームアプリ開発	○藤本賢人、木戸善之

博士（後期）課程

細胞自己凝集・組織化誘導による腸管様組織体の作製	岩井良輔、○滕魯鵬
麺生地混練シミュレーションによる攪拌羽根の改良	○佐々木友惟、河原芽維、桑木賢也、(株) スズキ麺工
ポリフェノールを利用した低栄養誘導細胞死の抑制と立体組織構築への応用	○張睿、神吉けい太



ポスター発表の様子

7.3 各種研究・展示発表会への参画

○岡山リサーチパーク研究・展示発表会

岡山県内の大学、研究機関、企業の研究成果を発表し地元企業との連携の機会を提供する目的で、岡山県、（公財）岡山県産業振興財団の主催で実施されている。

① 2023年度 第28回岡山リサーチパーク研究・展示発表会

2023年12月12日（火）に出展テーマ全テーマ46件で、本学からは6件が展示された。

表1 第28回岡山リサーチパーク研究・展示発表会 発表者一覧

発表者	テーマ
情報理工学部 情報理工学科 助教 横田 雅司	過酷環境におけるロボット・メカトロニクス機器の制御システムに関する研究
情報理工学部 情報理工学科 教授 藤本 真作	探索型レスキューロボットシステムの構築
工学部 電気電子システム学科 教授 クルモフ バレリー	ドローン操縦者の姿勢モニタリングと見失い防止デバイスの研究開発
工学部 応用化学科 教授 滝澤 昇	さくら花酵母の発酵特性と低アルコール雄町米純米酒「桜華」の開発
研究・社会連携機構 フロンティア理工学研究所 教授 畠山 唯達	古備前復元窯における内部温度の時間変化と焼成環境の推定
生命科学部 生命科学科 教授 安藤 秀哉	培養筋芽細胞を用いた細胞呼吸能の活性化作用評価

② 2024年度 第29回岡山リサーチパーク研究・展示発表会

2024年12月17日（火）に出展テーマ 全テーマ61件で、本学からは11件が展示された。

表2 第29回岡山リサーチパーク研究・展示発表会 発表者一覧

発表者	テーマ
工学部 機械システム工学科 教授 桑木 賢也	CAEを用いた全面噴流工法はんだ付け装置の改良
工学部 機械システム工学科 准教授 寺野 元規	数値シミュレーション（CAE）による塑性変形解析
工学部 電気電子システム学科 教授 笠 展幸	EVモータ用SiCデュアルトラクションインバータの研究開発
工学部 情報工学科 講師 小田 哲也	生産性・安全性の向上を目的とした動作分析システム
情報理工学部 情報理工学科 教授 赤木 徹也（足立 悠真）	体幹訓練用ライド型お座敷シミュレータの開発
情報理工学部 情報理工学科 教授 赤木 徹也（石橋 卓実）	EFPAの軸拘束を用いた配管検査ロボットのスリム化
経営学部 経営学科 准教授 高橋 良平	「環境課題の解決」と「地域の経済・産業の活性化」の両立
研究・社会連携機構 研究・社会連携センター 特担教授 辻 維周	高周波で交通、農地を守る
工学部 情報工学科 教授 島田 英之	移動計測車両による広域3Dシーンの構築と共有
教育推進機構 教職支援センター 教授 高橋 信行	プログラミング的思考力を養う学習教材セットの開発
情報理工学部 情報理工学科 教授 李 天鎬	量子アニリングを用いた組み合わせ最適化問題

○KMSメディカル・アーク

KMSメディカル・アークは、川崎医科大学が実施する医療分野産学官連携展示会で、2017年から開催されている。展示会は、医療機器関連メーカー等の企業展示、医工連携を目指す県内外の大学・高専からの研究シーズ発表、川崎医科大学附属病院・総合医療センターにおける医療現場のニーズ紹介などで構成されている。2019年からは、特定非営利活動法人メディカルテクノおかやま（MT0）と共同開催となった。

新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催となった2023年度、2024年度の本学からの出展は次のとおりである。

開催日時：2023年2月8日（水）12:00～16:00

会 場：オンライン

発表者	テーマ
理学部 物理学科 准教授 石田 弘樹	輸液ポンプ等へのワイヤレス給電システム

開催日時：2024年2月7日（水）12:00～16:00

会 場：オンライン

発表者	テーマ
なし	

○新技術説明会（さんさんコンソ新技術説明会）

本説明会は、中国地域産学官連携コンソーシアム（さんさんコンソ）に加盟した大学が、技術移転可能な研究シーズを企業に紹介しマッチングを図る場である。主催は、国立研究開発法人科学技術振興機構、中国地域産学官連携コンソーシアム、一般社団法人中国経済連合会。

2021年度の出展分野は「スマートライフ」、2022年度の出展分野は「カーボンニュートラル実現に導く」であった。2023年度、2024年度ともに、オンライン開催された。

開催日：2024年1月18日

会 場：オンライン

分野	発表者	テーマ
アグリ・バイオ	獣医学部 獣医学科 講師 向田 昌司	血管内皮保護作用を有する乳酸菌

開催日：2024年7月23日

会 場：オンライン

分野	発表者	テーマ
機械	情報理工学部 情報理工学科 助教 横田 雅司	「免荷型パワーアシスト装置を用いた人間支援システムの開発」

○イノベーション・ジャパン

イノベーション・ジャパンは国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が主催する日本で最大級のマッチングイベントで、毎年、日本全国から500を超える大学・ベンチャー・中小企業等が一堂に会し、最先端の研究成果や開発技術が展示される。例年、二万人前後の来場者数がある。

2023年度は本学からの出展は無かったが、2024年度は以下のテーマを出展した。

開催日：2024年8月22日（木）～8月23日（金）

会 場：東京ビッグサイト 南展示棟 南1ホール

出展者	テーマ
工学部 応用化学科 教授 古賀 雄一	超耐熱性プロテアーゼを利用した医療器具超洗浄

○第3回国際発酵・醸造食品産業展

開催日：2024年7月30日（火）～8月1日（木）

会 場：東京ビッグサイト

出展者	テーマ
研究・社会連携機構 ワイン発酵科学センター 教授 金子 明裕 准教授 川俣 昌大	発酵・醸造食品大国の日本の食文化拡大

○アグリビジネス創出フェア2023

開催日：2023年11月20日（月）～11月22日（水）

会 場：東京ビッグサイト 南2ホール

出展者	テーマ
教育推進機構 基盤教育センター 教授 辻 維周	音による害獣対策
研究・社会連携機構 ワイン発酵科学センター 教授 金子 明裕	ワイン発酵科学センターの取り組み

○アグリビジネス創出フェア2024

開催日：2024年11月26日（火）～11月28日（木）

会 場：東京ビッグサイト 南2ホール

出展者	テーマ
プレゼンテーション 研究・社会連携機構 研究・社会連携センター 特任教授 辻 維周	音による獣害対策
研究社会連携機構 研究・社会連携センター 特任教授 辻 維周	害獣対策装置
研究・社会連携機構 ワイン発酵科学センター 准教授 川俣 昌大	ワイン発酵科学センターの取り組み
生命科学部 生物科学科 教授 三井 亮司	「米ぬか含有成分の乳酸菌による機能性表示食品素材『HMPA』を含んだ黄杞茶」

7.4 ブランディング事業の展開

研究・社会連携では、学内の研究事業の創生と涵養を大きな使命の一つとしている。また、ブランディング事業の涵養には、その創生を促し、持続可能な研究活動の環境整備を行うとともに、ブランディングとして周知されるための広報活動も肝要である。2022年度で展開している本学のブランディング事業は新設事業「いきものQOL」を含め大きく4つの事業があり、これら4つの事業に関して、設立の経緯や事業の涵養に向けた取り組みや広報活動を下記に記す。

【恐竜研究】

平成28年度私立大学研究ブランディング事業として始まった本事業は、5年の事業を終了後も本学の事業として継続している。協定を締結しているモンゴル科学アカデミーとの連携に基づき、ゴビ砂漠で豊富に産出する恐竜化石を対象に骨化石の構造分析や生痕化石の形状から恐竜の生理生態学的な特性を解明するとともに、新たな年代測定法を用いて地質層序を明確にして恐竜進化の大陸間対比を継続的に行っている。2020年度に設立した「古生物学・年代学研究センター」を中心に活動を継続して行っている。また、同組織内にある恐竜学博物館も、2022年にはJRのディスティネーションキャンペーンの対象施設となり、年間1万5千名以上の来場者がある広報施設として大きな役割を果たしている。また、当該事業の関連研究者がNHKの特別番組「恐竜超世界 in Japan」などで取り上げられるなど本学のブランディング事業としての広報活動を活発に行っている。また同事業は研究・社会連携が主幹の「岡山理科大学プロジェクト研究推進事業」で2022年度「特殊染色法を応用した脊椎動物化石の組織学的研究」の事業で採択され、本事業の継続的な研究活動の支援をしている。岡山理科大学は2023～2024年にかけて、モンゴル科学アカデミーと共同でゴビ砂漠の化石発掘調査や地質調査を精力的に実施した。また、この研究ブランディングの成果として、モンゴルで発見された実物大の恐竜足跡化石をキャンパスの路面から壁面にかけてペイント展示するなど、教育・広報活動を大きく推進した。

【好適環境水】

2010年度に淡水および海水魚両方の育成に適した「好適環境水」を使用した閉鎖循環型陸上養殖の研究および、地域貢献、またこれに関する教育に資することを目的に「生物動物教育センター」として加計学園組織下に設立した。2021年度に当センターの更なる研究推進を狙い、専任教員1名を配置するとともに、「生物生産教育研究センター」として岡山理科大学に帰属したセンターを中心としてブランディング事業を展開している。2022年度は、研究施設としての認知や公的助成を受けるため研究センターとしての規程を制定した。また、社会貢献として、従来モンゴルで実施していたハタの陸上養殖に加え、2022年度からNTT東日本との協力で福島県で陸上養殖を開始し、2023年度からは本学との協定に基づき宮崎県都農町で陸上養殖を開始し、ハタ科の高級魚である「タマカイ」などの完全閉鎖循環式陸上養殖をスタートした。開発者である山本俊政准教授が『news every.』や『ナニコレ珍百景』などの全国ネット番組に多数出演し、「魔法の水」としての認知度と大学のブランド価値を飛躍的に高めました。

【ワイン】

本ブランディングは「醸造技術」「醸造微生物」「醸造用ブドウ栽培」の領域について、学術研究を推進する意図で2017年度に設立された「ワイン発酵科学センター」を主体とし、2018年度に1名の専任教員を加え、2名の教員を中心に学内の研究・教育を実施している。2023年度と2024年度は岡山県原産の「シラガブドウ」と「マスカット・オブ・アレキサンドリア」を交配させた新品種のワイン用ブドウの作出に取り組み、試験醸造や地域ブランド化に向けた研究・ブランディングを大きく推進した。2024年度には、ワイン発酵科学センターにてこの新品種を用いた試験醸造を実施した。糖度が高く、渋みと酸味のバランスに優れた高品質なワインが誕生し、地域特産品としてのブランド化に向けた研究が進められている。

【獣工連携「いきものQOL」】

2020年度から、獣医学部と研究・社会連携との交流事業を契機として、動物とヒトのための革新的な予防法や新しい早期診断法の開発や、安全で有効性の高い治療の実現、また高齢・障害（動物/者）・患者の質（QOL）の向上をめざした獣医工連携を、本学の新たなブランディングとして推し進めるため、有志研究者の交通費の補助をする形で始めた。その後、2022年度に「いきものQOL」のブランディング事業名で広報活動を始めるとともに、同年に今治キャンパス（獣医学部）と岡山キャンパス（理・工・生命学部など）間で、宿泊を伴う研究者交流会を2度にわり開催し、当該ブランディング事業の涵養を図った。また、母体となる研究機関/組織をもたないブランディングではあるが、担当研究員による持続可能な研究環境を整備するため、研究・社会連携が主幹の「岡山理科大学プロジェクト研究推進事業」への申請を促した。2023年度には「人間と動物の共生を目的とした「人間・動物の負担軽減・ストレス軽減」させる工学システムの開発」と「新学術領域、獣医療工学・獣医療福祉工学の創生を目指した社会実装型動物関連デバイスの開発」などの事業への申請が計画されており、自律的な研究環境整備を行う体制の一助となった。岡山キャンパスの工学系教員と今治キャンパスの獣医学部教員がタッグを組み、動物に優しい医療器具（包帯巻圧計測装置や点滴散歩装置など）の開発を推進した。2024年10月には、実習教材の製作も本格的にスタートした。

8. 研究シーズの地域還元活動

8.1 市民公開講座

社会連携・地域貢献を目的に、2022年8月から開始した体験や見学を伴う【岡山理科大学市民公開講座「山の寺子屋で学ぼう！」】は、これまで参加者から好評を得ている。2023年度の第二期と2024年度の第三期には、毎年度5月、6月、7月、8月、9月、10月、11月、12月、3月の9回の講座を実施した。参加者はWebやチラシで広く地域住民から募集するとともに、メディアへの情報公開を行い、講座後は実施報告を記事としてWebに公開している。第四期となる2025年度も、5月、6月、7月、8月、9月、10月、11月、12月、3月の9回の講座を予定している。

【第二期（2023年度）】

第1回「備前じゃけえ、備えてえてえ、前もつてのう！」

—豪雨の前に知っておくべき極めて初歩的な防災知識—

講 師：岡山理科大学教育学部初等教育学科 准教授 山下浩之

募集人数：50人

開催日時：2023年5月27日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約30人の参加者がミニ実験を交えながら、楽しく防災について学びました。講座で山下准教授はまず、「同じ場所で同じような災害が発生している。現在住んでいる場所の情報から自然災害を学ぶことが大切」とし、国土地理院の「地理院地図」、その中でも特に「写真」と「地図委地形分類図」の活用を呼び掛けました。また、「流れる水の働き」について、自ら測定した流速データなどを示しながら「河川は川床部よりも水面に近い部分が流速は速い」「深くなればなるほど流速は速くなる」などと、豪雨時の避難での注意点を指摘しました。続いて、「基礎的な知識があれば防災につながる」としてミニ実験を実施しました。まずはペットボトルにアルコールを少量入れ、蓋をしたままねじって、高気圧状態をつくり、一気に手を放して低気圧状態にしてボトル内に即席の雲をつくる実験に挑戦。次に1時間雨量1ミリメートルでは1平方メートルの面積にどれぐらいの水が必要か、についても実験しました（正解は1リットル）。最後はペットボトルなどを利用して、参加者全員が簡易雨量計を作りました。家族連れで参加した小学生は「楽しかった。雲を作るのが難しかった。簡易雨量計を使ってみたい。雨が楽しみ」と喜んでいました。また、岡山市の男性は「市民公開講座は今年も楽しみにしていた。とても勉強になった。雨量1ミリメートルの量には驚いた。簡易雨量計を使って、雨の感覚を身に付けたい」と笑顔で話していました。

第2回「太陽紫外線と肌の老化 — “しみ” と “しわ” はどうしてできるの？その対処法は？—

講 師：岡山理科大学生命科学部生物科学科 教授 安藤秀哉

募集人数：50人

開催日時：2023年6月17日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約40人の参加者がミニ実験を交えながら、楽しく紫外線と肌について学びました。講座で安藤教授はまず、皮膚と紫外線の関係について話され、「紫外線は、直接的又は間接的にDNAに損傷を与える。その結果、しわやしみの原因になる。ひどい場合には皮膚がんになる恐れも。サンクリーン剤（日焼け止めクリーム）を使用する等、対策を行うことが大切」とし、紫外線の怖さについて語るとともに、日焼け対策として長袖の服を着るやサングラスをかける等、その中でも特に日焼け止めクリームの使用を呼び掛けました。ただ、紫外線の悪い面に多く触れながらも、「紫外線にはカルシウムの吸収を促進する効果や殺菌作用がある。10分程度の適度な日光浴は必要」とし、紫外線と上手に付き合っていくことが大切と話していました。講座の後半には、「肌や細胞の観察」としてミニ実験を実施しました。参加者は安藤先生の研究室の学生と共に、顕微鏡等で肌の細胞を観察しました。肉眼では見ることができない肌の細胞を見るため、顕微鏡には長蛇の列ができていました。友人と共に倉敷市から参加した高校生は「太陽の光を浴びすぎると、皮膚がん等の病気になることに驚いた。日焼けには気を付けたい」と話し、顕微鏡で見た細胞については「私自身の皮膚にも大量の細胞がいることにびっ

くり」と話していました。

第3回「好適環境水による甲殻類、魚類養殖の最前線 ークエもマグロも海より良く育つー」

講 師：岡山理科大学生命科学部生物科学科 准教授 山本俊政

募集人数：50人

開催日時：2023年7月1日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約50人が参加し、工学部応用化学科・山本俊政准教授から最新の研究成果を学びました。講演で山本准教授は、好適環境水の開発からこれまでの経過がまとまった動画を流し、海水温度の上昇や魚病の多発、海水汚染によって「自然まかせの魚類養殖は限界」にきていることを指摘しました。魚に必要な成分を絞込んだ好適環境水による養殖は、魚のストレス軽減につながり、魚病にかかりにくく、成長速度が早まることを、これまでの飼育試験の結果を基に説明しました。また、完全閉鎖循環式の水槽の消費電力についても、循環ポンプの省エネ化、地熱・温泉熱、太陽光発電の活用や、水温が安定しているトンネルを利用することなどでコスト低減が図れることを示しました。最後は福島市や宮崎県都農町で現在、進んでいる陸上養殖プロジェクトの進捗状況を紹介し、宇宙での養殖に向けた実験にも着手していることを明らかにしました。続いて、参加者は総水量414トン水槽が並ぶ生物生産教育研究センターへ移動しました。山本准教授の説明を聞きながら、35トン水槽で養殖されている「おかやま理大うなぎ」やベニザケの様子を間近で観察し、ベニザケのえさやりも体験しました。参加者からは「岡山でこんな研究をしていることを初めて知って、素晴らしいと思った。とても勉強になった」「未知の研究が楽しく勉強できた。また参加したい」などの感想が聞かれ、子どもたちからは「ベニザケがはねて水がかかったけど、えさやりが楽しかった」「えさをやるのが面白かった」などの声が上がっていました。

第4回「ものづくり体験！ ～コインのつくり方今・昔～」

講 師：岡山理科大学工作センター センター長 寺野元規

募集人数：15人

開催日時：2023年8月26日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

市民ら14人が参加し、鋳造やプレス加工など、実際に体験しながらコイン作りの基本技術を学びました。寺野センター長は、古代から「鋳造」の手法が取られてきたが、現在では圧延された板状の素材を円盤状に打ち抜いた後、縁・側面を成形し、最後に圧印（コイニング・プレス）する「塑性加工」になっていると貨幣作りの変遷を説明しました。続いて、体験イベントとして、①鋳造②塑性加工③レーザー加工の3つを体験しました。① 鋳造では、融解したスズとビスマスの合金を「たんQくん」の型に流し込み、冷めてから取り出して完成。②塑性加工ではプレス機で、アルミニウムの小さな円盤にたんQくんを浮かび上がらせ、③レーザー加工ではアクリル樹脂に、たんQくんや参加者の名前を彫り込み、円形に切り出しました。家族連れで参加した子どもたちには、めったにできない経験とあって、1枚仕上がる度に歓声を上げ、「鋳型やプレス機でいろいろできた。特にレーザー加工がめっちゃ楽しかった」と喜んでいました。

第5回「ブドウを知ればワインがわかる」

講 師：岡山理科大学ワイン発酵科学センター 准教授 川俣昌大

募集人数：30人

開催日時：2023年9月30日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

市民ら30人が参加して、ワインの基礎知識とともに、その楽しみ方を学びました。川俣准教授はまず、ワインに使われるブドウの品種について説明しました。甲州やマスカットベリーAなど、日本の品種を紹介するほか、世界の品種も紹介し、酸味や香りなど世界の品種との違いを感じてほしいと話していました。続いて、日本で製造しているワイン「日本ワイン」は国産のブドウのみを原料として、日本国内で製造された果実酒であると説明しました。日本ワインは国内製造ワインの約20%しかなく、収穫地や品種等が表示されているなどの特徴があると説明しました。また、ブドウのテイastingには果実の大きさ、色などを見る他にも種子を噛む方法もあり、完熟しているブドウであればあるほど香ばしい香りがするなど、ブドウテイastingの基本技を伝授しました。この後は公共交通機関利用の参加者に限って、早速、甲州とシャルネドのワイン2種類とブドウを食べ比べて、甘さや辛さ、

酸味や香りの違いを実際に体験しました。参加者の岡山市の女性は「勉強になりました。いろいろなワインを飲んでみたい」、岡山市の男性は「ブドウの品種とワインが分かって良かった」と感想を話していました。

第6回「吉備津神社本殿及び拝殿のふしぎ（どこにこの神社建築の魅力があるのか）」

講師：岡山理科大学建築歴史文化研究センター センター長 江面嗣人

募集人数：30人

開催日時：2023年10月21日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

吉備津神社で開かれ、32人が参加しました。吉備津神社参集殿で行われた講演では、吉備津神社の本殿の造り方について、比翼入母造や大仏様など、他では見られない特徴的な建築様式が用いられていると解説しました。「講演を聞いた方には、建てられた時代的な経緯や特徴を知って頂き、岡山にある建物の素晴らしさを語れる人になってもらいたい」と話し、見学のポイントを詳しく解説しました。座学に続いて、参加者は日頃は立ち入ることができない国宝の本殿及び拝殿の内部を見学しました。厳かな雰囲気の中、江面センター長の解説に耳を傾けながら、吉備津神社の建築学的特徴など、この建物の見るべき魅力について一つ一つの部材を見ながら具体的に学びました。参加した女性の一人は「素晴らしい経験をさせていただきました。これからは神社の見方が大きく変わりそうです」と喜んでいました。

第7回「岡山県の石、万成花こう岩を知ろう！」

講師：岡山理科大学生物地球学部生物地球学科 教授 能美洋介

募集人数：30人

開催日時：2023年11月4日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

親子連れなど22人が参加し、今回は岡山理科大学岡山キャンパスを飛び出し、万成花こう岩を採掘・販売している武田石材採石場で実施しました。現地に到着した参加者は、ヘルメット、ゴーグル、ハンマー、ルーペを受取り、こぶし一握り分の石を自ら採石する体験からスタートしました。参加者は各々で好みの石をハンマーで砕き、ルーペで万成石の表情を詳しく観察しました。能美教授はまず、花こう岩は大きく4つの鉱物が識別でき、ピンク色の正長石、黒く光る黒雲母、乳白色の斜長石、ガラス状の石英などで花こう岩が成り立っていると説明しました。参加者は採石した石を観察しながら、能美教授の話聞き入る様子が見られました。続いて、参加者は自由に採石や標本づくりを体験しました。能美研究室のゼミ生たちのサポートを受けながら、大きな岩を砕き採集する姿や、採石した石を標本にするためのケースを工作する姿が見られました。手足が泥だらけになった参加者も見られました。講座終了後も能美教授に質問をする参加者が多く、大満足な講座となりました。参加者からは「岡山県の地層について知れた」「たくさん勉強して石博士になりたい」などの感想が聞かれました。

第8回「歩け、走れ、群れろ 恐竜 一足跡から探る恐竜の暮らしー」

講師：岡山理科大学恐竜博物館 館長 石垣忍

募集人数：100人

開催日時：2023年12月3日（土）10:00～14:00

実施報告内容：

約100人が参加しました。この日の講座は見学からスタートしました。受付を終えた参加者はそれぞれ自由に学内を見学しました。各展示場所には生物地球学部の学生の皆さんが立っており、A1号館1階のタルボサウルス展示や、50周年記念館前の調査道具の特別展示には、多くの参加者で溢れており、展示の解説に聞き入る様子が見られました。12時から、本日のメインイベントの講演会が始まりました。公開講座の開講にあたって南善子副学長が「学内の至る所に恐竜の展示がある。講演後に恐竜学博物館などを見学して、学びを深めてほしい」とあいさつしました。講演では石垣館長が、これまでの恐竜研究の変移について説明しました。「恐竜研究が進むにつれ、復元図が大きく変化してきた。昔は尻尾を地面に付けた状態で、ノロノロと歩く様子を想像していた」と恐竜研究の変化について解説しました。また、モンゴルのゴビ砂漠での足跡化石の特徴について、恐竜が歩いて凹んだ場所に砂が堆積して固まり、周囲から削れて凸状に残っていると説明しました。これまでに行った現地調査によって見つかった足跡化石を示しながら、「足跡の化石から歩行の様子がよく分かるし、恐竜の群れの個数や走る速度なども推測できる」とこれまでの恐竜研究成果を披露しました。岡山市から

参加した小学生の男の子は「恐竜がさらに好きになった。もっと恐竜のことについて詳しく調べたい」と喜んでいました。

第9回「国宝「源氏物語絵巻」で読む『源氏物語』」

講 師：岡山理科大学教育学部中等教育学科 教授 荻原桂子

募集人数：50人

開催日時：2024年3月2日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約50人が参加しました。講演では荻原教授が「源氏物語」の読み方や絵巻成立の背景について説明しました。「源氏物語は50代を過ぎると本当の魅力が分かってくる。物語は長い、人間関係を紐解きながら読み進めると面白い」と源氏物語の魅力について披露しました。また、第40帖の「御法」についても詳しく解説しました。光源氏の妻である紫の上が病に倒れ、その最期を描いた話であり、最も好きな帖であると話していました。さらに「朗読者によって、大きく変わる。まずは現代語訳の朗読を聞いてみては」とお薦めの朗読者について説明しました。その後、参加者は講義室を後にし、絵巻が展示された別の部屋に移動しました。展示会場に並べられた絵巻を一目見ようと多くの参加者が足を運んでいました。岡山市から参加した男性は「とても勉強になった。まずは現代語訳からチャレンジしてみたい」と話していました。

【第三期（2024年度）】

第1回「重力だけを利用して歩く二足歩行ロボット？！ 一歩行ロボットをつくって「生物の動くしくみ」を理解しよう」

講 師：岡山理科大学工学部機械システム工学科 教授 衣笠哲也

募集人数：30人

開催日時：2024年5月25日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約30人の参加者が工作やミニ実験を交えながら、楽しく学びました。講座の内容は、座学と工作・ミニ実験の2部構成です。衣笠教授はまず、二足歩行ロボットの歴史について解説しました。「1970年代の二足歩行ロボットから現在まで、多くの二足歩行ロボットが開発され、進化してきた」と話し、衣笠教授の言葉に目をキラキラさせて話を聞く参加者が多く見られました。また、動力がなくても「受動的」に動く受動歩行について、「二足で受動歩行するロボットは身体的特徴や環境によって、勝手に歩き方を創発する」「関節を伸び縮みさせたり、適度に振動を与えたりすることで、平面上も歩けるようになる」と二足歩行ロボットの可能性について説明しました。続いて、参加者は衣笠研究室の学生らとともにプラスチック段ボール製で、受動的に動く二足歩行ロボットを工作に挑戦しました。むずかしい作業に苦戦しながらも学生らの手を借りながら、参加者はわくわくした表情でロボット作りに取り組む姿が見受けられました。さらに、自作のロボットを用いてミニ実験を実施しました。下り坂での歩行に苦戦する参加者がいる一方で、上手に歩行したロボットの姿に歓声が上がっていました。岡山市から参加した小学生は「歩行させるのが難しかったが、工夫すると歩かせることができた」と笑顔で話してくれました。

第2回「たかがカメといって馬鹿にするなかれ」

講 師：岡山理科大学生物地球学部生物地球学科 教授 亀崎直樹

募集人数：30人

開催日時：2024年6月15日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約30人が参加した講座は、天候にも恵まれ大盛況のうちに終了しました。講座の内容は座学と観察会の2部構成です。亀崎教授はまず岡山県の河川等に生息する3種類の亀について「日本の固有種であるイシガメ、東アジア域に分布するクサガメ、日本を含む世界各国にはミシシippアカミミガメが生息している」と解説しました。このあと参加者は、実際にイシガメとクサガメを触って比較し、形や色、大きさ等の違いを確認していました。また、岡山県の地理的特性や河川から3種類のカメの生息分布について「アカミミガメは県南部または標高の低い河川に高密度で分布しているのに対し、クサガメは標高200mまで広く分布している」「日本の固有種であるイシガメは捕獲されたケースが少なく、個体数が低い」など岡山県におけるカメの生息分布について説明がありました。その後、岡山市北区今

保（いまぼう）の笹ヶ瀬川と足守川の合流付近に移動してカメの観察会を実施しました。事前に仕掛けたトラップでアカミミガメやクサガメなど13匹の捕獲に成功しました。参加者は亀崎教授や同研究室所属の学生からの説明を受けながら、亀の特徴や種の違いなどを観察していました。岡山市からの参加者（小学生）は「実際のカメを観察して違いがわかった」「怖いイメージがあったが実際はとてかわいかった」と、笑顔で話していました。

第3回「植物の「ちょっと不思議な世界」～植物が持つ不思議な能力と生存戦略～」

講 師：岡山理科大学生命科学部生物科学科 准教授 濱田隆宏

募集人数：30人

開催日時：2024年7月13日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約30人が参加し盛況のうちに終了しました。講座の内容は座学とミニ実験の2部構成。濱田准教授は、まず動物と植物との違いについて解説しました。「動物と植物は進化の大きな分類の括りで見たら、ほぼ一緒」「細胞の中身もあまり変わらない」「植物は動かないイメージがあるが植物も動いている」と話し、光や重力、温度などに応答して植物が動いていることを紹介しました。また、動物と植物を5感と呼ばれる視覚や聴覚などで比較しました。「植物は光受容体で光を感じている。他にも味覚、触覚を感じる感覚はある」「聴覚についてはまだ分かっていない」と植物の感覚について解説しました。続いて、休憩をはさんでミニ実験を実施しました。参加者に協力してもらい、ヒトの光の感じ方、植物の光の感じ方を調べてみました。太陽を再現したライトを用い、植物がどうやって遠赤外線を感じ、応答しているのかについて皆で学びました。岡山市からお越しの参加者は「植物が動いていることに驚いた」「これから観察が楽しみ」と笑顔で話してくれました。

第4回「これからの時代にふさわしい岡山駅前広場のリニューアルデザイン」

講 師：岡山理科大学工学部建築学科 准教授 弥田俊男

募集人数：30人

開催日時：2024年8月10日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

子ども連れで賑わう中、16組20名が参加しました。岡山高島屋8階催会場および岡山駅後楽園口（東口）広場で開講されました。まずは高島屋の様式史会場で、弥田教授が岡山駅後楽園口（東口）広場の現状を踏まえ、岡山県都としての玄関口にふさわしい駅前広場を意識したと解説しました。また代表的な観光地である「後楽園」になぞらえ、「バス乗り場、タクシー乗り場さらには、路面電車の岡山駅後楽園口（東口）広場乗り入れに関する設計を行った」と説明しました。その後、会場を岡山駅後楽園口（東口）広場へ移し、現在の工事進捗状況や実際に躯体に使用されている部材が岡山県産の木材に使用されていることなどを説明しました。参加者からは「岡山駅前の完成予想図は初めて見て、大変驚いた。実際に現場を見て、一部完成していることのも驚いた」との感想がありました。このリニューアルは約2年後の2026（令和8）年に完成予定とのことで、完成が心待ちにされているところです。

第5回「ものづくり体験！～コインのつくり方今・昔～」

講 師：岡山理科大学工作センター センター長 寺野元規

募集人数：15人

開催日時：2024年9月28日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

市民ら19人が参加し、鋳造やプレス加工など、実際に体験しながらコイン作りの基本技術を学びました。寺野センター長は、古代から「鋳造」の手法が取られてきたが、現在では圧延された板状の素材を円盤状に打ち抜いた後、縁（側面）を成形し、最後に圧印（コイニング・プレス）する「塑性加工」になっていると貨幣作りの変遷を説明しました。続いて、体験イベントとして、①鋳造・ロボドリル、②塑性加工、③レーザー加工の3つを体験しました。鋳造では、融解したスズとビスマスの合金をロボドリルで加工した「たんQくん」のアルミ型に流し込み、冷めてから取り出して完成。また、ロボドリルで「たんQくん」をプログラム制御で描画し、アルミ型の製造プロセスを学びました。②塑性加工では、プレス機で20トンの荷重を負荷し、アルミニウムの小さな円盤にたんQくんを浮かび上げらせ、③レーザー加工では、アクリル樹脂に、たんQくんや参加者の名前を彫り込み、円形に切り出しました。家族連れで参加した子どもたちには、めったにできない経験とあって、1枚仕上

るごとに歓声を上げ、「鋳型やプレス機などたくさん体験ができて楽しかった」と喜んでいました。また、前回の講座に引き続き参加した家族は「子供がもう一度参加したいとのことで参加した。鋳造が前回よりも上手くできており、子どもの成長を感じた」と話してくれました。

第6回「ぶらぶら回る地球史の名所」

講 師：岡山理科大学恐竜博物館 館長 石垣忍

募集人数：30人

開催日時：2024年10月5日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約30人が参加し盛況のうちに終了しました。石垣館長は、まず深海の堆積岩の形成やマグマがゆっくりと固化し形成される花崗岩類などについて講演形式で解説しました。岡山や広島に広がる花崗岩は約8000万年前の恐竜時代末期に固化したものであり「石材として有名な万成（まんなり）花崗岩は大学構内にもたくさんある」と説明しました。続いて、「綿密に見れば見るほど新事実（牧野富太郎のことば）」を唱えながら学内見学を実施しました。「ぶら理大」との愛称どおり、構内を散歩しながら地質や植物のスポットを見学しました。特にA2号館裏側の岩崖では2億5千万年前の砂岩泥岩と約2700万年前の河川の丸石が接する面「不整合」を紹介し、「時代も環境も異なる地層が接する不整合が構内にあるのはとても貴重」と解説しました。他にも恐竜時代から存在する植物「クスノキ」や「コブシ」などを説明。石垣館長の解説に耳を傾けながら、参加者たちは観察を行いました。岡山市からお越しの参加者は「これまで博物館で恐竜の化石を見学していたが、恐竜時代に存在した植物や岩石も含めて構内を見学したい」と笑顔で話してくれました。

第7回「惑星形成現場を見る ～46億年前の太陽系の姿～」

講 師：岡山理科大学生物地球学部生物地球学科 准教授 本田充彦

募集人数：30人

開催日時：2024年11月2日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

市民ら19人が参加し盛況のうちに終了しました。講座は座学からスタートし、本田准教授は、まず天文学を目指すきっかけとなった彗星について解説しました。氷や泥などで形成される彗星は、太陽付近に近づくと塵を放出しながら気化することで、「彗星の尾」ができると説明しました。また、彗星の起源について、主に海王星軌道の外側に広がる「太陽系外縁天体（カイパー・ベルト天体）」と、様々な方向から太陽に振ってくる長周期的彗星の起源として提唱された「オールト雲」の2種類を紹介しました。「2006年までは太陽系の惑星とされていた冥王星も太陽系外縁天体（カイパー・ベルト天体）の一部である」と解説しました。また、太陽系を構成する惑星について「太陽系惑星の大きさが様々なのは惑星を構成するものが異なる」、「太陽との距離によって岩石やガス、氷など構成する物質が異なる」と紹介しました。続いて、C2号館4階の実習室に移動し、観測会を実施しました。参加者は配られたメガネを装着し、本田准教授の解説に耳を傾けながら3D空間に映しだされた映像を真剣に眺める姿が見られました。岡山市からお越しの参加者は「立体的にいろいろな惑星を観察できて楽しかった」と笑顔で話してくれました。

第8回「大陸の中心で失われた海洋の記録を探す」

講 師：岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター 准教授 佐藤友彦

募集人数：30人

開催日時：2024年12月7日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

市民ら16人が参加しました。講座では、地球の歴史の概要やモンゴルと岡山理科大学との共同研究の紹介から始まり、動物プランクトン（放散虫）がマリンスノーとして遠洋深海底で堆積したものがチャートであり、それが長い年月をかけプレートの動きによってモンゴルにとじこめられたとの説明しました。また、チャートに含まれている海の生物の化石や鉄鉱物などを調べることで、昔の地球がどのような環境であったかが分かる重要な試料であると解説しました。続いて、参加者は佐藤准教授が用意した世界各地のチャートを実際に触ってみたり、薄片と呼ばれるチャートを光が透けて見えるくらい薄く切った試料やチャートを溶かし出してきた0.1mmほどの小さな化石を顕微鏡で観察しました。参加者はチャートや薄片を実際に観察しながら佐藤准教授に質問をする様子が見られました。参加者からは「先生の話聞きこの分野に深く興味がわいた」と話してくれました。

第9回「瀬戸内海が汽水湖だった頃 縄文時代のはじまりの牛窓」

講 師：岡山理科大学生物地球学部生物地球学科 教授 富岡直人

募集人数：30人

開催日時：2025年3月22日（土）13:30～15:00

実施報告内容：

約30人が参加し盛況のうちに終了しました。牛窓町公民館牛窓分館（瀬戸内市）などで開講されました。富岡教授は、縄文時代の瀬戸内海について解説しました。縄文時代草創期にあたる約1万5千年前、当時の瀬戸内海は海水面が低いこともあり陸化しており、現在の玉野市（岡山県）や高松市（香川県）にあたる備讃瀬戸地域の山地は雨水の分かれ道となる分水嶺の役割を果たしていたと説明しました。また、9500年前（縄文時代早期）の牛窓周辺は、播磨灘汽水湖に面した川の河口域が広がっており、約7000年前には現在の瀬戸内海が成立したと紹介しました。続いて、牛窓港から船に乗りこみ、船上から牛窓諸島の解説を実施しました。前島・黒島・黄島・青島という島々を巡りながら、富岡教授の島々の歴史や空間的特徴の解説に耳を傾けながら、撮影や島々を眺める姿が見られました。岡山市からお越しの参加者は「普段何気なく生活している岡山の地形や特徴について知ることができた」と笑顔で話してくれました。

「岡山理科大学市民公開講座「山の寺子屋で学ぼう！」」は、参加者から満足度の高い評価を得ている。2023年度および2024年度は、それぞれ9回の講座を実施したが、受け入れ可能な受講者数に限界があるため、受講申し込み時にキャンセル待ちをお願いすることがあるほどの人気を博した。季節や世の中の動きにあわせてテーマを設定し、市民の知的好奇心を促せるように工夫を凝らしながら、本講座を通して、岡山理科大学が有する魅力的な知的コンテンツを地域住民へ伝えていきたい。

8.2 研究・社会連携機構各施設の活動報告

フロンティア理工学研究所

2023年度	2024年度
①教育と連携した質の高い研究を推進するため、以下の計画を実施する。（任意【29】-2） 以下の通り、予定通りに行った。「評価A」 ・最先端の研究を実施し、その研究成果を公開した（研究報告第5号参照）。 ・古生物年代学センターと連携した共同研究を実施した。 ・岡山理科大学教員間で連携して行った、岡山理科大学プロジェクト研究推進事業への参加をはじめ、競争的外部資金を獲得して行ったプロジェクト型共同研究を行った。 ・研究所主催の学術交流イベント研究集会「地球電磁気学と考古学・人類学の連携による人類生息環境の変遷研究の展開」（研究集会）を実施し、新たな研究シーズの発掘を行う（3月1日から2日に開催決定）。（任意【43】-1） ②協定大学（フィリピン・マプア大学など）との連携強化を推進する。（必須【28】-1, 2） 以下の通り、予定通り実施し、目標以上の成果を上げた。「評価S」 ・第2回OUS- MUフロンティアコロキウムを1月17日～20日（3泊4日）で、マプア大学において開催した。本学より、3名の教員、4名の大学院生、1名の学部4年生、および事務員1名が参加し、コロキウムとポスターセッションでは、多くのマプア大学学生の参加があり、活発な討論が行われた。文化交流も含め、目標以上の成果があった。 ③研究所が有する最先端の研究成果を社会に向けて発信する。（任意【30】-1） 以下の通り、予定通りに行った。「評価A」 ・OUSフォーラムにおいて部門を意識した研究発表を行った。 ・第3回OUSフロンティアシンポジウム（国際会議）を、岡山理科大学岡山キャンパスにおいて、9月1日に開催した。全国より、多くの研究者、学生が参加したことに加え、本学の研究者、学生にも多数参加いただき、当初の目標を達成できた。 ・第5回OUSフロンティアセミナーを岡山理科大学今治キャンパスにおいて、2月22日に開催した。 ・研究集会「地球電磁気学と考古学・人類学の連携による人類生息環境の変遷研究の展開」を岡山理科大学岡山キャンパスにて3月1日から2日に開催する。 ④研究シーズを基にした地域貢献に向けた組織の在り方を検討する。（任意【41】-1） 以下の通り行った。「評価B」 ・科学の啓蒙活動イベントとして、小学生を対象とした「おもしろ科学実験教室」を開催した。（10月29日）（任意【43】-1）	① 教育と連携した質の高い研究を推進する。「評価：A」（必須【29】-1） ・最先端の研究を推進し、科研費（代表・分担）13件、AMED3件の競争的研究資金を獲得した。研究業績の公開にも努め、学術論文（査読ありのみ）26件、学会発表（国内42件、国際会議15件）も活発に行った。以上をもって、大学のブランド力向上に貢献できた。 ・他センターなどと連携して共同研究を含め、学内教員同士のプロジェクト型共同研究8件を推進した。 ・研究所主催の学術集会2件（OUSフロンティアシンポジウム（国際会議）・OUSフロンティアセミナー（一般公開の学術セミナー））を実施した。年々、学内研究者・学生による講演やポスター発表が増えており、学内研究者と連携した研究所の研究力の強化、および新しい研究者ネットワークの構築が進んでいる。（独自事業） ・岡山理科大学獣医学部との連携強化を目指した共同研究体制の構築を進めた。プロジェクト研究や共同研究をはじめ、研究所兼務研究員としての活動など、年々連携の強化が進んでいる。 ②協定大学（フィリピン・マプア大学など）との連携強化を推進する。「評価：S」（必須【28】-1） ・さくらサイエンスプログラムにより、フィリピン・マプア大学生を招へいして、先端医療材料を巡る技術体験 ― 基礎研究から応用まで ― を実施した。本プログラムに参加した学生のうち、2名の学生が本学で卒業論文作成のための研究を行うための準備を進めており、想定以上の成果が得られている。 ③研究所が有する最先端の研究成果を社会に向けて発信する。「評価：A」（任意【30】-1） ・OUSフォーラムにおいて部門を意識した研究発表を行った。 ・第6回OUSフロンティアセミナーは、2025年2月28日に開催した。 ・第4回OUSフロンティアシンポジウムは、2025年2月15日に開催した。 ④研究シーズを基にした地域貢献に向けた組織の在り方を検討する。（任意【42】-1） ・科学の啓蒙活動イベント（夏休み親子自然観察教室など）について、親子自然観察教室 ビカリア化石発掘と化石標本作りを9月15日に実施し、多くの小・中・高校生とその家族にご参加いただいた。「評価：A」（必須【43】-1） ・研究所主催の学術交流イベントとして、OUS

⑤学外の研究機関等と共同研究を進める。（独自事業） 以下の通り、予定通りに行った。「評価A」 ・国内外の多数の大学などの教育研究機関と共同研究を行った、研究成果の公開も順調に進んでいる。 ・国内企業との共同研究をはじめ、社会人ドクターの受け入れ等を行った。 ⑥研究報告第5号（年報）を刊行する。（独自事業） 以下の通り、予定通りに行った。「評価A」	フロンティアセミナーを広く一般市民にも公開する形で実施した。しかし、一般からの参加者は限定的であった。今後、開催時期、広報の仕方などを含めて検討を行う必要がある。「評価：B」（必須【43】-1） ・研究所に在籍しておられる社会人ドクターの方々と岡山理科大学大学院生の交流会を計画したが実施には至らなかった。今後プログラムの実施内容を含め検討が必要である。「評価：D」（独自事業） ⑤学外の研究機関等と共同研究を精力的に進めた。「評価：A」（独自事業） プロジェクト研究（国内1件・国外1件）、共同研究（国内41件・国外4件） ⑥研究報告書（年報）を発行した。「評価：A」（独自事業）
---	--

自然フィールドワークセンター

2023年度	2024年度
① 植物の多様性に関する知識と情報を集積し、また人材の育成を図る施設として、植物標本庫および関連資料の整理・充実を図る。また、自然フィールドワークセンター研究報告（Naturalistae）を発行する。（独自事業） 植物標本庫については、標本庫の防虫作業を2回行った。また、防虫性の高い部屋へ標本室を移動する作業を進めた。さらに、未整理標本（約3,000点）の貼り付けを進めた。 研究報告（Naturalistae No. 28）は9月末の締切までに新規投稿と継続併せて8報の投稿があり、査読及び審査を行って、原著論文1報（英文）、短報5報（英文2、和文3）を受理し、発行した。 波田善夫元学長が作成したウェブサイト自然植物園のウェブサイト内へ移動した。「A」 ②岡山県の豊かな自然を利用した研修を企画し、フィールドワークにおける正しい知識の普及を図る。（必須【54】-1） フィールドワークに関する研修として、学内を対象として吉備津神社から吉備神社において自然観察会を行い、7名の参加者が集まった（9月16日）。「A」 ③本学で開講される野外活動実習、博物館学芸員館園実習の支援をする。（独自事業） ・教育学部の探究活用ⅡA（カヌーの実習）の支援を行った（9月15日～16日）。 ・理学部生物化学科の2名を受け入れ博物館学芸員館園実習を実施した（9月12日～14日）。 ・学生実習や卒業研究などのフィールド活動のための器具の貸し出しを行った。また、器具の修繕を行った。前島臨海教育施設は5件の利用があった。 ・前島臨海教育施設の環境整備を3回行った。また、自然植物園の環境整備を3回、生態システム園の環境整備を1回行った。この他、自然植物園に隣接する市	① 植物の多様性に関する知識と情報を集積し、また人材の育成を図る施設として、植物標本庫および関連資料の整理・充実を図る。また、自然フィールドワークセンター研究報告（Naturalistae）を発行する。（独自事業） 植物標本庫については、標本庫の防虫作業を行った。また、未整理標本や収集・受け入れした標本（約2,000点）の貼り付けを進めた。他機関からの寄贈資料のうち抜け号について16機関に寄贈を依頼して受領した。また、ウェブサイトのリニューアルを行い、施設利用や用具貸出についての「利用上の注意」を改定した。さらに、ウェブサイトとSNSでは随時新規の情報を発信した。 研究報告（Naturalistae No. 29）は、5報の投稿について査読及び審査を行い受理した。その後、編集の作業を行い、事業報告なども含めて3月31日付けでオンラインで出版する。「S」 ②岡山県の豊かな自然を利用した研修を企画し、フィールドワークにおける正しい知識の普及を図る。（必須【43】-1） 岡山理科大学とおかやま観光コンベンション協会との共催で6月22日に開催したSDGsミニシンポジウムの進行（司会など）を分担した。また、「岡山県内の道沿いでも見られる珍しい植物」について講演を行った。「A」 ③本学で開講される野外活動実習、博物館学芸員館園実習の支援をする。（独自事業） ・「文化を読みとくB（富士山の魅力）」の現地演習の引率を行なった。 ・教育学部の探究活用ⅡA（カヌーの実習）の支援を行った（9月15日）。 ・生命科学部生物科学科の2名を受け入れ博物館学芸員館園実習を実施した（9月10日～12日）。

道から不法投棄された廃棄物を処理した。「A」	・学生実習や卒業研究などのフィールド活動のための器具の貸し出しを行った（11件）。前島臨海教育施設は5件の利用があった。 ・前島臨海教育施設、自然植物園、および生態システム園の環境整備や諸設備の補修をそれぞれ行った。また、これらの施設における不法投棄、不法侵入、および台風被害などへの対策を講じた。前島臨海教育施設では、宿泊施設の利用休止に伴う対策を講じた。「S」
------------------------	---

ワイン発酵科学センター

2023年度	2024年度
① 講義科目：「ブドウ・ワイン概論」「ブドウ栽培とワイン醸造学」「ワインの歴史と風土・文化」「生命の化学概論」「生命の基礎化学」「発酵と微生物」「ワインの科学」「ワイン醸造法」「ブドウ栽培学」修了。ワインプロジェクト実習1, 2, 3, IIIの学内実習はワイン発酵科学センター内及び圃場を利用、学外実習は“ひるぜんワイン(有)”、“麒麟ビール(株)岡山工場”にて実施。 圃場の整備を進め、ブドウを生育。収穫ブドウからワイン醸造を行った。【13-1】 評価：「B」 ②kibiフーズへワイン製造等の技術指導。丸善製菓との連携継続中（米発酵エキス、乳酸菌）。 倉敷市と共同研究、ふなおワイナリー(有)と連携し、ワイン製造試験等、及び技術指導を実施。 「吉備の杜“フードビジネス学”」、「千葉大学」「福井ワインカレッジ」講師 ”ワインに恋してときめいて”岡山理科大学製造ワイン提供。【40-10】 評価：「A」 岡山理科大学市民講座開催。倉敷市市民講座講演。小規模醸造協議会講演【41-1, 43-1】 評価：「A」	① 講義科目：「ブドウ・ワイン概論」「ブドウ栽培とワイン醸造学」「ワインの歴史と風土・文化」「生命の化学概論」「生命の基礎化学」「発酵と微生物」「ワインの科学」「ワイン醸造法」「ブドウ栽培学」修了。ワインプロジェクト実習1, 2, 3の学内実習はワイン発酵科学センター内及び圃場を利用、学外実習は“ひるぜんワイン(有)”、“麒麟ビール(株)岡山工場”にて実施。 圃場の整備を進め、ブドウを生育。収穫ブドウからワイン醸造を行なった。 【13-1】 評価：「B」 ②倉敷市と共同研究、ふなおワイナリー(有)と連携し、ワイン製造試験等、及び技術指導を実施。新品種ブドウによるワイン醸造を実施、品種登録を行なった。 岡山理科大学オリジナル酵母による日本酒「純米酒eme」が嘉美心酒造(株)より製品化。 「吉備の杜“フードビジネス学”」、「千葉大学」「福井ワインカレッジ」講師。 「中国四国農林水産・食品先進技術研究会」「日本セラミックス協会中四国支部総会」講演。 丸善製菓(株)との連携継続中（米発酵エキス、乳酸菌）。【40-1】 評価：「A」 ② “ワイン発酵科学センター報告” 発行。 評価：B

生物医科学検査研究センター

2023年度	2024年度
① 臨床検査室のルーチン検査業務を担う人材を安定的に確保する。 欠員分の確保を行ったが、業務を安定的に継続するには追加の人材確保が望まれる。「B」 ②主力検査装置の点検整備および更新を計画的に実施する。 ルーチン検査に使用する装置の定期点検を滞りなく実施した。「A」 ③内部精度管理と外部精度管理を実施し検査品質の維持に努める。 日本臨床衛生検査技師会および愛媛県臨床検査技師会	① 臨床検査室のルーチン検査および研究業務を担う人材を安定的に確保する。（独自事業）：「B」 現状ではルーチン検査体制を維持できる最低限の人員は確保できている。 安定的な人材確保のため本センターパート職員の時給増額を行った。 ②主力検査装置の点検整備および更新を計画的に実施する。（独自事業）：「A」 生化学自動分析装置などの検査装置について定期点検を実施し、安定稼働状態を維持した。

主催の外部精度管理調査に参加し、生化学検査品質に問題は見られなかった。また精度管理試料による内部精度管理を業務開始前に実施し、検査品質の維持に努めた。「A」 ④研究成果を学術誌および学術集会で報告することにより社会に還元する。 OUSフォーラムや日本臨床化学会等の学術集会にて、本センターの研究成果を報告した。また獣医学分野の国際誌に研究成果の投稿を行った。「B」 ⑤受託検査や検査技術協力等を通じ、自治体や企業と連携しその活動を支援する。 自治体（愛媛県）、大学（愛媛大学）、および中四国企業（（株）山田養蜂場本社、（株）シーズテック、東芝ライテック（株）、（株）食環境衛生研究所など）と連携し、共同研究や検査技術支援を行った。「A」	③内部精度管理と外部精度管理を実施し検査品質の維持に努める。（独自事業）：「S」 日本臨床検査衛生検査技師会、愛媛県臨床検査技師会等が実施する外部精度管理調査に参加し、いずれの検査項目も高評価を得た。 ④研究成果を学術誌および学術集会で報告することにより社会に還元する。（独自事業）：「A」 本センター主導で行った研究を国際学術誌（Journal of Veterinary Diagnostic Investigation）、国内学術集会、せとうち自動分析セミナー、岡山理科大学開学60周年記念SDGsミニシンポジウム、OUSフォーラム等にて発表した。 ⑤受託検査や検査技術協力等を通じ、自治体や企業と連携しその活動を支援する。（任意【4】-1）：「A」 岡山理科大学獣医学教育病院、学内・学外研究者、企業等からの受託検査を2月末時点で約3,600件実施した。 愛媛県産業技術総合研究所、愛媛県内企業（（株）シーズテック、（株）ヒューネット、東芝ライテック（株）ほか）、中四国企業（（株）山田養蜂場本社）と連携し共同研究を実施した。
---	--

総合機器センター

2023年度	2024年度
①定期的にミーティングを行い全学研究体制について検討した。「A」 ②URA部会を交えての検討は行わなかったが、9月に公聴会を行い、機器の選定を行った「A」 ③2023年度の総合機器センター報告書（旧センターだより）を発行した。「A」 ④OUSフォーラムに出展した。「A」 ⑤工作センターと共同で見学会を行い、見学会の内容を総合機器センターのHPに公開した。【A】 ⑥岡山大学自然生命科学研究支援センターの案内をousallにて配信した。「A」 ⑦研究テーマの募集を行ったが0件（途中で取り下げたテーマが1件）であった。「B」 ⑧学内向けのe-learningは既に公開されているが更に改良を行った。加えて学外向けのe-learning（液体窒素の取り扱い）を構築した。「S」 ⑨総合機器センターのHPは見学等があるたびに更新している。「A」	①定期的にミーティングを開催し、大型機器を利用した全学研究体制について検討する。（必須_【29】-1） >機器責任者によるセンター会議を2回開催し、全学的な保守の体制について話し合いを行った。「A」 ②次年度以降に導入を希望する大型機器の選定・申請に関して、URA部会とともに検討を行う。（任意_【27】-1） >URA部会との話し合いはできていないが、2026年度購入に向けて申請および審査会の実施のサポートを行った。「B」 ③隔年発行の総合機器センター報告書（2025年度発行予定）に掲載する兼務研究員の研究実績のとりまとめを行う。（任意_【29】-2） >2023年度の機器を利用した業績の収集依頼を実施。兼務研究員に対しては、年度末に業績依頼を実施予定である。「A」 ④OUSフォーラムへの出展を行い、学外者の機器利用を促す。さらに、センター所有機器を地域へ公表し、地域での利用も促す。（必須_【43】-1および任意_【29】-2） >OUSフォーラムに出展し、学外または企業に向けて、機器の説明を行った。学内で行われたOUS研究者交流会でポスター発表し、シーズ発掘を行った。HPに記載している機器紹介の整理を行った。「A」

	⑤学内の教職員や学生を対象とした見学会を、工作センターと共同で実施する。（必須_【29】-1および必須_【43】-1、任意_【29】-2） >工作センターとの共同見学会を5月と12月に実施した。12月度の参加人数が振るわないことから、開催時期や開催方法を検討する必要がある。「B」 ⑥岡山大学をはじめとした、他大学との機器の共同利用や情報交換を行い、交流を深める。（任意_【29】-2） >岡山大学が実施している機器説明会について、学内へ周知するメールを6件送付した。個別ではあるが、機器利用について岡山大学の教員と情報交換を行った。「A」 ⑦本学学生が正課外活動（自主研究）としてセンター所有機器を利用して行う研究テーマの募集を行い、その研究を支援する。（独自事業） >1件のテーマを採択し、年度末までを研究期間として、現在も継続して研究をサポートしている。学生からの報告書の提出をもって完了する予定である。「A」 ⑧学内の高圧ガス使用者を対象とした講習会を高圧ガス取扱講習e-Learningシステムと実技講習を並行して実施する。（必須_【29】-1） >年度当初に高圧ガス取り扱い講習をe-Learningシステムを利用して91名が受講した。また実技講習を個別に行った。「A」 ⑨総合機器センターホームページにセンター紹介、機器紹介、機器使用方法などを掲載し、業務の利便性や知名度拡大を図る。（必須_【43】-1） >総合機器センターHPに表示している項目について、整理整頓を行い、現在実施していない業務紹介を削除した。業務効率化について、センター長と話し合った。「A」
--	---

工作センター

2023年度	2024年度
① 定期的な安全点検を行い、事故件数0を維持する。また、「安全マニュアル」の周知方法について検討する。（独自事業） 継続的に実施。利用申込書に「安全マニュアル」確認のチェック項目を追加。「評価A」 ②市民公開講座として「ものづくり体験！～コインのつくり方今・昔～」を実施する。（必須_【43】-1） 8月26日（土）に実施。「評価A」 ③工作センターの利用を促すために、総合機器センターと合同で見学会を年2回実施する。（独自事業） 5月19日に1回目、12月11日に2回目を実施。「評価A」 ④工作センターを対外的にアピールするために、見学会を実施する。（任意_【41】-1） 見学会・体験イベントを（上記②、③を除く）16件実	①定期的な安全点検を行い、事故件数0を維持する。また、「安全マニュアル」の周知を徹底する。（独自事業） 安全点検を継続的・定期的に実施。工作センターHPより「安全マニュアル」をダウンロードできるようにした。「評価A」 ②市民公開講座として「ものづくり体験！～コインのつくり方今・昔～」を実施する。（必須_【43】-1） 9月26日（土）に実施した。昨年度の内容に加え、ロボドリルの実演も加え内容を充実させた。「評価S」 ③工作センターの利用を促すために、総合機器センターと合同で見学会を年2回実施する。（独自事業）

施した。特に、12月23日開催のサイエンスキャッスルでは約100名の方に見学いただいた。「評価S」 ⑤工作センターの利用促進，学内・学外へのアピールのため，ホームページ等を充実させ，定期的に更新する。（独自事業） ホームページを定期更新し，見学会・体験イベントの実施報告および加工事例を掲載した。「評価A」 ⑥NASを整備し，依頼工作におけるNCデータ等を蓄積・管理する。（独自事業） NASを整備し，依頼工作番号と紐づけ，NCデータを蓄積・管理した。「評価A」 ⑦工作センター年報（隔年）を発行する。（独自事業） 工作センター年報（第1号）を発行した。「評価B」	5月13日に1回目実施，12月6日に2回目を実施した。「評価B」 ④工作センターを対外的にアピールするために，見学会を実施する。（独自事業） 見学会・体験イベントを（上記②，③を除く）14件実施した。なかでも「ワクワク、サイエンスフェスティバル」，「科学博物園」にも出展した。「評価S」 ⑤工作センターの利用促進，学内・学外へのアピールのため，ホームページ等を充実させ，定期的に更新する。（独自事業） ホームページを更新し，見学会・体験イベントの実施報告および加工事例を掲載した。また，ホームページに設立年度，所在地，利用対象，利用方法を追記した。「評価B」 ⑥依頼工作におけるNCデータ等を蓄積・管理する。（独自事業） 依頼工作番号と紐づけ，ローカルネットワーク運用のNASにNCデータを蓄積・管理した。「評価A」 ⑦「ワイン発酵科学」，「恐竜学」，「好適環境水」，「いきものQOL」および「獣害対策」などにおける研究を支援するため，依頼加工などにおいて設計支援など柔軟に対応する。（必須【29】-1） 依頼加工，利用申込において設計支援など柔軟に対応した。「評価A」
---	--

医用科学教育センター

2023年度	2024年度
① 学内で行われる医療機器を用いた講習会などの支援を行う。（【30】-1） 達成状況：完了 2023年10月22日に工学部生命医療工学科2年生を対象としたBLS講習会が開催され、インストラクターや機材等の支援を行なった。 自己評価：A 予定通り行なった。 ② 第2種ME技術検定試験対策を行う。（【17】-1） 達成状況：完了 2023年8月までに第2種ME技術検定試験に向けた学内模擬試験を予定通り全て（4回）実施した。 自己評価：B 前半（1、2回目）の参加者が少ないことが課題。 ③ 医用科学教育センターの保有する医療機器の学外使用を支援する。（【42】-1） 達成状況：完了 生命医療工学科（堀准教授）からの依頼により、2023年8月31日にタイ泰日工業大学研修団の見学において医用科学教育センターの設備等を利用した。 自己評価：A 予定通り行なった。 ④ 医用科学教育に関連する講演会を開催する。（【30】-1） 達成状況：完了 2023年12月23日（土）に岡山理科大学、千葉科学大学（リモート接続）で開催し、岡山理科大学、倉敷芸術科学大学、千葉科学大学の学生および教員（42名）が参加した。	① 学内で行われる医療機器を用いた講習会などの支援を行う。（【30】-1） A：予定通りの支援を行えた。 ② 第2種ME技術検定試験対策を行う。（【17】-1） B：模擬試験を開催したが、学生の参加率について課題が残った。 ③ 医用科学教育センターの保有する医療機器の学外使用を支援する。（【42】-1） A：医療機器貸し出しの支援を行ったワクワクサイエンスフェスティバルが好評であった。 医療機器および医療資格について附属高校への講義を行った。 ④ 医用科学教育に関連する講演会を開催する。（【30】-1） B：講演会開催日について学生の参加しやすい開催日設定に課題が残った。

岡山理科大学会場講演者：篠崎太一さん（社会福祉法人恩賜財団済生会兵庫県病院 臨床工学科 臨床工学技士）「手術業務・中央材料室業務における臨床工学技士の役割」 千葉科学大会会場講演者：金田洋輔さん（医療法人社団葵会 AOI国際病院 ME部 臨床工学技士）「内視鏡業務における臨床工学技士の役割」 自己評価：B 開催日の設定に課題がある。	
---	--

生物生産教育研究センター

2023年度	2024年度
1) 人材育成 国内初となるタマカイ飼育をPBLに設定し、学部学生を中心に好適環境水を用いた陸上養殖研究を開始する。 （必須【44】-1 実践的教育）（必須【63】-2 ブランディング戦略） タマカイ稚魚期からの中間育成は今年3月に終了し、都農町へ輸送した。飼育271日のデータでは生残率94.2%、魚体重、1.15kgとなり過去の試験魚の中でセンターレコードを記録した。このことは輸入直後のストレス環境の中で丁寧に稚魚期育成にあたった学生らを評価したい。なお、好適環境水を用いた陸上養殖試験用としてスジアラ種苗を2月末に中国より輸入予定。これらの取り組みは東日本電信電話株式会社との共同研究として実施する「評価S」。 2) 共同研究 ①2018年「北海道大学低温研究プロジェクト」を通じて、北海道大学低温研究所力石研究室および千葉科学大学小濱研究室と共同研究を実施した。なお、5月に研究集会を実施し今後の方向性を決定した。（達成目標：窒素同位体測定から評価した好適環境水による魚類成長促進効果の立証：マツカワを使用）（必須【31】-2 社会的要請の強い研究推進）（必須【63】-2 ブランディング戦略） マツカワカレイの稚魚を用い、海水および好適環境水との成長比較試験を行っている。窒素同位体分析から飼育水の違いによる成長の優位性を明らかにするために、海水および好適環境水で約4ヶ月間飼育を行ったマツカワ稚魚5尾ずつを、共同研究先の北海道大学低温研究所に送付した。現在、窒素同位体分析を実施中である「評価B」。 ②セーミテック奈良（トーケミ（株））との共同研究として、ニホンウナギを飼育対象種に選定し、流動式濾過槽付属の1000L水槽を用いた実践的かつ効率的浮遊物の除去方法を確立する。（達成目標：「改良型逆洗式中空糸膜分離法利用による泡沫分離装置の廃止」を実証する）（必須【31】-2 社会的要請の強い研究推進）（必須【63】-2 ブランディング戦略） 水中の浮遊物の除去に向けて、浄化装置の有用性について検証を行った。なお、その検証より発見された養殖システムの改良点について、先方企業とのディスカッションのもと新しいシステムを構築し、検証を行っ	1-1、閉鎖循環式としてスジアラ飼育（10月26日センター収容）をPBLに設定し、学部学生を中心に飼育試験を実施した。魚病の発生により大量斃死となり研究を中断した。次回からワクチン接種など予防に備えられるよう体制を構築した。【44】-1) ②「C」 1-2、現在、マツカワカレイに関する窒素同位体測定は現在、分析中であり、結果待ちとなっている（重点【31】-1) ②「C」 1-3、創価大学、横浜国立大学、ナガセサンバイオ（株）との共同研究において、好適環境水を使用したコペポダ及び植物性藻類に関する拡大培養についての実験結果は、3月下旬に開催予定の研究集会において研究報告会を開催する。（重点【31】-1) 「B」 1-4、（株）クロスフォーとの共同研究餌料にキートセラグラシリスと、炭酸水素ナトリウムの添加により、外骨格の成長効果が見られた。試験区内1個体を解剖したところ、これまでで最も厚みのある真珠層の形成が見られた。（必須【31】-2) ②「B」 2-1、北海道栽培漁業公社からの依頼により、マツカワカレイの試験養殖を行った結果、海水区に対し好適環境水区は1.3倍の成長差を確認した（養殖開始後1年経過）。さらに生残率は海水区42%に対し好適環境水区は92%となり、好適環境水の優位性が証明できた。よって本種は冷水系魚種にもかかわらず、温帯域に生息するヒラメと同等の成長率であることが明らかとなった（必須【31】-2) ④「S」 2-2、宮崎県都農町との共同研究（第1step）として12t水槽×2基を用いたクエタマ、タマカイ両種の生産試験では、予想を上回る結果となった。特にタマカイは生残率94%：9カ月の飼育で平均魚体重1.1kgに達し、本種に対する高い生産性を確認した。さらに本成果物は昨年12月にタマカイ鍋セットとして、ふるさと返礼品化を果たした。また、第2stepに関わる増産設備会議を定期的に行い、増産設備の基本設計を完了した（必須【31】-2) ②「S」

た。結果,既製品として製造された中空糸フィルターの改良が必要であるとの決論に至り契約を終了した「完了」。

③クロスフォーとの共同研究として,アコヤガイの餌料である天然の植物性プランクトンからアコヤガイ専用配合餌料への移行を目標とした,陸上養殖真珠技術構築への可能性を模索する。(達成目標:低コストで安定した真珠層形成条件の調査と応用による真珠養殖技術の確立)(必須【31】-2 社会的要請の強い研究推進)(必須【63】-2 ブランディング戦略)

アコヤガイの最適な餌料開発に向け、二枚貝に適した生物餌料の調査を行った。一般的に使用される植物性ライブプランクトン、酵母、他目的で製造される乾燥プランクトン2種を試験区に加え、真珠挿核後のアコヤガイの生育・生残状・真珠層の形成状態を確認しつつ有望な餌料の作出を行った。また、供給する餌料密度(細胞数/m³)を高めるため、本水槽と連結した小型水槽を用いた。結果、乾燥プランクトン2種とテトラセルミスで活性が見られ真珠層の形成が確認された。引き続き餌料試験を継続中である「評価A」。

④ShareBe(株)との共同研究として、ムラサキウニの歩留まり向上を目的とした、海水使用による循環型養殖システムの構築のための可能性を模索する。

ムラサキウニ養殖用の水槽システム開発のため、収容時および持続的な飼育のための基礎的なパラメータを計測し、共同研究契約を終えた【完了】。

3) 地域創生

①北海道栽培漁業協会からの依頼によりマツカワガレイの試験養殖を行う。(達成目標:好適環境水との適合性を調査し、国内初の閉鎖循環式陸上養殖の可能性を探る)(必須【31】-2 社会的要請の強い研究推進)(必須【63】-2 ブランディング戦略)

今年、7月13日北海道栽培漁業振興公社伊達事業所よりマツカワ稚魚2688尾を輸送し、海水および好適環境水を用い成長比較試験を検証中である。今後の実験計画として魚体重1kgを目標に11月中旬より35tレースウェイ水槽(好適水)へのマツカワ稚魚の分槽を行った。また、7t水槽では収容尾数を各50尾程度に縮小し、海水及び好適環境水相互の成長、生残率の継続調査を実施している「評価A」。

②東日本電信電話株式会社との共同研究として3倍体種苗を用いてベニザケの試験養殖を開始する。また、DXを見据えた画像処理装置・技術の共同開発に着手する(達成目標:生産率90%以上、平均魚体重600g/年/尾の成長)(必須【31】-2 社会的要請の強い研究推進)(必須【63】-2 ブランディング戦略)

好適環境水を用いた閉鎖循環式ベニザケの養殖を進めるうえで長日条件(緑LED)による早期成熟の防止に極めて有効であることが知見され契約が終了した「完了」「評価S」。

また、紫外線照射と自ら作成したアスタキサンチン餌料の投与によるベニザケ筋肉組織の赤色化試験について

は現在,継続中である「評価C」。 ③宮崎県都農町との共同研究(第1STEP)として12t水槽×2基を用いクエタマ,タマカイの養殖生産試験を開始する。なお,試験の中から得られた各種データから,単位容積当たりの生産性及び製造コストを割り出し,第2stepによる増産設備への橋渡しを行う。また漁業組合職員への教育については,オンラインによる遠隔指導と定期的な訪問により円滑な社会実証を行う。(必須【31】-2 社会的 要請の強い研究推進) (必須【63】-2 ブランディング戦略) クエタマ,タマカイの養殖生産試験は順調に生育中であり,成長面ではクエタマ5月測定値:1200g ➡1月測定値:2852g。タマカイ5月測定値:91g ➡1月測定値:1149g,予想以上の成長が見られた。なお,現在,第2STEP(増産設備)について都農町議会で審議中となっている「評価S」。国際 モンゴルにおけるハイブリッドハタの量産化に向けたプランニングを開始する。現在,稼働中のプロトタイプ実験機から得た知見に基づき,ハード面の検証と生産効率,現場マニュアル等に関するソフト面からのデータを解析し,コストを重視した効率的な量産化設備への提言を行う(達成目標:遠隔養殖の実用化)(必須【28】-1, 【28】-2 国際競争力のある研究推進) (必須【63】-2 ブランディング戦略) 今年10月,2階に既存水槽設備10t×2基と増産用大型水槽1基(30t)、さらには1階にろ過システムを設置する基本設計案をキタガワ㈱に提出し,現在,事業性の確認調査を行っている。「評価A」 ブランディング HPを随時更新し,情報発信に努める(必須【63】-2 ブランディング戦略) 一定の訴求効果が期待できるトピックスやニュースについては随時HP上に更新した。中でもNHKをはじめ民放全国放送数社にてオンエアされており,有効な広報活動に繋がった。また,5月にくら寿司よりおかやま理大うなぎ12000食の全国販売が実施されマスメディア等大きな反響があった「評価A」。	
--	--

古生物・年代学研究センター／恐竜学博物館

2023年度	2024年度
①モンゴル科学アカデミー古生物学研究所との研究協力協定を基礎とした、モンゴルゴビ砂漠の脊椎動物化石についての研究を進める。【28】-1,2 ①-1 現地で年代測定用試料の採取を試み、これを用いて年代測定の可能性を議論する。 現地でBaynshire層の分布する複数の化石産地より年代測定用試料の採取を行い、試料が到着した。「A」 ①-2 歯化石の同位体年代測定に基づき、測定点選定基準の妥当性や得られた年代の地質学的・古生物学的意味を議論する。 分析結果の議論を進めている。一部結果を査読付論文として公表した。「A」	①モンゴル科学アカデミー古生物学研究所との研究協力協定を基礎とした、モンゴルゴビ砂漠の脊椎動物化石についての研究を進める。【28】-1, 【29】-1 ①-1 前年度に現地で採取した年代測定用試料を用いて年代測定の可能性を議論する。 前年度に現地で採取した年代測定用試料を用いて年代測定の可能性を議論する。5地域の化石産地からの試料の炭酸塩岩及び歯化石の年代測定を完了した。「B」 ①-2 採取し、剖出した化石の種の同定、分類の作業を進める。

①-3 採取し、剖出した化石の種の同定、分類の作業を進める。 昨年度以降から続ける小型脊椎動物化石の剖出作業を進め、分類作業を進めた。論文執筆中である。「A」 ①-4 モンゴル側との議論を密にし、共同研究の成果を1つずつとりまとめている。 共同研究の成果のとりまとめを行った。論文2編が出版された「A」 ②モンゴルゴビ砂漠南東部において、全学の学生を対象として、教育を目標とした発掘を行う。 5名の学生が参加し、13日間のプログラム（そのうち9日間はフィールドワーク）を実施した。学生による発掘作業を行い、帰国後は本学博物館での博物館教育活動に連動させた一般普及活動を行った。「A」 ③ 恐竜学博物館を運営し、研究・教育・広報に活用する。 ③-1学内の研究・教育に活用する。 Baynshire層砕屑物からの小型脊椎動物化石の採取作業、広島県産出のイシハラオオスッポンの分類学的再検討のためのクリーニング作業などが行われ、研究成果が卒業研究としてまとめられた。X線CTスキャナーが化石試料や現生動物試料の分析に活用された。発掘体験キットの開発研究や、恐竜に関する仕掛け絵本の反応調査など、恐竜学博物館の一般来館者を対象とした教育研究にも博物館施設が利用された。「A」 ③-2授業・実習での利用を促進するとともに、対外的には年間220日以上での展示一般公開を行う。 野外博物館実習、古生物学実習、野外調査法実習、博物館経営論において恐竜学博物館が利用された。また、恐竜学Ⅰ・Ⅱ、古哺乳類学、古生物学概論、動物関連キャリア概論などの講義においても、博物館展示や所蔵標本の利用があった。対外的には年間249日開館し、展示の一般公開を行った。「A」 ④センターセミナーを2回開催する。【29】-2 2回開催した。1回目はモンゴル調査報告会、2回目はモンゴル側との共同国際セミナーとして開催した。「S」 ⑤構内地球史探訪プログラム（ぶら理大）を学内外に広報し、参加を促す。【43】-1 学内的には、基盤教育の授業（「様々な視座から恐竜をよみとく」）や生物地球概論などで利用されているほか、補講や特別な対応が必要な学生への別メニューとして本システムが活用されている。恐竜学博物館に置かれたオリエンテーリングカードを使った自主的な利用も行われている。YouTube動画のアクセス数が観察ポイントによっては350を超えている。「A」 ⑥学外との共同研究を推進するとともに、それらの共同研究を明確化する。 3件の学外との共同研究を進めた。報告書に研究報告として明示した。「B」 ⑦恐竜学博物館ツイッターを用いて、センター、博物館の活動等についてSNSによる発信を50回以上行う。	2023年に採取した試料について、剖出した10試料について化石の種の同定、分類の作業が完了した。「B」 ①-3 モンゴル側との議論を密にし、共同研究の成果を1つずつとりまとめている。 5編のモンゴル化石に関する論文が出版された。B ②モンゴルゴビ砂漠南東部において、全学の学生を対象として、教育を目標とした2回目の発掘を行う。 5名の学生が9日間の発掘作業を行った。学生が大きく成長した様子が見て取れた。事後アンケートで満足度が高かったことがわかる。「A」 ③恐竜学博物館を運営し、研究・教育・広報に活用する。③-1学内の研究・教育に活用する。 計7件の修士論文・卒業研究で利用された。「A」 ③-2授業・実習での利用を促進する。 野外博物館実習、アクティブラーナーズコースの授業、博物館経営論等の授業で使用した。「A」 ③-3 対外的には年間220日以上での展示一般公開を行う。2月末までで230日開館して年間の目標を達成した。2月末までの来館者数11824名。「A」 ④センターセミナーを2回開催する。モンゴルIPとの共同セミナーの定例化を目指す。【28】-1 3回開催した。モンゴルIPとの共同セミナーについても開催した。「S」 ⑤構内地球史探訪プログラム（ぶら理大）を学内外に広報し、参加を促す。【43】-1 学内、学外からの来館者に利用を案内した。A ⑥学外との共同研究を推進するとともに、それらの共同研究を明確化する。 共同研究は進められてきた。「C」 ⑦恐竜学博物館のXを用いて、センター、博物館の活動等についてSNSによる発信を50回以上行う。 2月末までで150回の発信を行った。Instagramで50回以上の発信を行った。「S」 ⑧市民公開講座に協力する【43】-1 石垣館長、佐藤准教授が担当して講座を行った。「A」
---	---

平均して一週間に4回程度のXによる情報発信を行った。内容は博物館の活動、標本に関する情報、モンゴル野外調査の様子などである。昨年2月20日以降現在までの一年間での発信の回数は約200回であり、すでに目標を達成している。また、マスコミへの寄稿やテレビラジオ等への出演、普及書の出版などに取り組み、広報活動を行った。「A」	
---	--

建築歴史文化研究センター

2023年度	2024年度
1. 研究体制の充実(兼務研究員、客員研究員、共同研究員) 共同研究員1名の増加「B」 2. ホームページの充実 一部の追加「C」 3. 学術研究会の充実(内容の充実及び参加者の増員) 【30】-1 発表分野及び内容の拡大、発表者の増加「A」 4. 文化財の活用を中心とした「文化財保護思想」「文化財の創造的活用」の行政及び市民への啓蒙の推進(特に市民への啓蒙を中心に) 【31】-1 文化財保護思想の充実が図れた。美作市で保護思想の重要性について講演「B」 5. 海外共同研究の推進(特にフィリピンマプワ大学との連携推進) 【28】-1、【32】-1 11月末にフィリピンのビガンをマプワ大学と共同で調査予定「S」 6. 地方自治体等の文化財建造物の修理事業、指定・登録、町並み保存等の調査事業への協力(特に真庭市、井原市、美作市、浅口市における伝建地区への推進、現地調査協力) 【39】-1、【40】-1 真庭市勝山および西大寺五福通り等の町並み調査実施中、福山市登録文化財信岡家住宅および名古屋市善行寺の修理指導、福山市八幡神社本殿、庫裏の指定を指導「C」 7. 各種団体の研修会、講習会の講師等の協力 【40】-2 日本伝統建築保存会の棟梁研修会講師を務める「A」 8. 地方自治体の文化財関係審議会、委員会等の協力 【39】-1 水戸市他3市の教育世界遺産登録推進事業に協力(11月末に国際シンポジウムにパネラーで参加予定)、岡山県文化財保護審議会ほか市町村委員会約20に出席「A」 9. 科研費及び外部研究費の確保 【54】-1 来年度科研費申請完了、真庭市および西大寺活性化協議会より町並み調査受託、来年度大洲市より受託予定「A」	1. 研究体制の充実のために、兼務研究員、客員研究員、共同研究員の充実を図る(独自事業) 新たな研究員の増加には至っていないものの、研究会では新たな発表者をむかえており、研究体制が充実した。「A」 2. センターの周知のため、ホームページの充実を図る(独自事業) webサイト等での情報発信が十分にできていない。「C」 3. 学術研究会の充実を図るために、発表内容の充実及び参加者の増員を図る 【29】-2 研究会では新たな発表者をむかえ、発表内容が充実した。「A」 4. 当センターの中心的目的の達成のために、文化財の活用を中心とした「文化財保護思想」「文化財の創造的活用」の行政及び市民への啓蒙の推進(特に市民への啓蒙を中心に)を図る 【31】-1 行政等が主催するシンポジウムにおける講演を通じて、文化財の活用を中心とした「文化財保護思想」「文化財の創造的活用」の行政及び市民への啓蒙を推進した。「A」 5. 当センターの海外における貢献を果たすために、海外共同研究の推進(特にフィリピンマプワ大学との連携推進)を図る 【28】-1 フィリピンマプワ大学との共同調査を実施した他、JICAの専門家としてフィジーの世界遺産レブカにおける歴史的建造物の保存修理に対する助言を行った。「A」 6. 地元での貢献を果たすために、地方自治体等の文化財建造物の修理事業、指定・登録、町並み保存等の調査事業への協力を図る(特に真庭市、井原市、美作市、浅口市における伝建地区への推進する。) 【39】-1、【40】-1 岡山県および広島県の重要文化財修理に対する指導および岡山市西大寺、真庭市勝山における重要伝統的建造物群保存地区選定にむけた調査協力を行った。「A」 7. センターの学術的能力を活かし、各種団体の研修会、講習会の講師等の協力を図る。 【31】-2 文化財保存技術協会の棟梁研修会その他における研修会や講習会の講師等の協力を行った。「A」 8. センターの学術的能力を活かし、地方自治体

	の文化財関係審議会、委員会等の協力を図る【39】-1、【44】-1. 岡山県および広島県の文化財保護審議会に出席し、特に岡山県では議長に就任し、文化財行政に対して助言した。その他、重要伝統的建造物群保存地区をはじめ、多数の審議会、委員会にて行政に対して助言した。「A」 9. 科研費及び外部研究費の確保【27】-1 科研費を獲得して海外研究を進めた他、西大寺活性化協議会からも寄附を得ている。「A」
--	--

9. 知的財産

本学では建学の理念に則り、研究成果を社会に還元するために必要な知的財産の創出と権利化および活用についての指針として「知的財産に関する岡山理科大学の基本方針（知的財産権ポリシー）」を掲げている。

知的財産管理においては、知的財産の創出、その権利化による保護、及び事業実施による活用、その結果得られる収益の研究への再投資及び社会貢献という知的創造サイクル（図9-1）が定常的に形成され、円滑に稼動することが理想であり、目標でもある。本学では知的創造サイクルの構築と活性化に向けて「加計学園職務発明取扱規程」を整備し、職務発明判定委員会を中心に、規程に沿った運用を実施している。



図9-1 知的創造サイクル

職務発明判定委員会は委員長、常任委員及び発明の内容によって選出される専門委員によって組織され、発明届・成果有体物・知的財産権の管理等に関する審議を行っている。

以下に2023年度～2024年度における本学の知的財産の創出、権利化・保護、活用の状況をまとめた。

9.1 職務発明判定委員会の活動

9.1.1 発明届

教職員から提出された発明届について、職務発明判定委員会により決定した発明の承継について2004年度以降の推移を表9-1及び図9-2にまとめた。2023年度は15件、2024年度は8件の発明届が提出され、全ての発明が学園承継となった。

表9-1 発明届と承継

年度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
発明届	6	6	8	9	8	11	6	9	5	6	5	10	18	7	8	15	10	10	12	15	8
学園承継	2	0	2	5	2	5	5	7	3	4	5	8	18	7	8	15	10	10	12	15	8

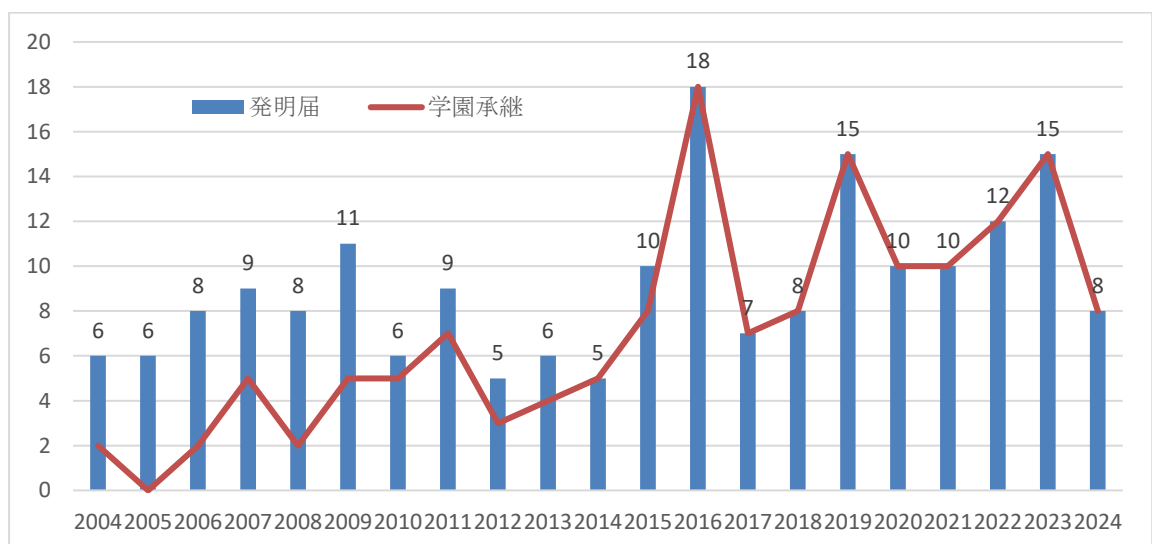


図9-2 発明届と承継

2023年度及び2024年度に職務発明判定委員会の専門委員として審査を依頼した教職員を以下に記す。

理学部

米田 稔 教授（物理） 佐藤 泰史 准教授（化学） 岩永 哲夫 教授（化学）
水野 信哉 教授（動物）

工学部

七戸 希 教授（電シ） 桑木 賢也 教授（機シ） 滝澤 昇 教授（応化）
笠 展幸 教授（電シ） 島田 英之 教授（情工） 河村 実生 教授（電シ）
片山 謙吾 教授（情工）

情報理工学部

赤木 徹也 教授（情理）

生命科学部

松浦 宏治 教授（生科） 内貴 猛 教授（生科）

獣医学部

稲葉 俊夫 教授（獣医）

9.1.2 成果有体物

「学校法人加計学園成果有体物取扱規程」に基づき、教職員からの「成果有体物提供届出書」の提出に対し、職務発明判定委員会で成果有体物の提供の可否などについて審議し、その結果を理事長に報告している。

2023年度は4件、2024年度は4件の成果有体物提供届出書の提出があり、職務発明判定委員会が開催された。

9.1.3 特許出願

特許権の実施許諾・譲渡・取下げ等の際には職務発明判定委員会で権利処分について検討し、公正かつ適正な知的財産権管理を行っている。

2023年度は0件、2024年度は2件の特許権の処分について職務発明判定委員会が開催された。

9.2 特許出願

9.2.1 日本出願

2024年3月末現在で特許庁に係属している公開特許を表9-2にまとめた。登録が66件、出願公開中（審査請求含む）が20件、合計86件である。

表9-2 2024年度末までに公開された特許

	特許番号	発明の名称	本学の発明者	共同出願 単独出願
	出願番号			
1	特許第4665252号	人工飼育水による養殖システム	山本俊政	共同出願
	特願2006-354868			
2	特許第5062550号	人工飼育水	山本俊政	共同出願
	特願2006-328673			
3	特許第4931065号	衝突型マイクロミキサー	吉澤秀和、平野博之、 妹尾典久	共同出願
	特願2007-087260			
4	特許第5259984号	無限軌道装置及びこの無限軌道装置を備えた 移動装置若しくはロボット	衣笠哲也、吉田浩治、 大谷勇太、大須賀公一	単独出願
	特願2007-132212			
5	特許第5504526号	マイクロリアクターを用いてスラグ流を形成 する方法	平野博之	共同出願
	特願2008-078924			
6	特許第5376305号	画像表示方法及び画像表示装置並びに画像 表示プログラム	島田英之	共同出願
	特願2009-107198			
7	特許第5578401号	観賞魚飼育水、トリートメント水、及び観賞 魚用トリートメント水生成物質	山本俊政	共同出願
	特願2009-178426			
8	特許第5487377号	人工飼育水による養殖システム	山本俊政	共同出願
	特願2010-068848			
9	特許第4665258号	人工飼育水による養殖システム	山本俊政	共同出願
	特願2010-068849			
10	特許第5487378号	人工飼育水	山本俊政	共同出願
	特願2010-068850			
11	特許第5364874号	人工飼育水	山本俊政	共同出願
	特願2010-068851			
12	特許第5669059号	超伝導モーター又は超伝導発電機	河村実生	単独出願
	特願2010-109575			
13	特許第5700445号	超伝導モーター	河村実生	単独出願
	特願2011-168061			
14	特許第6124404号	サーチュイン活性促進剤の製造方法並びに サーチュイン活性促進剤及びそれを含む組成 物	益岡典芳	共同出願
	特願2013-94304			
15	特許第6372817号	臓器線維化抑制剤	林謙一郎	共同出願
	特願2014-065688			
16	特許第6709489号	粘土焼成建材	清水一郎	共同出願
	特願2015-238080			
17	特許第6284159号	エリスロポエチン発現増強剤	林謙一郎	共同出願
	特願2014-548466			
18	特許第6567859号	プリオン不活化方法	作道章一	共同出願
	特願2015-086599			
19	特許第6462490号	超伝導モーター及び超伝導発電機	河村実生	単独出願
	特願2015-109433			

20	特許第6056949号	エビカニ、シャコ等の甲殻類の種苗養殖水とこれを用いた種苗養殖方法	山本俊政	共同出願
	特願2015-240627			
21	特許第6765097号	メラニン生成抑制剤	安藤秀哉	共同出願
	特願2016-127040			
22	特許第6800475号	超伝導回転機	河村実生	単独出願
	特願2016-155465			
23	特許第6867669	超伝導モーター	河村実生	単独出願
	特願2016-146056			
24	特許第6707223号	DC/DCコンバータ	麻原寛之	単独出願
	特願2016-164271			
25	特許第6583827号	交流モータの制御方法及び制御装置	笠展幸	単独出願
	特願2016-203970			
26	特許第6857346	ライソゾーム病の治療剤	林謙一郎	共同出願
	特願2016-220997			
27	特許第6803067号	頭蓋骨接合部材	辻極秀次	単独出願
	特願2016-228643			
28	特許第6502405号	危険個所に防災気象情報発表基準を設定する方法	佐藤晴文	共同出願
	特願2017-36047			
29	特許第6709489	平板瓦建材	清水一郎	共同出願
	特願2017-063230			
30	特許第6628263号	生体吸収性ステント	清水一郎	共同出願
	特願2018-565523			
31	特許第6815606号	マーカーを備えた生体吸収性ステント及びその製造方法	清水一郎	共同出願
	特願2017-017131			
32	特許第6506787号	成膜方法	中谷達行	共同出願
	特願2017-042037			
33	特許第7174943号	窒化処理装置	中谷達行	共同出願
	特願2017-087536			
34	特許第6872195号	コラーゲン産生抑制剤	林謙一郎	共同出願
	特願2017-547621			
35	特許第6977990号	軟骨基質分解酵素の産生抑制剤	林謙一郎	共同出願
	特願2017-167383			
36	特許第7373804号	精子の受精機能増強剤	林謙一郎	共同出願
	特願2020-523109			
37	特許第7329784号	難聴の予防又は改善剤	林謙一郎	共同出願
	特願2017-252016			
38	特許第7125044号	電池装置、故障監視システム、及び電池の電圧出力方法	麻原寛之	共同出願
	特願2018-067841			
39	特許第7138906号	セラミックス焼結体、ガラス成形品及びそれらの製造方法	草野圭弘	単独出願
	特願2018-27803			
40	特許第7194412号	乾式分離装置及び乾式分離方法	押谷潤	単独出願
	特願2018-072050			
41	特許第7020646号	スパッタ装置用カソードユニット	中谷達行	共同出願
	特願2018-027964			
42	特許第6719738号	自律移動撮影制御システムおよび自律移動体	クルモフ バレリー	共同出願
	特願2018-116366			

43	特許第7350235号	カーボンナノ粒子の製造方法	中谷達行	共同出願
	特願2018-158138			
44	特許第7398704号	オーキシングロンシステムにおけるタンパク質分解阻害剤及びその使用	林謙一郎	共同出願
	特願2017-228310			
45	特許第7228889号	可視光通信装置及び可視光通信方法	荒井伸太郎	単独出願
	特願2019-075266			
46	特許第7493207号	がんの予防又は治療薬	林謙一郎	共同出願
	特願2021-509526			
47	特許第7742068号	流路内の流動解析装置	石田弘樹	共同出願
	特願2019-142239			
48	特許第7378084号	非接触給電システム	石田弘樹	共同出願
	特願2019-234601			
49	特許第7453637号	内面被覆チューブ	中谷達行	共同出願
	特願2020-036032			
50	特許第7768513号	細胞凝集塊の製造方法	岩井良輔	共同出願
	特願2022-501998			
51	特許第7840030号	乾式分離装置及び乾式分離方法	押谷潤	単独出願
	特願2020-074710			
52	特許第7607258号	PPAR活性発現用剤及びその製造方法	松浦信康	共同出願
	特願2020-70911			
53	特許第7458615号	非ヒト動物、及びその使用	林謙一郎	共同出願
	特願2021-532687			
54	特許第7041902号	生体吸収性医療器具の表面処理方法	中谷達行	共同出願
	特願2020-099976			
55	特許第7744656号	軟骨組織体の製造方法	岩井良輔	共同出願
	特願2022-534112			
56	特許第7805103号	3-(4-ヒドロキシ-3-メトキシフェニル)プロピオン酸の製造方法	三井亮司	共同出願
	特願2021-034849			
57	特許第7665189号	水性塗料	大坂昇	単独出願
	特願2021-077433			
58	特許第7635916号	磁気共鳴型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
	特願2021-18613			
59	特許第7515796号	無人作業車	衣笠哲也	共同出願
	特願2021-016274			
60	特許第7760117号	オーキシングロンシステムのキット及びその使用	林謙一郎	単独出願
	特願2021-135637			
61	特許第7850976号	体液サンプリング容器	久枝啓一	共同出願
	特願2021-141740			
62	特許第7828599号	形状型軟骨組織体の調整方法	岩井亮輔	共同出願
	特願2021-145753			
63	特許第7850976号	磁気力ブースター、強磁気力場発生装置、結晶及びその製造方法	牧祥	共同出願
	特願2021-147094			
64	特許第7756870号	アシスト装置	横田雅司	共同出願
	特願 2021-165534			
65	特許第7571980号	Fage2タンパク質欠失ソバ属植物およびその利用	手島玲子	共同出願
	特願2022-018077			
66	特許第7862845号	雲海発生予測システム、雲海発生予測方法及び雲海発生予測プログラム	大橋唯太	単独出願
	特願2022-080258			
67	特願2021-145753	形状型軟骨組織体の調整方法	岩井亮輔	共同出願
68	特願2022-102549	マルチルーメンカテーテルの製造方法	中谷達行	単独出願

69	特願2022-124610	ワイヤレス給電システム、並びに、ワイヤレス給電式の受電側機器及び給電側機器	石田弘樹	単独出願
70	特願2022-184177	乳酸菌及びその用途	向田昌司	単独出願
71	特願2023-000902	医療用吸収材料及びその製造方法	中谷達行	共同出願
72	特願2023-014200	ポリ（ヒドロキシアアリーレン）、及びポリ（ヒドロキシアアリーレン）誘導体、並びにそれらの製造方法	東村秀之	共同出願
73	特願2023-038414	血管留置カテーテル及び黄色ブドウ球菌のコロニー形成抑制方法	中谷達行	共同出願
74	特願2023-545372	ウイルス不活化用活性炭	森川茂	共同出願
75	特願2023-103922	生体機能性材料	中谷達行	共同出願
76	特願2023-119457	ワイヤレス給電システム	石田 弘樹	共同出願
77	特願2023-136623	熱コンダクタンス計測方法及び熱コンダクタンス計測システム	麻原寛之	共同出願
78	特願2023-139621	磁気共鳴型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
79	特願2023-142254	造影剤を含有する細胞凝集塊の製造方法及びその方法により得られる細胞凝集塊	岩井 良輔	共同出願
80	特願2024-557816	ワイヤレス給電システム	石田弘樹	共同出願
81	特願2023-200533	精液の処理方法	松浦宏治	共同出願
82	特願2024-040684	燃料デブリの固化方法および固化体	牧涼介	共同出願
83	特願 2024-061844	防災用地図作成方法	佐藤丈晴	共同出願
84	特願 2024-086613	ホキシテ [®] グロシステムのキット及びその使用	林謙一郎	共同出願
85	特願2024-137707	土砂移動域推定方法、学習済みモデル、および土砂移動域推定装置	佐藤丈晴	共同出願
86	特願2024-157484	ダイヤモンドドライカーボン膜の評価方法	中谷達行	共同出願

9.2.2 PCT出願／移行国出願

公開されたPCT出願／移行国出願について、出願状況を表9-3に示す。

表9-3 PCT出願／移行国出願の状況

PCT出願番号	移行国登録番号	発明の名称	発明者	備考
PCT/JP2013/006916	中：Z L 201380071092.6 米：USP6,284,159 欧：EP2923700 加：2896437 日：特許第6284159号	エリスロポエチン発現増強剤	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2015/084081	東：KH/GP/00023 緬：IV/4417/2016 日：特許第6056949号	エビカニ、シャコ等の甲殻類の種苗養殖水とこれを用いた種苗養殖方法	山本俊政	共同出願
PCT/JP2015/84214	中： ZL201580085054.5 日：特許第6675538号	殺菌装置、及び、殺菌方法	中谷達行	共同出願
PCT/JP2018/002669	中： ZL201880009013.1 米：USP11,135,075 日：特許第6628263号 欧、豪、印	生体吸収性ステント	清水一郎	共同出願
PCT/JP2018/008442	米：USP11,401,604 日：特許第6506787	成膜方法	中谷達行	共同出願

	号			
PCT/JP2018/041563	日：特許第7398704号	オーキシンドェグロンシステムにおけるタンパク質分解阻害剤及びその使用	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2019/22082	米：12139459 日：7373804	精子の受精機能増強剤	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2019/034997	米：17/273,970	人工血管	中谷達行	共同出願
PCT/JP2020/13411	日：7493207	がんの予防又は治療薬	林謙一郎	共同出願
CT/JP2020/018237	米：12553055 日：7760117 欧、中	オーキシンドェグロンシステムのキット、及びその使用	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2021/006243	米、欧、豪、星、 中、韓、日	細胞凝集塊の製造方法	岩井良輔	共同出願
PCT/JP2020/18310	日：7458615 米、欧、中	非ヒト動物、及びその使用	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2021/024967	日：7744656 米、欧、中	軟骨組織体の製造方法	岩井良輔	共同出願
PCT/JP2022/004443	米：12230976 欧、中	磁気共鳴型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2023/012655	米、欧、日	陰イオン交換樹脂、膜、陰イオン交換基含有モノマー、及び4級イミダゾール基含有モノマー	東村秀之	共同出願
PCT/JP2022/030115	米、日	オーキシンドェグロンシステムのキット及びその使用	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2023/003886		Fage2タンパク質欠失ソバ属植物およびその利用	手島玲子	共同出願
PCT/JP2023/016174	日：7537677 中、印、尼	ウイルス不活化用活性炭	森川茂	共同出願
PCT/JP2016/081799	米：US10,863,752 蘭：EP3369436 豪：AU2016346382 日：6810938	プラズマ殺菌装置	作道章一	共同出願
PCT/JP2023/027302	日	シリカーリン酸カルシウム複合ブロック体、及びシリカーリン酸カルシウム複合ブロック体の製造方法	小野文子	共同出願
PCT/JP2023/40125	米、欧、中、日	ワイヤレス給電システム	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2024/008753	日	遺伝子改変マウス	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2024/24617	日	ワイヤレス給電システム	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2024/25587	日、中	ワイヤレス給電システム	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2024/028581	日、中、欧	磁気共鳴型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2024/030308	欧：	熱コンダクタンス計測方法及び熱コンダクタンス計測システム	麻原寛之	共同出願
PCT/JP2023/44946	欧、中	ワイヤレス給電装置用のコイル構造	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2025/000179	中、日	分化細胞の製造方法	松浦宏治	共同出願
PCT/JP2025/015793	日：	ダイヤモンドドライカーボン膜の評価方法	中谷達行	共同出願
PCT/JP2024/014664	日：	磁気共鳴型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2024/014665	日：	磁気共鳴型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2026/011868		インドール酢酸誘導体	林謙一郎	共同出願
PCT/JP2025/4756		ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願

PCT/JP2026/006151		熱流束計測方法及び熱流束計測システム	麻原寛之	共同出願
PCT/JP2025/36025		中継コアを用いた周波数変調幅抑制型ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2025/35688		ワイヤレス給電用電磁コイル	石田弘樹	共同出願
PCT/JP2026/8126		ワイヤレス給電装置	石田弘樹	共同出願

9.3 知的財産権セミナー

研究・社会連携部では、知的財産についての理解を深めスキルアップすることを目的に、知的財産権セミナーを実施している。教職員向けと学生向けでそれぞれ実施し、学外から講師を招くなど、内容の充実を図っている。

2023年度及び2024年度の知的財産権セミナーの開催及び参加者は以下の通りであった。

表9-4 知的財産権セミナーの開催日時と参加人数

開催日	参加者数	カリキュラム
2023年12月6日	10名	加計学園の知的財産の取り扱いについて
2023年12月6日	14名	第1回 学生向け 弁理士による特許入門講演
2023年12月13日		第2回 学生向け 知的財産権の概要
2023年12月20日		第3回 学生向け 特許情報検索実習
2024年7月18日	10名	弁護士による通信教育の講義作成時の留意事項
2024年12月4日	10名	第1回 学生向け 弁理士による特許入門講演
2024年12月11日		第2回 学生向け 知的財産権の概要
2024年12月18日		第3回 学生向け 特許情報検索実習

10. 産学官金間の協定締結

2023年度～2024年度の協定については、海外においては「岡山理科大学ビジョン 2026」に基づき、2018年に「教育を支える個性的で魅力ある研究を推進し、専門的知識と技術の習得」を目的として協定を締結した、フィリピンにあるマプア大学と教育・研究交流協定の再締結を行った。

国内においては、「地域の問題解決や活性化に貢献し、地域とともに発展する大学」を実現するために、中四国および九州地方内の公的機関、高等教育機関等との連携協定を行うなど、2年間で8件（再締結含む）の協定を締結し、本学の協定締結は、73機関となった。

◇一般社団法人岡山県サッカー協会

調印日：2023年5月30日

協定書名：一般社団法人岡山県サッカー協会と学校法人加計学園岡山理科大学との連携・協力に関する包括協定書

連携内容：（1）岡山県下のサッカー分野における競技スポーツおよび生涯スポーツの振興普及
（2）岡山県サッカー協会の事業推進に対する岡山理科大学の教職員による教育研究成果の還元 他

◇愛媛県保健福祉部、愛媛県農林水産部

調印日：2023年11月16日

協定書名：愛媛県保健福祉部・農林水産部と岡山理科大学獣医学部との連携に関する協定書

連携内容：（1）教育・学術研究に関すること
（2）専門人材の養成に関すること 他

◇松山市

調印日：2023年11月29日

協定書名：岡山理科大学獣医学部と松山市との連携に関する協定書

連携内容：（1）動物学及び獣医学に関する人材の育成及び確保に関すること
（2）獣医事に関する事業、技術及び情報の共有に関すること 他

◇鹿児島県始良市、学校法人英数学館並木学院高等学校

調印日：2023年12月8日

協定書名：鹿児島県始良市、学校法人加計学園岡山理科大学及び学校法人英数学館並木学院高等学校との高大官連携に関する協定書

連携内容：（1）高等教育に関する施設の設定
（2）市民及び企業に対する高等教育機会の提供 他

◇島根県農林水産部

調印日：2024年3月25日

協定書名：島根県と岡山理科大学獣医学部の連携に関する協定書

連携内容：（1）専門人材の養成に関すること
（2）教育及び学術研究に関すること 他

◇一般社団法人瀬戸内市観光協会、一般社団法人吉備オープンイノベーション協会

調印日：2024年6月22日

協定書名：一般社団法人瀬戸内市観光協会、一般社団法人吉備オープンイノベーション協会及び学校法人加計学園岡山理科大学 アドベンチャーツーリズム推進の包括連携・協力に関する協定書

連携内容：（1）アドベンチャーツーリズムに資する人材育成事業
（2）アドベンチャーツーリズム推進に関する研究活動 他

◇データスタジアム株式会社

調 印 日：2024年7月10日

協定書名：データスタジアム株式会社と学校法人加計学園岡山理科大学との連携・協力に関する協定書

連携内容：（1）データを活用した教育・研究および人材育成事業
（2）データスタジアム社の事業推進に対する、岡山理科大学の教職員・学生の参画と協力 他

◇マプア大学（再締結）

調 印 日：2024年7月16日

協定書名：マプア大学と岡山理科大学における教育・研究交流協定

連携内容：（1）教員の交換
（2）学生の交換 他

協定締結期間(2025年3月31日時点 73機関 ※締結日順)

中小企業金融公庫（現 日本政策金融公庫）岡山支店（2006年2月6日）
国土交通省中国地方整備局（2007年3月5日）
日本ネットワークセキュリティ協会（2007年3月29日）
おかやま信用金庫（2008年2月26日）
国立大学法人岡山大学（2008年6月23日）
有限会社屋久島野外活動総合センター（2008年11月11日）
国立大学法人京都大学化学研究所（2009年8月5日）
株式会社トマト銀行（2009年10月28日）
ナカシマホールディングス株式会社（2009年11月2日）
津山工業高等専門学校（2010年4月1日）
浅口市岡山天文博物館（2011年10月28日）
モンゴル科学アカデミー古生物学研究センター（2013年 10月）
福山市立動物園（2015年 3月5日）
岡山県生涯学習センター（2015年 6月28日）
ワライラック大学（2016年 7月6日）☆
岡山県、大学コンソーシアム岡山、大学コンソーシアム岡山の各加盟校（2015年8月6日）
吉備路文学館（2016年 8月）★
tetta 株式会社、新見市（2017年3月7日）
国立大学法人 愛媛大学（2017年3月14日）
モンゴル国立教育大学（2017年8月23日）
倉敷市（2018年 2月28日）
倉敷市、ふなおワイナリー有限会社（2018年2月28日）
大阪市天王寺動物園（2018年3月13日）
モンゴル生命科学大学（2018年5月14日）
吉備中央町、特定非営利活動法人吉備高原サブライトレーニング（2018年8月31日）
マプア大学（フィリピン共和国）（2018年9月11日）
岡山県立大学（2018年11月27日）
今治市（2018年12月 2 日）
今治市、公益社団法人愛媛県獣医師会（2018年12月2日）
岡山県ゴルフ協会（2019年 2月）★
愛媛県農業共済組合（2019年6月25日）
日本技術士会（2019年 8月5日）
玉島信用金庫（2019年 10月11日）
奈義町教育委員会（2019年 10月25日）
モンゴル国 ナラン学校（2019年11月19日）☆
公益財団法人高知県のいち動物公園協会（2019年12月28日）
広島市安佐動物公園（2020年1月1日）
今治明德短期大学（2020年 2月1日）

姫路セントラルパーク（2020年4月6日）
海の中道管理センター（海の中道海浜公園動物の森）（2020年 3月31日）
公益財団法人沖縄こどもの国（2020年 7月20日）
岡山商工会議所（2020年 9月18日）
大牟田市動物園（2020年 9月20日）
西海国立公園九十九島動物公園（2020年 9月28日）
公益財団法人愛媛県動物園協会（2020年 10月1日）
群馬サファリパーク（2020年 10月1日）
公益社団法人愛媛県獣医師会（2022年10月20日）
愛媛県今治警察署（2020年 10月20日）
鹿児島大学共同獣医学部（2020年12月9日）
バイオパーク株式会社（2020年12月28日）
株式会社東北サファリパーク（2021年1月8日）
徳島市（2021年1月13日）
特定非営利活動法人伝統和文化マナーマイスター協会（2021年1月27日）
岡山県高等学校工業教育協会（2021年3月25日）
地方独立行政法人天王寺動物園（2021年4月1日）
名護自然動植物自然公園株式会社（2021年4月1日）
富山自然動物公園（2021年4月5日）
公益社団法人香川県獣医師会（2021年5月1日）
学校法人国際学園星槎大学（2021年5月31日）
岡山市（2021年8月30日）
公益社団法人高知県獣医師会（2021年9月28日）
国立大学法人愛媛大学大学院医学系研究科、愛媛県立衛生環境研究所
公立大学法人愛媛県立医療技術大学（2021年10月1日）
公益社団法人徳島県獣医師会（2021年10月1日）
徳島県農業共済組合（2022年1月1日）
香川県農業共済組合（2022年1月1日）
高知市（2022年2月4日）
今治警察署（2022年3月3日）
高知県農業共済組合（2022年3月28日）
公益社団法人広島県獣医師会（2022年6月9日）
大阪公立大学工業高等専門学校（2022年8月1日）
公益財団法人おかやま観光コンベンション協会（2022年10月11日）
宮崎県都農町、東日本電信電話株式会社、西日本電信電話株式会社宮崎支店
（2022年12月23日）
一般社団法人岡山県サッカー協会（2023年5月24日）
愛媛県保健福祉部、愛媛県農林水産部（2023年11月16日）
松山市（2023年11月29日）
鹿児島県始良市、学校法人英数学館並木学院高校（2023年12月8日）
島根県農林水産部（2024年3月25日）
一般社団法人瀬戸内観光協会、一般社団法人吉備オープンイノベーション協会
（2024年6月22日）
データスタジアム株式会社（2024年7月10日）

11. 産学官金連携活動

11.1 地域における主な産学官金連携活動

11.1.1 岡山・産学官連携推進会議

岡山・産学官連携推進会議は、産学官連携による岡山県の産業振興を推進することを目的に平成15年3月に設立された。これまでの取組等により、産学官金連携に対する認知度や重要性も高まり、県内でも産学官金が連携した取組が多く展開される状況となっている。

【全体委員会】

構成機関のトップによる全体委員会は、本県の産業振興の大きな方向性について議論する場とし、必要に応じて開催されるが 2023 年度、2024 年度は開催されなかった。

【幹事会】

岡山・産学官連携推進会議全体の企画・運営等について協議、決定する場として、全体委員会の下に設置され、経済界・大学等の代表者が指名する者（実務者レベル）で構成される。推進会議の目的を達成するため、産学官連携情報の発信、コーディネート機能の強化、共同研究・共同開発の機会創出支援、その他必要な事業を行う。

（令和5年度）

行事名	日程	内容	本学参加者
第1回幹事会	令和5年5月30日	（サン・ビーチOKAYAMA） 令和4年度事業実績報告及び収支決算 令和5年度事業計画（案）及び収支予算（案）	中村・桑本
第2回幹事会	令和6年1月22日	（アークホテル岡山） ・「大学と連携した地域産業振興事業」の 事業成果報告について ・令和6年度新規事業の事業概要説明及び 意見交換について	中村・桑本

（令和6年度）

行事名	日程	内容	本学参加者
第1回幹事会	令和6年5月13日	（ピュアリティまきび） 令和5年度事業実績及び収支決算 令和6年度事業計画（案）及び収支予算 （案）	中村・桑本

11.1.2 おかやまコーディネータ情報交換会

大学をはじめとする産業支援機関や産学官連携組織、金融機関等に配置されているコーディネータ等の相互の交流や情報の共有化およびマッチング効果を引き上げるための実践的な活動を通じたネットワークの強化等を行い産学官連携による地域発イノベーションの創出を図る。

（令和5年度）

行事名	日程	内容	本学参加者
おかやま コーディネータ 情報交換会	全6回開催	令和4年度事業実績について 令和5年度事業計画（案）について 能力開発大学校見学、各種講演など	桑本

（令和6年度）

行事名	日程	内容	本学参加者
おかやま コーディネータ 情報交換会	全6回開催	令和5年度事業実績について 令和6年度事業計画（案）について 能力開発大学校見学、各種講演など	桑本・守屋

11.1.3 ミニシーズ発信会

企業と大学の縁結びの場づくりの目的で、テーマを絞った少人数の情報交換会を企業と大学との共同研究センターが主催して実施している。

(令和5年度)

行事名	日程	内容	本学参加者
ミニシーズ発信会 令和5年9月14日	情報理工学部 助教 横田 雅司	「必要な機能を実装するための ロボット設計に関する研究」	桑本

(令和6年度)

行事名	日程	内容	本学参加者
ミニシーズ発信会 令和6年10月29日	情報理工学部 准教授 趙 菲菲	「高度な人間親和性を持つ空間 を利用した介護・リハビリデバ イスの開発について」	守屋

11.1.4 おかやまIoT推進ラボ協議会

岡山県が県内企業に対して、IoT に的確に対応できる企業を増やすことを目指して、各種研修やモデルシステム構築などを実施している。また、オープンデータ、ビッグデータの分析を行うデータサイエンティストの育成支援などにも注力しており、本学も支援機関として参画している。

11.1.5 産学官金連携に関する広報活動（活動の紹介及び広報誌リエゾンの作成・配布）

11.1.5.1 広報活動

外部団体の依頼を受けて、本学の産学官連携についてプレゼンテーション等を行った。

(令和5年度)

依頼団体	日程	本学担当者
岡山自動車関連企業ネットワーク会議	令和5年6月10日	桑本
さんさんコンソ新技術説明会	令和5年7月14日	桑本
第17回岡山県しんきん合同ビジネス交流会	令和5年9月13日	中村
知財総合支援窓口連絡会議	令和5年10月2日	桑本
第8回しんくみビジネスマッチング	令和5年11月8日	中村
リサーチパーク研究テーマ展示会	令和5年12月12日	桑本・中村
スマート農業技術開発プラットフォーム	令和6年2月5日	桑本

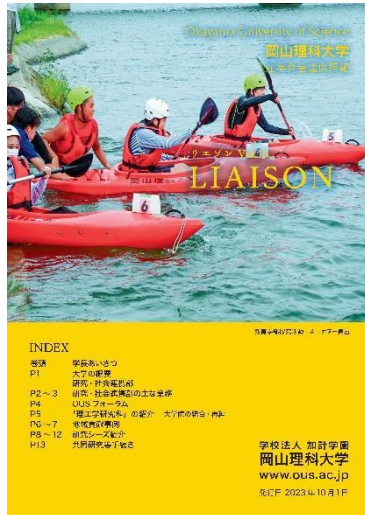
(令和6年度)

依頼団体	日程	本学担当者
岡山自動車関連企業ネットワーク会議	令和6年6月10日	桑本
第18回岡山県しんきん合同ビジネス交流会	令和6年9月11日	中村・守屋
知財総合支援窓口連絡会議	令和6年10月2日	桑本
第9回しんくみビジネスマッチング	令和6年11月13日	中村・守屋
さんさんコンソ新技術説明会	令和6年12月10日	桑本
リサーチパーク研究テーマ展示会	令和6年12月17日	桑本・守屋
スマート農業技術開発プラットフォーム	令和7年1月27日	桑本

11.1.5.1 広報誌「Liaison リエゾン」

本学の産学官金連携活動を紹介する広報冊子「Liaison リエゾン」を2009年度から年1回発行している。同冊子は本学の研究シーズや産学官金連携の紹介を目的に、岡山県内を中心に企業等へ配付し、本学の研究活動の紹介を行っている。

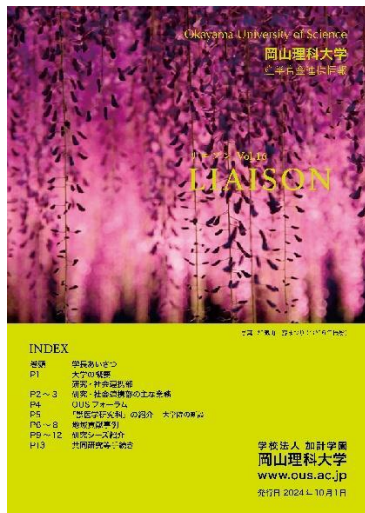
●2023年10月発行 Liaison vol.15



記事掲載・研究者

- ・「高度な専門性と学術性を身につけて、社会の課題を解決する人材を養成」 理工学研究科長 池田 正五
- ・「ちょいと」「いのどーん」教育推進機構 教授 辻 維周
- ・「学生の発想と行動力で街にイノベーションを起こす」
ーイノベーション・ラボ（表町商店街活性化ラボ）の活動報告ー 経営学部 講師 塚常 健太
- ・自宅で撮影したペットの動画で診断する
獣医学部 教授 岩田 恵理
情報理工学部 教授 李 天鎬
- ・「見える化」から「もっと見える化」を促進する定量実験のための教材開発 教育学部 准教授 山下 浩之
- ・動物の体と病気 ～様々な分野の架け橋となる獣医病理学
獣医学部 講師 中村 進一
- ・オープンソースコードを用いた麺生地混練家庭の粉体シミュレーション 工学部 教授 桑木 賢也
- ・ナノセルロースの利活用技術の開発 理学部 准教授 大坂 昇

●2024年10月発行 Liaison vol.16



記事掲載・研究者

- ・新規産業創生を担う、次世代獣医学研究者の養成と産学官金連携の拠点化を目指して 獣医学研究科長 江藤 真澄
- ・ドライブレコーダーデータの見える化で「交通事故抑止への新たな発想と視点」 学生支援機構 教授 平田 豊
- ・若者視点で「矢掛と児島」二つのまちづくりを考えるラボ
ー果実農園他とのコラボによるイノベーションラボー 経営学部 教授 鷲見 哲男
経営学部 講師 藤原 美佳
経営学部 助教 張 善会
- ・四国の鯨類ストランディング調査について 獣医学部 講師 奥田 ゆう
- ・ヒトと動物がともに安心して老いることができる世界の実現に向けて 獣医学部 教授 木村 展之
- ・「いきものQOL」介護リハビリデバイス技術を小動物に応用 情報理工学部 准教授 趙 菲菲
- ・『宇治拾遺物語』と古典の授業 教育学部 講師 井浪 真吾
- ・「機械」と「台風」 工学部 准教授 岩野 耕治

11.2 産学官金連携推進における外部団体役員一覧

(順不同、敬称略)

(岡山地域)

水島工業地帯産学官懇談会	(学長：会員)
岡山県・産学官連携推進会議	
全体委員会	(岡山理科大学：構成メンバー)
幹事会	(中村、桑本：幹事)
岡山県企業誘致推進協議会	(平野、池田正、折田、赤木、岩永、中村、桑本：企業誘致アドバイザー)
大学コンソーシアム岡山	
代表者会議	(学長：会長)
運営委員会	(松浦洋：委員長、片寄：委員)
将来構想委員会	(松浦洋：委員)
共同教育委員会	(松浦宏、小川：委員)
障がい学生支援委員会	(麻原：副委員長)
社会人教育委員会	(松村：委員)
就職支援委員会	(笠：委員)
地域貢献委員会	(高原：委員長)
岡山地区高分子懇話会	(大坂：幹事、山田真：会計幹事)
岡山地区化学工学懇話会	(永谷：幹事)
岡山県医用工学研究会	(神吉、小畑：幹事)
おかやまバイオアクティブ研究会	(三井：幹事)
岡山工学振興会	(清水一：評議員)
岡山新材料技術融合フォーラム	(清水一、中井：幹事)
岡山県 大学と連携した地域産業振興事業おかやま AI・セキュア IoT 共創コンソーシアム	
	(小田：幹事)
岡山県大規模小売店舗立地審査会	(齋藤：委員)
児島湖共同調査研究に関する検討会 (岡山県)	(齋藤、杉山：委員)
岡山県文化財保護審議会	(江面：委員)
岡山県自然環境保全審議会	(小林秀：委員)
岡山県構造計算適合性判定	(小林正：専門委員)
岡山県環境放射線等測定技術委員会	(大橋：委員)
岡山県環境影響評価技術審査委員会	(大橋、二見、小林秀：委員)
岡山県野生動植物調査検討会	(小林秀、矢野、中本、太田：委員)
岡山県公衆浴場入浴料金審議会	(山口隆：委員)
岡山県 防災アドバイザー	(佐藤丈：アドバイザー)
岡山県生涯学習センター運営協議会	(高原：委員)
岡山県生涯学習センター人と科学の未来館サイピア専門委員会	(高原：副委員長)
岡山県ボランティア・NPO 活動支援センター (ゆうあいセンター) 運営委員会	
	(高原：委員)
(一社) 岡山県建築士事務所協会	
CLT 研究開発委員会	(弥田、小林正：委員)
岡山県木造住宅耐震診断評価委員会大規模木造建築物担当部会	
	(小林正：委員)
(一社) 岡山県臨床工学技士会	(堀：副会長)
特定非営利活動法人 NPO 救命おかやま	(堀：理事)
岡山県内水面漁業協同組合連合会 高梁川生態系回復に向けた検討会	
	(齋藤：委員)
岡山県養鰻組合	(山本俊：監査役)
岡山県観光連盟DMO検討委員会	(鷲見：委員)
岡山県河川整備検討委員会	(宮永：委員)

岡山市文化財保護審議会	(亀田：委員)
岡山市環境総合審議会	(杉山：委員)
岡山市自然環境保全審議会	(中村圭：会長)
岡山市水道事業審議会	(山ロー：委員)
岡山市公害対策審議会	(横山崇：会長)
岡山西地区国際化対策連絡協議会	(横山崇：理事)
岡山市景観審議会	(弥田：委員)
岡山市教育委員会	(武山：専門委員)
岡山市都心創生計画策定アドバイザー	(江面：アドバイザー)
倉敷市伝統的建造物群保存地区保存審議会	(江面：委員)
倉敷市文化財保護委員会	(江面：委員)
倉敷市都市計画審議会	(江面：委員)
倉敷市生物多様性審議会	(小林秀：会長)
倉敷科学センター協議会	(福田：委員)
牛窓しおまち唐琴通りの保存と活性化プロジェクト	(山口隆：メンバー)
赤磐市第 2 次山陽遺跡整備委員会	(亀田：委員)
美作市文化財保存活用地域計画策定協議会	(能美：委員)
国立天文台岡山分室 188cm 望遠鏡運営委員会	(福田：運営委員)
(公財) ウェスコ学術振興財団	(池田：選考委員)
(公財) 八雲環境科学振興財団	(佐藤丈：選考委員)
総社市文化財保護審議会	(亀田：委員)
第二次山陽遺跡整備委員会 (赤磐市教育委員会)	(亀田：委員)
史跡備中松山城址等整備委員会 (高梁市)	(亀田：委員)
瀬戸内市文化財保存活用地域計画策定協議会	(能美：委員)
和気町有害鳥獣被害対策協議会	(辻：委員)

(その他)

広島県文化財審議会	(江面：委員)
尾道市歴史文化まちづくり推進協議会	(江面：委員長)
安芸市伝統的建造物群保存地区保存審議会	(江面：委員長)
日田市国重文廣瀬家住宅保存活用委員会	(江面：委員)
日田市文化財保存審議会	(江面：委員)
日田市かん宜園世界遺産登録検討委員会	(江面：委員)
日田市世界遺産登録検討委員会	(江面：委員)
日田市史跡咸宜園整備委員会	(江面：委員)
倉吉市伝統的建造物群保存地区保存審議会	(江面：委員)
大山町所子伝統的建造物群保存地区審議会	(江面：副委員長)
江津市景観計画策定委員会	(江面：委員長)
大洲市歴史的風致維持向上計画推進協議会	(江面：委員)
香川県文化財保護審議会	(江面：委員)
香川県法然寺調査委員会	(江面：委員)
萩市伝統的建造物群保存地区保存審議会	(江面：委員)
渡名喜村伝統的建造物群保存地区保存審議会	(江面：会長)
NPO 法人 日本茅葺き文化協会	(江面：理事)
財団法人 因幡街道ふるさと振興財団	(江面：理事)
大分県指定文化財教尊寺経蔵保存修理委員会	(江面：委員長)
岩国市文化的景観調査検討委員会	(宮本：委員)
明石・神戸アカミミガメ対策協議会	(亀崎：会長)
(公財) 静岡県自然環境保護調査委員会	(亀崎：委員)
(一社) 沖縄美ら島財団	(亀崎：研究顧問)
(公財) 黒潮生物研究財団	(亀崎：理事)
文部科学省文化財審議会 (文化財分科会)	(亀田：専門委員)
吉野ヶ里遺跡古代調査指導委員会 (佐賀県)	(亀田：委員)
福岡県筑前町朝倉古窯跡群調査	(亀田：指導委員)
(公財) 医療機器センター	(堀：臨床工学技士試験委員)
(一社) 日本臨床工学技士教育施設協議会	(堀：監事)
(公社) 日本臨床工学技士会 専門認定制度委員会-2	(堀：委員長)
特定非営利活動法人 REDEEM (医療工学に関する研究・教育事業およびこれに関連する事業)	(松木：理事)
(一財) 統計質保証推進協会事業委員会	(森裕：委員)
広報企画委員会	(森裕：委員長)
(特非) 医学統計研究会	(森裕：理事)
(公社) 日本技術士会中国本部防災委員会	(佐藤丈：委員)
(公社) 日本技術士会中国本部岡山県支部防災委員会	(鎌滝：委員長、佐藤丈：委員)
日本工学教育協会 中国・四国工学教育協会大学部会	(清水一：監事)
大学発新産業創出基金事業「ディープテック・スタートアップ国際展開プログラム」(JST)	(中谷：査読委員)

12. 受賞者

2023年度（令和5年度）、2024年度（令和6年度）において、学会および産学連携の研究発表会において表彰された研究について以下に示す。

（所属・職位は受賞当時のものである）

（教員データベースに記載及び、研究・社会連携部に報告のあったものを掲載している）

(1)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大字 講師（工学部 建築学科） 日本空間デザイン賞 2023 Longlist 入選 一般社団法人 日本商環境デザイン協会, 日本空間デザイン協会（2023 年 6 月）
(2)受賞者名 受賞名 学会・機関名	石田 恭生 講師（経営学部 経営学科） 田中賞（若手最優秀演題賞） 日本登山医学会（2023 年 6 月）
(3)受賞者名 受賞名 学会・機関名	近藤 真史 准教授（工学部 情報工学科） 電子情報通信学会 情報・システムソサイエティ 活動功労賞 電子情報通信学会（2023 年 7 月）
(4)受賞者名 受賞名 学会・機関名	保森 智彦 准教授（教育学部 初等教育学科） スポンサー賞, エクサウィザーズ賞 言語処理学会（2023 年 8 月）
(5)受賞者名 受賞名 学会・機関名	竹谷 浩介 講師（獣医学部 獣医学科） 日本平滑筋学会論文賞 日本平滑筋学会（2023 年 8 月）
(6)受賞者名 受賞名 学会・機関名	川本 大祐 講師（理学部 化学科） 第 27 回奨励賞 DV-X α 研究会（2023 年 9 月）
(7)受賞者名 受賞名 学会・機関名	納村 信之 教授（工学部 建築学科） グッドデザイン賞 公益財団法人日本デザイン振興会（2023 年 9 月）
(8)受賞者名 受賞名 学会・機関名	保森 智彦 准教授（教育学部 初等教育学科） Excellent student Paper Award Knowledge Information and Creativity Support Systems（2023 年 9 月）
(9)受賞者名 受賞名 学会・機関名	田川 道人 准教授（獣医学部 獣医保健看護学科） 令和 4 年度北海道獣医師会雑誌優秀論文賞 北海道獣医師会（2023 年 9 月）
(10)受賞者名 受賞名 学会・機関名	大内 義光 特担助教（獣医学部 獣医学科） 奨励賞 日本畜産学会（2023 年 9 月）
(11)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大字 講師（工学部 建築学科） ウッドデザイン賞 2023 一般社団法人日本ウッドデザイン協会（2023 年 10 月）
(12)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大字 講師（工学部 建築学科） 2023 年度グッドデザイン賞 受賞 公益財団法人日本デザイン振興会（2023 年 10 月）
(13)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大字 講師（工学部 建築学科） アジアデザインアワード 2023 優秀賞 Hong Kong Design Centre（2023 年 10 月）
(14)受賞者名 受賞名 学会・機関名	橋川 直也 准教授（理学部 臨床生命科学科） 2023 年 10 月 両備てい園記念財団 生物学研究奨励賞 両備てい園記念財団（2023 年 10 月）

(15)受賞者名 受賞名 学会・機関名	三阪 一徳 講師（教育推進機構 学芸員教育センター） 第 17 回九州考古学会賞 九州考古学会（2023 年 11 月）
(16)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 講師（工学部 建築学科） アーキテクチュア・マスタープライズ 2023 入賞 アーキテクチュア・マスタープライズ（2023 年 12 月）
(17)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 講師（工学部 建築学科） アジアデザインプライズ 2024 金賞 DESIGNSORI Co., Ltd.（2024 年 2 月）
(18)受賞者名 受賞名 学会・機関名	木村 光宏 講師（学生支援機構 グローバルセンター） 論文賞 グローバル人材育成教育学会（2024 年 2 月）
(19)受賞者名 受賞名 学会・機関名	竹村 明洋 講師（工学部 機械システム工学科） 日本鉄鋼協会第 187 回春季講演大会学生ポスターセッション奨励賞 一般社団法人日本鉄鋼協会（2024 年 3 月）
(20)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 講師（工学部 建築学科） LIV ホスピタリティー デザイン アワード 2023 3C Awards（2024 年 3 月）
(21)受賞者名 受賞名 学会・機関名	松永 望 講師（理学部 臨床生命科学科） 第 34 回生物試料分析科学会年次学術集会 優秀演題賞 生物試料分析科学会（2024 年 3 月）
(22)受賞者名 受賞名 学会・機関名	武山 智博 准教授（生物地球学部 生物地球学科） 第 71 回日本生態学会大会 ポスター賞 優秀賞 日本生態学会（2024 年 3 月）
(23)受賞者名 受賞名 学会・機関名	矢野 興一 講師（生物地球学部 生物地球学科） 2023 年度日本植物分類学会論文賞 日本植物分類学会（2024 年 3 月）
(24)受賞者名 受賞名 学会・機関名	保森 智彦 准教授（教育学部 初等教育学科） 委員特別賞 言語処理学会第 30 回年次大会（2024 年 3 月）
(25)受賞者名 受賞名 学会・機関名	中川 重和 教授（教育推進機構 基盤教育センター） 統計・データサイエンス力向上のための授業に係る優秀事例表彰 公益財団法人 統計情報研究開発センター（2024 年 3 月）
(26)受賞者名 受賞名 学会・機関名	田邊 洋一 准教授（理学部 基礎理学科） UBE 学術振興財団第 64 回学術奨励賞 UBE 学術振興財団（2024 年 4 月）
(27)受賞者名 受賞名 学会・機関名	中川 重和 教授（教育推進機構 基盤教育センター） 日本計算機統計学会 フェロー 日本計算機統計学会（2024 年 5 月）
(28)受賞者名 受賞名 学会・機関名	三阪 一徳 講師（教育推進機構 学芸員教育センター） 第 14 回日本考古学協会賞大賞 日本考古学協会（2024 年 5 月）
(29)受賞者名 受賞名 学会・機関名	大橋 唯太 教授（生物地球学部 生物地球学科） 第 24 回環境情報科学センター賞（学術論文賞） （一社）環境情報科学センター（2024 年 6 月）
(30)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 准教授（工学部 建築学科） デザイン教育賞 2024 佳作 ラカ財団（2024 年 7 月）

(31)受賞者名 受賞名 学会・機関名	小林 宏祐 助教（獣医学部 獣医学科） 奨励賞 ポスターアワード 日本獣医がん学会（2024年7月）
(32)受賞者名 受賞名 学会・機関名	矢城 陽一朗 教授（教育推進機構 基盤教育センター） 第11回「富岳」を中核とする HPCI システム利用研究課題成果報告会における優秀成果賞 一般財団法人 高度情報科学技術研究機構（2024年7月）
(33)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 准教授（工学部 建築学科） パリデザインアワード 2024 佳作 DNA Paris（2024年9月）
(34)受賞者名 受賞名 学会・機関名	堀 純也 准教授（工学部 生命医療工学科） 第10回臨床工学技士養成教員学術研究会 優秀演題発表賞 （一社）日本臨床工学技士教育施設協議会（2024年9月）
(35)受賞者名 受賞名 学会・機関名	藤原 信行 講師（獣医学部 獣医学科） 獣医学奨励賞 日本獣医学会（2024年9月）
(36)受賞者名 受賞名 学会・機関名	豊後 貴嗣 教授（獣医学部 獣医保健看護学科） Animal Science Journal Reviewers Award 日本畜産学会（2024年9月）
(37)受賞者名 受賞名 学会・機関名	宮部 真裕 講師（獣医学部 獣医保健看護学科） 奨励賞 日本動物看護学会（2024年9月）
(38)受賞者名 受賞名 学会・機関名	クルモフ バレリー 教授（工学部 電気電子システム学科） Certificate of Appreciation IEEE（2024年10月）
(39)受賞者名 受賞名 学会・機関名	牧 涼介 講師（工学部 応用化学科） FDR2024 Selected Paper International Topical Workshop on Fukushima Decommissioning Research 2024 (FDR2024)
(40)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 准教授（工学部 建築学科） アーキテクチュア・マスタープライズ 2024 佳作入選 アーキテクチュア・マスタープライズ（2024年10月）
(41)受賞者名 受賞名 学会・機関名	山下 浩之 准教授（教育学部 初等教育学科） ポスターセッション優秀賞 アジア生物教育協議会（2024年10月）
(42)受賞者名 受賞名 学会・機関名	馬淵 大宇 准教授（工学部 建築学科） 2024 ロンドン優秀物件賞 ロンドン優秀物件賞（2024年11月）
(43)受賞者名 受賞名 学会・機関名	牧 涼介 講師（工学部 応用化学科） ヤングセラミスト大賞(研究部門) 第30回ヤングセラミスト・ミーティング in 中四国（2024年12月）
(44)受賞者名 受賞名 学会・機関名	横山 ひとみ 准教授（経営学部 経営学科） 情報処理学会論文誌ジャーナル/JIP 特選論文 論文誌ジャーナル/JIP 編集委員会幹事会（2025年1月）
(45)受賞者名 受賞名 学会・機関名	後藤 聡 准教授（獣医学部 獣医学科） 症例検討 Award 日本獣医内科学アカデミー（2025年2月）
(46)受賞者名 受賞名 学会・機関名	堀 純也 准教授（工学部 生命医療工学科） 第17回日本医療教授システム学会 事例検討発表 優秀賞 日本医療教授システム学会（2025年3月）

(47)受賞者名	堀越 亮 教授（教育推進機構 基盤教育センター）
受賞名	化学コミュニケーション賞 2024
学会・機関名	（一社）日本化学連合（2025 年 3 月）

13. 活動報告

【研究・社会連携部、研究社会連携センターが調整を担当する会議等】

●全学研究推進会議

2023年度		2024年度	
	実施なし		実施なし

●研究・社会連携委員会

2023年度		2024年度	
第1回	2023年5月31日	第1回	2024年6月5日
第2回	2023年7月27日	第2回	2024年7月22日
第3回	2023年9月13日	第3回	2024年9月12日
第4回	2023年11月1日	第4回	2025年1月17日
第5回	2024年2月7日		

●研究・社会連携機構打合せ会

2023年度		2024年度	
毎週1回開催		毎週1回開催	

●研究・社会連携機構会議

2023年度		2024年度	
第1回	2023年4月5日	第1回	2024年4月4日
第2回	2023年4月18日（メール審議）	第2回	2024年4月4日（メール審議）
第3回	2023年6月7日	第3回	2024年6月5日
第4回	2023年7月5日	第4回	2024年7月3日
第5回	2023年9月6日	第5回	2024年9月4日
第6回	2023年10月4日	第6回	2024年10月2日
第7回	2023年11月1日	第7回	2024年11月6日
第8回	2023年12月6日	第8回	2024年12月4日
第9回	2024年1月10日	第9回	2025年1月17日
第10回	2024年2月7日	第10回	2025年2月5日
第11回	2024年3月6日	第11回	2025年3月5日

●研究・社会連携機構会議（専任）

2023年度		2024年度	
第1回	2023年6月7日	第1回	2024年8月1日（メール審議）
第2回	2023年8月2日	第2回	2024年9月3日
第3回	2023年 9月6日	第3回	2024年9月24日（メール審議）
第4回	2024年1月10日	第4回	2025年1月17日
		第5回	2025年2月5日

●研究・社会連携機構教員会議

2023年度		2024年度	
	実施なし		実施なし

●研究・社会連携部会

2023年度		2024年度	
第1回	2023年4月5日	第1回	2024年4月4日
第2回	2023年11月17日	第2回	2024年12月4日
第3回	2024年2月7日	第3回	2025年3月5日

●職務発明判定委員会

2023年度		2024年度	
第1回	2023年4月24日	第1回	2024年6月13日
第2回	2023年5月22日	第2回	2024年8月5日
第3回	2023年6月16日	第3回	2024年9月30日
第4回	2023年6月28日	第4回	2024年10月7日
第5回	2023年7月19日	第5回	2024年11月8日
第6回	2023年8月28日	第6回	2025年1月7日
第7回	2023年9月8日	第7回	2025年1月21日
第8回	2023年9月15日	第8回	2025年3月10日
第9回	2023年10月19日		
第10回	2024年11月24日		
第11回	2024年12月25日		
第12回	2024年1月16日		
第13回	2024年1月26日		
第14回	2024年3月12日		

●岡山理科大学輸出管理委員会

2023年度		2024年度	
	実施なし	第1回	2024年10月23日

●学生向け知的財産セミナー

2023年度		2024年度	
第1回	2023年12月6日	第1回	2024年12月4日
第2回	2023年12月13日	第2回	2024年12月11日
第3回	2023年12月20日	第3回	2024年12月18日

●教職員向け知的財産セミナー

2023年度		2024年度	
加計学園の知的財産の 取り扱い	2023年12月6日	通信教育の講義作成 時の留意事項	2024年7月18日

●プロジェクト研究推進事業

2023年度		2024年度	
報告会	2024年2月29日	報告会	2025年2月27日
公聴会	2024年3月1日	公聴会	2025年2月28日

●研究者交流会

2023年度		2024年度	
2024年2月27日～2024年2月28日		2025年2月27日～2025年2月28日	

●大型機器選定

2023年度		2024年度	
公聴会	2023年9月21日	公聴会	2024年10月30日

●OUSフォーラム出展者説明会

2023年度	2024年度
2023年11月27日	2024年11月25日

●科研費説明会

2023年度	2024年度
科研費応募にむけて 2023年5月17日	科研費応募説明会 2024年7月16日
科研費応募説明会 2023年7月18日	科研費事務説明会 2024年7月22日

●市民公開講座

2023年度		2024年度	
第1回	2023年5月27日	第1回	2024年5月25日
第2回	2023年6月17日	第2回	2024年6月15日
第3回	2023年7月1日	第3回	2024年7月13日
第4回	2023年8月26日	第4回	2024年8月10日
第5回	2023年9月30日	第5回	2024年9月28日
第6回	2023年10月21日	第6回	2024年10月5日
第7回	2023年11月4日	第7回	2024年11月2日
第8回	2023年12月3日	第8回	2024年12月7日
第9回	2024年3月2日	第9回	2025年3月22日

●安全保障輸出管理に関するFD・SD講演会

2023年度		2024年度	
	実施なし	第1回	2024年9月12日
		第2回	2024年11月6日
		第3回	2024年12月4日
		第4回	2025年3月5日

14. 人事の推移

14.1 研究・社会連携機構、研究・社会連携センター、研究・社会連携部

(就任年度順、2025年3月)

○南 善子 (副学長兼機構長 2022年度)
 ○折田 明浩 (副機構長兼センター長 2018年度)
 ○林 良太 (次長 2022年度)
 ○濱田 隆宏 (次長 2024年度)
 中村 修 (教授 2016年度)
 ○御倉 賀恵 (部長 2024年度)
 ○村上 和彦 (参事 2021年度)
 ○小野 博之 (課長 2024年度)
 ○桑本 誠 (参与 産学連携コーディネータ 2016年度)
 守屋 雅夫 (参与 産学連携コーディネータ 2023年度)
 ○太田 謙 (事務職員 2017年度)
 ○倉藤 美紀子 (事務職員 2018年度)
 ○埋見 将弘 (事務職員 2023年度)
 ○坪田 あずさ (事務補佐 2022年度)
 井上 祐貴子 (事務補佐 2023年度)
 岩永 廣子 (事務補佐 2024年度)

() 内は役職及び就任期間

○白書編集担当者

14.2 研究・社会連携機構、研究・社会連携センター、研究・社会連携室(部)

(2018年度～2024年度)

平野 博之 (副学長兼機構長 2018年度～2021年度)
 南 善子 (副学長兼機構長 2022年度)
 折田 明浩 (副機構長兼センター長 2018年度)
 赤木 徹也 (副センター長 2018年度～2019年度)
 (センター次長 2020年度～2021年度)
 岩永 哲夫 (次長 2018年度～2023年度)
 林 良太 (センター次長 2022年度)
 濱田 隆宏 (次長 2024年度)
 中村 修 (教授 2016年度)
 御倉 賀恵 (室長 2017年度～2018年度)
 (部長 2024年度)
 國上 巧一 (部長 2019年度～2023年度)
 竹内 雅彦 (次長兼課長 2018年度～2020年度)
 荒木 祥行 (次長 2020年度～2021年度)
 村上 和彦 (参事兼課長 2021年度～2023年度)
 (参事 2024年度)
 小野 博之 (課長 2024年度)
 藤原 俊明 (参与 2017年度～2023年度)
 桑本 誠 (産学連携コーディネータ 2016年度～2018年度)
 (参与 産学連携コーディネータ 2019年度)
 多田 昭利 (産学連携コーディネータ 2017年度～2018年度)
 西田 典秀 (参与 産学連携コーディネータ 2019年度～2022年度)
 守屋 雅夫 (参与 産学連携コーディネータ 2023年度)
 竹原 誠 (参与 産学連携コーディネータ 2024年度)
 藤原 誉子 (事務職員 2017年度～2023年度)
 太田 謙 (事務職員 2017年度)

倉藤 美紀子 (事務職員 2018年度)
 埋見 将弘 (事務職員 2023年度)
 近藤 美和子 (事務補佐 2016年度～2019年度)
 堀田 和美 (事務補佐 2018年度)
 井上 祐貴子 (事務補佐 2019年度～2021年度)
 (事務補佐 2023年度)
 難波 妙子 (事務補佐 2020年度)
 藤原 智子 (事務補佐 2021年度～2022年度)
 坪田 あずさ (事務補佐 2022年度)
 佐藤 美帆 (事務補佐 2022～2023年度)

14.3 研究推進機構、研究連携支援センター、研究連携支援室

(2016年度～2017年度)

星野 卓二 (副学長兼機構長 2016年度～2017年度)
 松浦 洋司 (副機構長兼センター長 2016年度～2017年度)
 三井 亮司 (副センター長 2016年度～2017年度)
 近藤 千尋 (次長 2016年度～2017年度)
 中村 修 (教授 2016年度)
 御倉 賀恵 (参事兼課長 2016年度)
 (室長兼課長 2017年度)
 船本 利春 (室長 2016年度)
 横溝 精一 (参与 産学連携コーディネータ 2016年度)
 桑本 誠 (産学連携コーディネータ 2016年度)
 中山 良子 (事務職員 2016年度～2017年度)
 岡戸 真理子 (事務職員 2016年度～2017年度)
 藤原 誉子 (事務職員 2017年度)
 太田 謙 (事務職員 2017年度)
 細木 真麻 (事務補佐 2016年度)
 近藤 美和子 (事務補佐 2016年度)
 林 里美 (事務補佐 2016年度～2017年度)

14.4 学外連携推進室

(就任年度順、1999年度～2015年度)

滝 晨彦 (室長 1999年度～2005年度)
 瀧本 孝志 (課長 1999年度～2003年度)
 平松 和子 (事務職員 1999年度)
 辻 歩 (事務職員 2000年度～2004年度)
 吉田 茂二 (参与 産学連携コーディネータ2002年度～2004年度)
 新倉 正和 (教授 産学連携コーディネータ2003年度～2013年度)
 田邊 昇 (参事 2004年度～2008年度)
 黒田 由紀子 (事務職員 2004年度～2005年度)
 猶原 順 (次長 2005年度～2007年度)
 倉藤 美紀子 (事務職員 2005年度～2008年度)
 金枝 敏明 (室長 2006年度～2013年度)
 (顧問 2014年度～2015年度)
 白神 陽子 (事務職員 2006年度～2008年度)
 安井 茂男 (産学連携コーディネータ 2006年度～2015年度)
 細木 真麻 (事務補佐 2007年度～2015年度)
 高原 周一 (次長 2008年度～2010年度)
 財部 健一 (副室長 2008年度)
 木村 宏 (副室長 2008年度～2012年度)

池田 正五 (副室長 2009年度)
 金子 典正 (次長 2009年度～2011年度)
 御倉 賀恵 (課長 2009年度～2014年度)
 (参事兼課長 2015年度)
 瀬戸 徹也 (事務職員 2009年度～2015年度)
 益岡 典芳 (副室長 2010年度～2011年度)
 小夜 美知子 (課長 2010年度)
 横溝 精一 (参与 産学連携コーディネータ 2010年度～2015年度)
 松浦 洋司 (次長 2011年度～2013年度)
 谷本 文奈 (事務職員 2011年度～2013年度)
 三井 亮司 (次長 2012年度～2015年度)
 江見 智嘉 (参事 2012年度～2013年度)
 堂田 周治郎 (副室長 2013年度)
 守屋 薫 (事務補佐 2013年度～2014年度)
 平野 博之 (室長 2014年度～2015年度)
 島田 英之 (副室長 2014年度～2015年度)
 中村 修 (教授 産学連携コーディネータ 2014年度～2015年度)
 太田 慶之 (主任 2014年度)
 今井 俊夫 (事務職員 2014年度)
 桑本 誠 (産学連携コーディネータ 2015年度)
 中山 良子 (事務職員 2015年度)

15. 研究・社会連携白書編集を終えて

研究・社会連携センター次長 林 良太

本学は、「学生の成長に主眼をおく人材育成拠点」となることを宣言し、これを実現するために、教育を支える質の高い研究の実践、国際化の展開、地域社会との連携を推進しています。この活動を支えるために、研究・社会連携部が2023年度から2024年度に総力を挙げて取り組んだ活動の実績をこの「研究・社会連携白書2024」にまとめました。研究・社会連携部では、本学の理念に沿った明確な方針・目標として「岡山理科大学ビジョン2026」に掲げられた「教育を支える個性的で魅力ある研究を推進する大学」、「地域の課題解決や活性化に貢献し、地域と共に発展する大学」、「明確なブランド形成とその浸透」の目標の実現に向けてまい進してきました。

研究の活性化に向けた取り組みにおいては、優れた研究グループおよび若手研究者の重点化・拠点化を目的として2016年度にスタートした「岡山理科大学プロジェクト研究推進事業」により、継続的に本学を代表する特色ある研究の成果が得られています。また、2023年度から毎年2月末に「OUS研究者交流会」を開催しており、岡山キャンパスだけでなく今治キャンパスの研究者も参加し、専門分野の異なる研究者が交流を深めています。毎年約100件のポスター発表があり、この2年間で延べ約500名が参加しています。質の高い研究の実践と国際化への展開を支援する取り組みにおいては、2022年度から継続して「海外との連携等に関する実績調査」を毎年度実施しており、調査結果を学内の研究者に公表しています。また、2024年度から「国際ジャーナル論文投稿支援事業」を開始して、優れた研究に対して国際ジャーナルの掲載料の一部を負担しています。外部資金の獲得に向けた取り組みとしては、主に科学研究費補助金獲得のための申請書のブラッシュアップやレビューミーティングのサポートを従来どおり実施しており、岡山理科大学における科研費の高い採択実績の維持・向上に寄与しているものと考えています。

地域社会との連携においては、2022年度から開催している「岡山理科大学市民公開講座『山の寺子屋で学ぼう！』」が、一般の参加者から満足度の高い評価をいただいています。2023年度および2024年度は、それぞれ9回の講座を実施しましたが、受け入れ可能な受講者数に限界があるため、受講の申し込み時にキャンセル待ちをお願いすることがあるほどの高い人気を集めています。

岡山理科大学の研究者の多様なシーズを地域へ広く発信するため、毎年開催しているOUSフォーラムは、2023年度はシーズ出展数88件・参加者約300名、2024年度はシーズ出展数112件・参加者約400名と、この2年間は増加傾向にあり活発な交流が行われています。引き続き皆様のご意見をいただきながら、岡山理科大学の多様なシーズを広く発信するとともに、研究者間の交流を促進し、個性的で魅力ある研究のさらなる活性化を支援してまいります。

今後とも、皆様のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

研究・社会連携部 一同
2026年3月

岡山理科大学ビジョン 2026（改定版）について

岡山理科大学は「学生の成長に主眼をおく人材育成拠点」となることを宣言し、これを実現するために、5つの柱で構成する「岡山理科大学ビジョン 2026」を掲げています。

この「ビジョン 2026」に基づき、第Ⅰ期アクションプランとして2017年度から5カ年の中期目標・中期計画を、全学的に一体感をもって実行してきました。2022年度より現在の社会情勢の変化をふまえ、本学の将来を見据えた課題に対応するため、新たに2つの柱「明確なブランド形成とその浸透」「ニューノーマルなキャンパスライフを支えるDXの推進」を追加し、重点的に取り組んでいきます。

岡山理科大学ビジョン 2026（改定版）

2021.7.28 大学協議会

岡山理科大学は昭和39年に理学部応用数学科、化学科の単科大学として発足しました。それ以降、産業社会の変遷（工業化社会、情報化社会、知識基盤社会）に呼応して学部学科を改組・新設し、現在では人文科学・社会科学系の学問領域をも包含した中国・四国地区の私立大学で最大の収容定員を擁する理工系総合大学へと発展しています。その根底には、常に時代を先取りし、社会の要請に応えることを旨とする経営方針と、学生と教員とが共に学ぶ学風のもと、創造的で実践的な力を培うことを旨とした教育方針が息づいています。グローバル化の進展した現代社会においては、どのような社会的事象であっても多くの要因が複雑に絡み合い、地域レベルでも世界レベルでも政治・経済・環境等はダイナミックで予測困難な変化を見せています。このような社会においては、自己を確立すると同時に外的変化に柔軟に対応し、他者との協調・協働に基づき新たな価値を創造する力が強く求められます。本学が理想とするのは、まさにこのような変化に適応できる人材の育成です。本学の教育目標は、自ら考え、行動し、失敗を恐れずに粘り強く取り組むとともに、目的達成のために多様な人と協働できる人材を地域社会・国際社会に輩出することです。今回のビジョン制定にあたり、本学が「学生の成長に主眼をおく人材育成拠点」となることを宣言します。これを実現するために、学生、教員、職員が共に学び、協調・協働の精神に満ちた大学を目指し、教育を支える質の高い研究の実践、国際化の展開、地域社会との連携を推進します。また、それらを継続的に改革・改善するために、不断に自己点検・評価を行い、教職協働による内部質保証システムを確立します。そのため、以下の5つの柱を掲げ、大学運営の指針とします。

1. 学生ひとりひとりが成長を実感できる人材育成拠点

本学の学生は、理工系の特色を生かした実践的な教育によって、論理的に考える力や課題解決能力を身につけ、実社会において有為な人材として高い評価を受けてきました。激しい変化が予想されるこれからの社会では、これらの能力に加えて、一歩踏み出す力や果敢なチャレンジ精神が求められます。そのためには、多様な価値観をもつ人から成る集団（コミュニティ）に身を置いてさまざまな人間関係の中で経験を積み、「やればできる」という自信をつけることが大切です。このような認識を踏まえ、正課教育ではひとりひとりの好奇心や探究心を起点として、未知な問題に主体的に関わる活動によって思考力や創造力を育みます。それに加えて、グループワークやフィールドワークを重視した体験型の学びによって、コミュニケーション能力、協調性、課題発見・解決能力等を高めます。正課外においては、サークル活動などの同世代コミュニティ、地域ボランティア活動などの多世代コミュニティ、海外との相互交流による異文化コミュニティ等を積極的に形成・活用し、学生が自分の心身を鍛え、己の殻を打ち破るような機会を提供します。入学から卒業までこれらの活動に意欲的に取り組み、生き生きとした学生生活が送れるよう、本学は学生支援（修学支援、生活支援、キャリア支援）を総合

的に展開し、教育と学生支援の両輪によって、学生が人間的に大きく成長できる人材育成拠点となることを目指します。

2. 教育を支える個性的で魅力ある研究を推進する大学

本学では草創期から、充実した研究設備や機器を備えた環境の中で教員は高いレベルの研究を行い、数多くの優れた研究成果を上げてきました。学生たちは学究的雰囲気の中で教員と一緒に研究を推進し、研究の魅力や面白さを体得し、その経験によって自分の能力や個性を伸ばしてきました。このような伝統を踏まえて、本学の魅力を深化させる推進力として、独創的な研究や探究心を喚起する研究をさらに活性化させます。そのために、学内外の教員・研究者との共同研究を促進し、国際的な視野に立った先端的・学際的な研究や地域の発展に貢献できる研究を展開します。また、教員の最新の研究成果を学部教育や大学院教育に反映させることによって教育レベルの向上を図ります。さらに、優れた研究課題に対してプロジェクトチームを編成して取り組むとともに、研究の重点化を推進し、本学の魅力や価値を高め、ブランド力の向上を図ります。学長のリーダーシップのもとで全学的な研究推進体制を強化し、これらの取り組みを効果的に行うことで、個性的で魅力ある研究拠点となることを目指します。

3. 世界から人々が集い、国際性豊かな人材を輩出する大学

グローバル化した現代社会では、価値観や資質・能力の異なる人々が協働して課題解決に取り組む姿勢が求められます。そのためには、専門知識・技能の修得のみならず、異なる文化や価値観を持った人々と触れあい、違和感なくコミュニケーションが図れる能力を育成する必要があります。本学では、「我が国と世界各国との共存共栄を図るためには国際交流が不可欠である」との創立者の強い思いのもと、他大学に先駆けて多くの海外の教育機関と協定を結び、交流を継続してきました。今後、ますますグローバル化が進展する中で、世界で通用する人材を育成するには、交流の質を一段と高めることが重要です。そのために、本学は①世界から人々が集う国際水準の教育・研究体制の構築、②海外留学、研究発表等による海外派遣の促進、③コミュニケーション力向上や異文化理解のためのキャンパスの国際化に取り組めます。これらの組織的な展開によって、学生の国際交流の機会を拡充し、諸外国との共存共栄に貢献できる人材を育成します。

4. 地域の課題解決や活性化に貢献し、地域と共に発展する大学

大学にとって地域社会との連携や社会貢献は、教育、研究と並ぶ本来的な役割のひとつであり、大学はその知的資源や人材を活用して地域の活性化に貢献する使命を帯びています。一方、地域にとって大学の学生・教職員は、教育研究のために地域をフィールドとする利用者であると同時に、地域の再生や活性化を担う主体者でもあります。このような認識のもと、本学は地域と共に発展する大学として、地域住民、産業界、行政機関、教育機関、NPO などさまざまな地域ステークホルダーと連携を密にし、地域社会や地場産業が抱えている問題に対して、共に考え、協働して取り組み、地域に新しい価値を創出します。また、学生たちは実践的な学びを通して地域コミュニティで自らを鍛え、人間的に成長を遂げるとともに、若者の斬新な発想や果敢な行動力によって地域に活気をもたらします。今後、本学は他の教育研究機関とも連携しながら地域との繋がりを深め、地域連携ネットワークの中核的な役割を果たし、地域とともに持続的な発展を目指します。

5. 明確な方針と的確な組織マネジメントに基づく内部質保証システムの確立

内部質保証とは、自らの責任で自校の諸活動について点検・評価を行い、その結果をもとに改革・改善に努め、これによって、その質を自ら保証することです。そして、内部質保証シス

テムとはこの質保証を継続させていくための方針・体制・手続きなどの仕組みを指します。我が国に大学評価制度が導入されて以来、教育面を中心に内部質保証の重要性が謳われていますが、本学も含めほとんどの大学でまだ「システム」と呼ばれるほど体系的に整備されていないのが現状です。本学は、自らの責任で質を維持し向上させる自律的な仕組みを構築するために、内部質保証システムの主要な構成要素である①方針と責任体制の明確化、②定期的な点検・評価、③情報の収集と分析、④教職員の能力開発に重点的に取り組みます。それらに基づいて全学、部局（学部・研究科等）、個人それぞれのレベルで PDCA サイクルを適切に機能させ、相互に有機的に関連づけることによって内部質保証システムの確立を目指します。

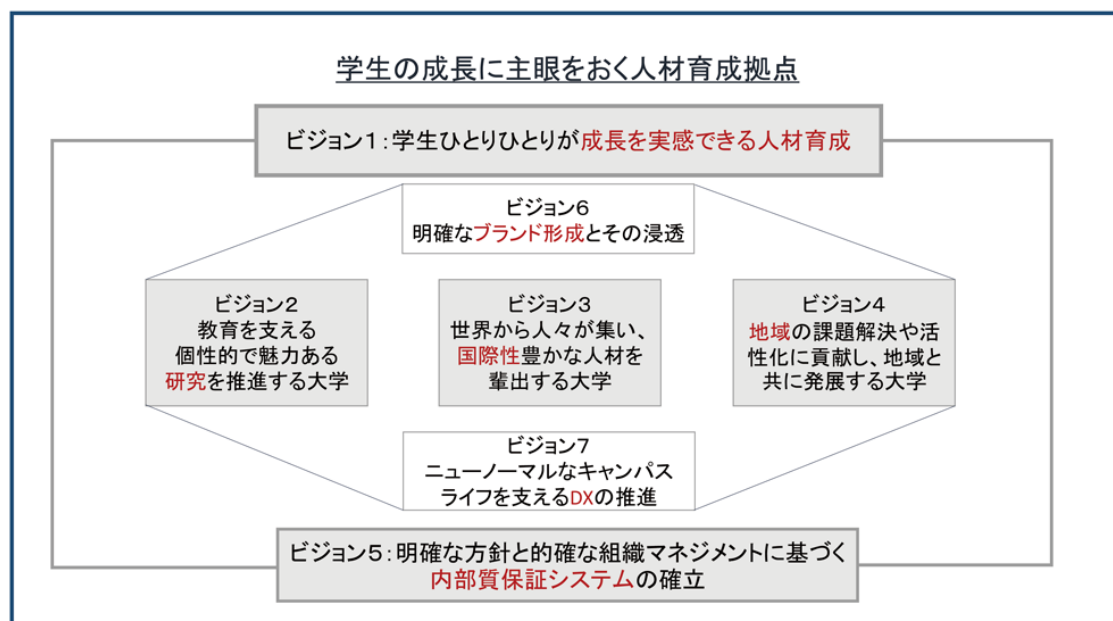
第Ⅱ期アクションプラン(2022-2026)の策定にあたり、私学を取り巻く情勢変化をふまえ、新たに 2 つの重点事項をビジョンの柱に追加し全学的に取り組むこととしました。これらの柱は、既存のビジョンに含めるのではなく、以下に加える形式とします。（第 3 回全学評価・計画委員会 2021. 7. 13 承認）

6. 明確なブランド形成とその浸透

18 歳人口が減少する中で「選ばれる大学」となるためには、教育、研究、学生の活動それぞれの面で、本学「ならでは」や「らしさ」をより明確にし、ステークホルダーに継続的に訴えていくことが必要です。本学は、学生が成長を実感できる教育を展開している大学であることや、補助金事業、地域連携、特色ある取り組みなどから研究力のある大学であることは認識されています。これらの特徴をブランドとしてレベルアップさせ、さらに学生の活動も大学の顔となるようにしっかり支援していくことがますます重要になってきます。このような状況を踏まえ、①学習支援や教育改善を推進し、教育面のブランド価値を定着させる、②個性的で魅力ある研究をブランドとしてさらに磨きをかけ、研究面のブランド力を向上させる、③準正課教育や正課外における学生の活動を積極的に推奨・支援し、学生活動におけるブランド形成を図ることに取り組んでいきます。また、戦略的なメディアミックスにより、本学としてのブランドの定着と浸透を図ります。

7. ニューノーマルなキャンパスライフを支える DX の推進

コロナ禍後のニューノーマル社会に適応した新しいスタイルのキャンパスライフを創造するためには、先端情報技術を活用することが不可欠です。学長のリーダーシップのもとに全学的な DX 推進体制を早急に整備し、学生ひとりひとりが成長を実感できるためのシステムを構築します。そこに蓄積される教育ビッグデータの AI 分析を活用することにより、学生ひとりひとりの成長が可視化出来るだけでなく、その成長過程に対して積極的にアドバイジングすることで、教育の高度化を実現します。また、実践力・探求力やコミュニケーション力を養う対面授業を重視しつつ、時間や距離の制約から解放されるオン ライン授業を併用した新しい教育スタイルへの転換を図ります。本学は、この DX 推進により創造される新たな付加価値を学生・教職員で共有して、ニューノーマルなキャンパスへと生まれ変わります。理工系総合大学の責務として、情報セキュリティの知識と情報技術を修得し、社会が切望している DX の推進に貢献できる人材を輩出していきます。



岡山理科大学 2023 年度事業計画(抜粋)

Ⅱ．研究の推進

1．研究推進のマネジメント強化に関する中期目標

研究推進のマネジメントを強化するために、本学に適した URA 体制のもと、競争力のある研究シーズの把握、発掘、支援、成果発信を行う。

中期計画	2023 年度事業計画	
【27】研究・社会連携機構を中心として、URA 業務を担う人材の育成、公的研究機関等の予算配分動向等の把握、IR を利用した研究力分析を行う。	【27】-1	科研費や他の公的研究費の動向を調査・分析し、研究者の応募支援に活用する。
	【28】-1	協定機関（フィリピン・マプア大学、モンゴル科学アカデミー、モンゴル生命科学大学など）との連携をさらに推進するために、コロキウムなど（オンラインを含む）を開催する。
【28】研究をグローバルに展開するための基盤を整備し、国際競争力のある研究を推進する。	【28】-2	IR 利用で研究者の海外共同研究力を調査・分析し、研究者、大学院生の共同研究先への派遣、国際学会での発表、海外研究者の招聘などを推進する。

2．研究の重点化やブランド力の向上に関する中期目標

研究の重点化とブランド力向上のために、個性的で魅力ある研究を新たに発掘し、波及効果の高い研究成果の創出と情報発信を行う。

中期計画	2023 年度事業計画	
【29】研究シーズの融合を促し、学内・学園内共同研究を活性化し、新たな重点研究組織を構築する。	【29】-1	大学の第 4 のブランド「いきもの QOL」プロジェクトを推進するために、獣医学と工学、情報工学との共同研究チームの活動を支援する。さらに、理学など異分野との研究チーム結成の可能性を探るために、勉強会などの開催を促す新たな事業を構築する。
	【29】-2	全学的な研究支援事業の合同研究成果報告会を開催し、各研究者に広く参加を求める。これらの報告会や学内で開催されるセミナー、シンポジウムなどを通して、学内あるいは学園内での研究ディスカッションの機会を増やす。そのほか、学部の懇話会、少人数での勉強会の設置などを支援する。
【30】大学が関わる（主催あるいは共催）公開シンポジウムを開催し、特徴的な研究成果を発信する。	【30】-1	各研究施設、学部や学科、あるいは研究者個人が誘致し、学内で開く学会等で、一般に公開できる公開講座やシンポジウムの開催（主催あるいは共催）を支援する。開催の際には、広く参加者を募り、メディアにも公開する。

3．研究成果の社会実装の推進に関する中期目標

研究成果の社会実装を推進するために、研究シーズと社会ニーズのマッチングを行う。

中期計画	2023 年度事業計画	
【31】学外に向けて、研究シーズをわかりやすく情報発信するとともに、社会実装できる研究テーマを発掘し、共同研究や知財化につなげる。	【31】-1	各研究者の SDGs への取り組みなどを加え、学外の特許家にもわかりやすい内容にするため、研究者ナビゲーターの改訂を行い、Web ページで広く情報発信する。また、OUS フォーラムなどのイベントにより、学外に向けて研究シーズの情報発信を行う。
	【31】-2	研究機関、企業、行政機関、金融機関などで構成される既存のネットワークや新規のネットワークに加わ

		り、社会的要請の強いニーズの情報を集め、分析し、ニーズに対応可能な研究者に打診し、新規の共同研究や受託研究につなげる。
--	--	---

IV. 地域社会との連携

1. 地域産業活性化に関する中期目標

包括連携協定を締結した自治体等との緊密な連携を推進するとともに、協働によって地域の課題解決やイノベーション創出に寄与する。

中期計画	2023 年度事業計画	
【39】地域・社会連携を担う本学の組織体制を明確にするとともに重点的に連携する地域を選定する。	【39】-1	重点的に連携する地域・自治体との協議を重ね、連携事業を確定する。Web ページに地域のコアとなる企業の情報と本学研究者ナビゲーターを掲載し、相互に情報を参照できるようにすることで自治体と大学の情報を“見える化”する。
【40】自治体等との定期的な協議を通して、地方の活力を生み出す産業（新製品・新技術、特産品、サービス等）のニーズを引き出し、これに応える産学官共同研究を実施する。	【40】-1	自治体との定期的な協議によりニーズを探り、共同研究を進めるために、ニーズに合わせた WG を形成し、具体的な共同研究の実施を開始する。
	【40】-2	産学官共同研究に合わせ、学生及び地域の人材の交流を行う。

2. 地域の学びの拠点形成に関する中期目標

本学の保有する知的資源を広く開放することによって、児童・生徒、社会人、並びに一般市民のための学習機会を提供するとともに、知的交流拠点を形成する。

中期計画	2023 年度事業計画	
【41】地元の児童・生徒のために、科学ボランティア活動など地域貢献に繋がる準正課教育を拡充させ、体験イベント、フィールドワーク、課題研究等の教育イベントを実施する。	【41】-1	地元の児童・生徒と学生の双方の成長を図るため、学生の科学ボランティアによる科学実験や体験型イベントなどを充実させ、参加人数を増やす。
【42】社会人のために、公開講座・リカレント教育プログラムを開発し実施する。	【42】-1	岡山キャンパスでの市民公開講座を今治キャンパスの市民公開講座と合わせて、持続的に開催するため、Web ページやチラシ、SNS などを利用して、地域住民に広く情報を発信する。
	【42】-2	実施可能なリカレント教育プログラムの開発に着手し、プログラムを完成させる。
【43】ブランド広報のために、本学施設を活用するなどした公開講座を開発し実施する。	【43】-1	体験型市民公開講座を継続し、本学の研究力・ブランド力を地域に広く知ってもらおう。また、学内の施設（恐竜、ワイン、好適環境水、サイエンスドリームラボ、総合機器センターなど）の見学、体験実験、体験ワークなどに対して、広く地域に募集をかける。これらの募集及び実施結果をメディアに公開するとともに、Web ページやチラシなどで情報の周知を徹底する。

3. 地域を支える人材の輩出に関する中期目標

地域の課題解決に向けて考え、行動できる人材など、地域の担い手となる次世代のリーダーを輩出する。

中期計画	2023 年度事業計画	
【44】学生の問題解決能力やコミュニケーション力を養う PBL に加えて、創造性と感性を養うアート思考	【44】-1	地域や地元企業が抱える具体的な相談事や課題を収集し、その課題にあたる学生のコーオプ教育を行う。

を取り入れるなどした実践的な教育を展開し、地域を担うリーダーを養成・輩出する。		
---	--	--

岡山理科大学 研究・社会連携部